
ちょっと背伸びな k i s s

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちょっと伸びなきss

【Zコード】

Z5507T

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

白玉楼の大掃除の日

主である西行寺幽々子は侍女達の目を盗み、こつそり庭の蔵へと忍び込んでいた

古ぼけた物品が散らばる中、ふと幽々子は小さな写真を見つけたセピア色に染まる小さな写真

そこには幽々子と妖夢と、それから一人の少年が写っていた名を『夕凪千花』

それは十年前の記憶

彼は妖夢の、淡い初恋の相手だった……

序章 『セピアに染まる記憶』

「あら、これは……」

冥界に存在する巨大な屋敷、白玉楼。

その白玉楼が誇る広大な庭の隅に位置する蔵の中で、主である西行寺幽々子はそれを手に取ると、口元でそつと笑みを浮かべた。

手にしたそれは一枚の写真だった。

相当年季の入った物らしく、写真はセピア色に滲んで何とも味気ない写真となっていた。

写真には、白玉楼の屋敷をバックに三人の人物が写っていた。一人は今と変わらぬ姿の幽々子自身。そして、

「幽々子様！」

「あら、妖夢じゃない」

バンッ、と蔵の戸を派手な音を立てながら開けて現れた一人の少女。銀の髪に薄緑色のワンピース姿。そして背と腰には長さの異なる一本の刀を帯刀していた。

幽々子が手にしていた写真に写る一人目の人物、魂魄妖夢だった。妖夢は頬を紅潮させながら幽々子の元へと駆け寄って、

「どうして幽々子様がこのようなどころに。本日の大掃除は私たちに任せて、幽々子様はお部屋に……む」

「お屋敷の大掃除って退屈なんですもの。それで、せっかくだから宝探しでもしようかと思つて」

そう言いながら幽々子は妖夢の唇を指で制した。

それから、今しがた見つけた写真を取り出して妖夢の目の前で見せ

つけるよ」に揺らした。

「や、それは……！」

すると妖夢の表情が微かに紅くなる。

「ふふ。何だか懐かしいものを見つけちゃったわね。えっと、何方
だつたかしら？」この「写真に『写つてゐる妖夢の初恋の」
となた

「へえ！？ ……わ、あわわわー！？」

顔を真っ赤にさせながら妖夢は「写真を取りうと手を伸ばす。
そんな様子を楽しむように、妖夢には届かないよう腕を上げて悪戯
っぽく写真を弄ぶ幽々子。

「あらあら、どうしたの妖夢？ そんなに恥ずかしい？」

「そ、その写真探してたんですッ！ か、返し……て……ッ！」

「あ……」

「そこですッ！ ……つて、うわあわわー！？」

不意に幽々子の手からはらりと落ちた小さな「写真に勢いよく飛び込んで、妖夢はそのまま蔵の壁に突っ込んでしまった。ゴン」という鈍い音の後、蔵の棚からあととあらゆる骨董品が妖夢に向かってこぼれ落ちる。

そんな情けない様を、幽々子はクスクス笑いながら見ていて、

「妖夢、大丈夫？ 金ダライとか落ちてこなかつた？」

「この蔵に金ダライなんてありませんよー……はあ、でもよかつた」

妖夢は適当に物を退けてその場から出ると、大事そうに「写真を抱き

しめた。

「いつだつたかしら……？　あの人がこの白玉楼に来たのって」

「えと、十年くらい前……ですね」

「月日なんてあつといつ聞ねえ。……彼、今頃どこで何をしているのかしら？」

「あ、幽々子様だつて気になつてゐるじやないですか」

「まあ、多少は……ね。ふふ」

妖夢の握る写真を覗きこむよつこしながら、幽々子は微笑んだ。

「千花さん……元氣にしてるかな」

写真に写る二人目の人物を見つめながら、妖夢は十年前のあの日を思い出していた。

序章 ＜ セピアに染まる記憶 ＞（後書き）

お待たせしました

新作、『ちょっと背伸びなkiss』スタートです。

今回は妖夢と幽々子、そしてオリジナルの主人公を中心にお話を書いていきます。

はたして妖夢の初恋とは？

写真に写る『千花』とはいつたいどんな人物なのか？

これから紡がれるお話に今うご期待……ッ！

前作同様、1日1話のペースで頑張って執筆していくので、どうぞよろしくお願いします。

感想、ご意見も自由にどうぞ。

第一話 ＜蒼刃狂乱＞

その日、妖夢は幽々子の言いつけにより里まで菓子を買いに出かけていた。

頼まれていたのは金平糖。別段珍しい物ではないのだが、幽々子は侍女を頼らず直接妖夢に頼んだ。

出かける間際、戸口まで見送りに来た幽々子が笑顔で一言告げた。

「帰つてきたら、一緒に食べましょうね」

その一言が嬉しくて、妖夢は疾風のよつな早さで白玉楼を後にした。人里まで多少距離はあるが全速力で走つて駄菓子屋に飛び込む。息を切らせる妖夢に、店主のおじいちゃんはホツホツと大らかに笑いながら色とりどりの金平糖の入った包みを手渡した。

小さな紙の袋を抱えながら妖夢は冥界へと続く道を歩いていた。

「それにしても、突然金平糖が食べたくなつただなんて、幽々子様も案外子供っぽいところあるんだなあ」

主が金平糖をにこにこしながら食べる様を浮かべると妖夢は小さく微笑んだ。

やがて冥界の境界に一步踏み込むと、いつもの冷たい空気が頬を撫でる。

死と静寂だけが支配する冥界。

生氣など、微塵も感じられないこの空間。

最初はやはり躊躇したものだ。

いくら自分が半人半霊であるとはいって、この不気味な雰囲気はどうにも慣れないと、妖夢はお化けの類がてんでダメだった。

剣の達人だといふのに、妖夢はお化けの類がてんでダメだった。

幽々子はそれが可愛いと言つてはくれるが……

「私もまだまだ未熟で……ん？」

ため息混じりに歩いていると、妖夢の前方に複数の人影を見つけた。目を凝らしてみると、そこには一人の少年が複数の妖怪に取り囲まれていた。

囮んでいる妖怪の数は四人。各々手には刀などの武器を手にしていた。

「多勢に無勢とは何と卑怯な……これは助太刀しないと！」

妖夢が背の楼観剣に手を伸ばしたと同時に、前方の妖怪達が一斉に少年に向かつて飛びかかった。

まずい。

地を蹴つて駆け出そつと姿勢を低くしたとき、目の前で異変が起つた。

「え……？」

突然少年の体から、青白いオーラのようなものが爆発するように吹きだしたかと思うと、腰からやや長めの蒼い太刀を抜き払い、襲いかかる妖怪たちを一薙ぎで消し去つてしまつた。

たつたの一撃、まさに刹那。

妖夢が瞬きするよりも早く、少年は数体の妖怪を一刀の下に伏せてしまつたのだ。

「え、えッ……？」

完全に出鼻をくじかれてしまつた妖夢は目を白黒させながら少年の

姿を遠目で見つめていた。

青と白を基調とした、袖口のゆつたりとした道着。凛と輝く蒼髪は肩ほどまで伸びていて、ちょいちょいなじの辺りでくっっている。

太刀を握ったままの少年は肩を大きく上下させながらその場に立ち尽くしていた。

返り血一つ、浴びていなかつた。

ふと、妖夢の存在に気づいたのか少年は首を少し傾けた。

鋭く光る蒼の双眸が妖夢を一瞥する。

妖夢は手にかけていた楼観剣の柄から手を離し、少年の方へと歩いていった。

「助太刀しようかと、思ったのですが……いらぬ心配でしたね」

ハハハと軽く妖夢が笑いかけた瞬間、少年の姿が震んで消えた。同時に、妖夢の首筋に向かつて光速の刃が踊りかかつて、

「ツツ！？ 何を！？」

目にも止まぬ速さで楼観剣を抜き、すんでのところで刃を受け止める。

甲高い音と共に妖夢は大きくバックステップして少年を睨み見据えた。

「いきなり斬りつけとは、どういって見ですか！」

「…………」

少年は答えなかつた。

ただ、大袈裟なほどに肩を上下させ息を吐き、虚ろな青の瞳で妖夢を見つめていた。

明らかに様子がおかしい。

じりじりと間合いを計りながら妖夢は次の一手に備え樓觀剣を強く握りしめた。

そして、再び少年の姿が霞む。

ヒュンッと風を切る音に反応し軽く身を屈め、再び首筋を狙つて振り払われた横薙ぎを回避。

と同時に妖夢はくるりと身体を捻りその勢いを乗せた一閃を放つ。が、刃が少年の衣服をかすめただけで避けられてしまった。

「速さは、相当なものですね。……しかし」

妖夢は違和感を覚えていた。

少年の太刀に、心が乗っていない。

その太刀筋はまるで、何か大きな力に翻弄されがむしゃらに暴れているようだった。

だから、何処から斬るのか、何処へ斬るのか、めちゃくちゃで正確性がまるでない。

この程度の腕で、この少年は私に挑んでくるといふのか。

「……笑止」

襲いかかる剣戟を流し、あるいは受け止め、妖夢はその一瞬を待つた。

相手の攻撃が大降りになるその一瞬だけを狙い、そして時が来た。少年の太刀が上段を向き、そのまま大きく振り上がった。振り下ろす速度は速い。だが、

「一気に踏み込めばツ！」

ガラ空きになつた胸を目がけ強く踏み込み、妖夢が手にした刀を薙

「」としたその瞬間、

「…………リ…………リ…………ツ」

「ツ？」

妖夢はギリギリのところで刀を返し、刀の峰^{みね}で少年の胴を打った。

「がツー！」

ぐらり、と少年の体が揺らぎ、やがてあっせつその場に崩れ落ちた。妖夢は微かに眉をひそめた。

「今、この人『リン』って言つたような……？」

剣を收め少年の元へと近づいた時、突然少年から蒼いオーラが消え去り、蒼髪が一瞬の内に黒髪へと変わった。

その様子を見て妖夢は驚き目を見張った。

「」「これはいつたい……」

しかし倒れこむ少年をこのままにしておく訳にもいがず、妖夢はやや躊躇いつつも少年を背負つた。

そして再び驚いた。

少年はまるで羽のようだとしても軽く、小柄な妖夢でも簡単に背負うことことが出来たのだ。

「……と、とりあえず、お屋敷に帰らないと。幽々子様も心配してるだろ?」

そして、妖夢は再び白玉楼へと続く道を足早に歩きだした。

第一話 ＜蒼刃狂乱＞（後書き）

ううん、いまいち反応が薄い感じ

まだ最初だししょうがないか；

といつも、もう少し地の文どうにかならないものか……

単純に読書量が足りないんだろうなあ；

第一話 ＜犬耳と尻尾＞

・・・

い様。

兄様ッ。

呼んでいる、誰かが僕を。

……誰が？

目の前が真っ赤で、何も見えない。

耳鳴りがひどくて、何も聞こえない。

だけど、僕はこの声を知っている。
知っているんだ。

とても、身近な人で。
とても、大切な人で。

この世でたつた一人の……

そうだ。
たつた一人の……妹だ。

そして突然、目の前の赤が消える。
耳鳴りが収まる。

だけど、僕はどうしてこんなに恐れている？

赤い世界から解放されるのに。
澄んだ世界の音が聞こえるのに。

どうして、恐れる。

クリアになつた視界の向こう。

そこにはいくつもの、いくつもの……

・・・

そして目を覚ますと、少年は見覚えのない天井と対面した。

「い、いつつ……」

と、同時に腹部に鈍い痛みを感じて少年は身を捩つた。
身体を起こして服をめくつて見る。……ちょうど腹の真ん中あたり
が少し青くなっていた。
何かにぶつかったのか、それとも誰かに殴られたのか……

「…………」

見覚えのない天井の次は、見覚えのない部屋。

もちろん今横たわっている布団も自分の物ではないし、目の前の掛け軸や生け花などもまったく知らない。

そもそも自分の知っている部屋と趣が違う。

少年はそんな雅な生まれでもないし、そんな趣味も奢めではない。
しばらくして、じじが自分の知らない場所だと理解した。

「何で僕、こんな場所に？　さつきまで僕は……ッ」

記憶を巡らせようとすると、それを拒むよつと鋭い痛みが少年を襲ひ。

思い出せない。これは、記憶喪失といつものなのだろうか。少年がどうにか記憶を思い起こそうとしていると、戸の先に誰かの気配を感じて軽く身構えた。

そしてスッと戸が開くと、少年の目が軽く見開かれた。そこには銀の髪の少女がちゃんと座していた。

薄緑色のワンピース姿で、背と腰には刀を帯剣していた。ただ、それよりも少年が気になったのは彼女の、

「…………」

「…………？ 私の顔、何かついてますか？」

「あ、いやそういう訳じやないんだ。ただ」

「ただ？」

「見覚えがあるよつな、気がして……」

「…………先ほどの件、覚えていらっしゃらないのですか？」

「先ほど、つて？」

すると少女は眉をひそめながらも、一礼してから少年の部屋へと入った。そのまま歩いて少年の斜め前辺りに座すと事の顛末を話した。

「先ほど、貴方は妖怪に襲われていたんです。そしてその妖怪達を一撃で倒した後、私に斬りかかってきたんですよ」

「斬りかかって…………！？ 僕が、まさか…………ー？」

少年はまったく身に覚えがないと首を振った。

すると少女は軽く首を傾げ、怪訝そうな表情を作つてから、

「田を、合わせてください」

「え……？ ああ、わかった」

言われた通り、少年は少女の瞳をまっすぐ見据えた。淀みの無い漆黒の双眸が少女を見つめる。やがて少女はふうと軽く吐息した。

「……嘘は、ついてないみたいですね。そもそも先ほどと眼の色が違いますし」

「眼の色が違う？」

「ええ。先ほどの貴方は貴方の太刀と同じ蒼い色をしていました」

「太刀……？」

少年は首を傾げた。

「……僕、太刀なんか持つてないよ？」

「え？ そんなはずは……？」

言つて、少女は少年の回りを一警した。

太刀はおろか、少年の傍には鞘すらなかつた。

「え、さっきまでは確かに太刀を、蒼い太刀を持っていたのに？あれ、どうして……？」

「妖夢（）？ あの人気づいたの～？」

戸の外から何とも間の抜けた声が聞こえてきた。

振り向いてみると、戸の端から桃色の髪がゆらゆらと姿をのぞかせていた。

それを見た少女は飛び跳ねて、

「ゆ、幽々子様！？」

「 ゆゆ」れぬ……？」

やがて現れたのは、何とも可愛らしい少女だった。

その出で立ちは、たっぷりとした和風のドレスに身を包んだお嬢様、と言つたところだろうか。

クスクスと微笑を浮かべながら、少女はゆつたりとした動作で少女の傍へと近づいた。

「 幽々子様はお部屋に待つていてくださいと」

「 だつて退屈なんですもの。それに、殿方と一緒にさせさせてのもちよつとねえ？」

同意を求めるかのように少女は少年に微笑んだ。

意味が分からず、少年と少女は一人して頭に疑問符を浮かべた。

「 あら、ちよつと早かつたかしら？ あ、私は」の白玉楼の主の」

「 そ、そういうことは私がご説明しますからー。」

「 え？ 自己紹介くらいいいでしょ？」

「 ……では、とりあえず私から」

コホンと咳払いを一つして、少女は凜とした聲音で言つた。

「 名乗るのが遅れて申し訳」れません。私、この白玉楼で剣術指南、そして幽々子様の護衛を務めさせていただいております、魂魄

妖夢と申します。そして、この方はこの白玉楼の主の」

「 西行寺幽々子よ。よろしく」

「 よ、よろしく……」

にこやかに名乗った幽々子に対し、少年はややひつむきながら答えた。

今の少年の心は、今しがた妖夢から聞いた身に覚えのない出来事で一杯だった。

「……貴方のお名前、訊ねてもいいかしら？」

「え……あ、はい。すみません。まだ名乗つてしまませんでしたね」

幽々子の言葉に、少年は幽々子と妖夢を交互に一瞥してから答えた。

「千花と、夕凪千花と申します。その、迷惑をかけてすいません」

申し訳なさそうに首を垂れる千花。その姿に、二人は顔を見合せた。

そして首を振つて答えたのは妖夢だった。

「いえ、別に迷惑などお考えにならなくともいいですよ。あれは明らかに様子が変でしたから」

「本当にすみません……あ、いや、なら」の場合はありがとひくなのかな」

「ふふ。本当に可愛いお方ねえ。その耳に尻尾も可愛いわ」

幽々子の言葉に、妖夢がブツッと小さく吹きだして、

すると少年は少し頬を染めながらつむいで、
て

「やだなあ幽々子様つたら、冗談が過ぎますよ。この人に尻尾なん

「ふへ？」

「その、尻尾なんて褒められたのは初めてですね……」

妖夢が滅多に上げないような素つ頓狂な声を上げた。

「あらあら。妖夢こそ何を言つてゐるのよ。彼、狼さんみたいな可愛い耳と尻尾があるじやない」

۷۰

千花の頭には三角形の耳がパタパタと、そして腰の下にはふきふきの尻尾が揺れていたのだ。

妖夢は目を魚にしながら交互に見て、

「え、え、ええええええええええええッ！？」 犬耳と尻尾おおッ！

妖夢の絶叫が白玉楼に響き渡る。

19

第一話 『犬耳と尻尾』（後書き）

す「」く関係無いんですけど、マーメイドとかハーピィっていいですね！

出来たらあんな彼女が欲しい……。w

さて、主人公はどうやら獸耳に尻尾だそうですよー。
桜と一緒にですね！

……いや、だからと言つて桜は出演予定ありませんけど；

第三話 『白玉楼の使用人』

「す、すすすすみません。突然声を上げてしまつて……」「いや、気にしてないからいいよ。……だから顔を上げた方が」

千花と幽々子の田の前で、妖夢は地にへばり付くようにべつたりと土下座していた。

幽々子はくすくす笑うだけで咎めもしないし、千花はただただ呆然としていた。

少しやり過ぎなんじや、と口を開きかけたところで幽々子が言つた。

「もう、別に叫ぶくらいで謝らなくともいいじやない。大袈裟よ」「しかし幽々子様の御前で、しかも千花さん今まで無礼な……」

微かに声が震えている。

それはもう真面目、の一言で片づけられるようなレベルじやなかつた。

彼女にとつて、この幽々子様という人物はそれほどまでに恐れ多い人物なのだろうか。

千花の田にはただにこやかに微笑むお嬢様にしかみえないのだが……やがて、幽々子は千花の方へと首を傾げて、

「それで、千花さん？ これからどうするの？」
「これから……ですか。えと……」

答えようとして千花は言葉に詰まつた。

これからも何も、今までの記憶が無いのだ。
唯一覚えていいることはこの名前だけで、それ以外はほとんど何も覚えていない。

視線を「反らしながら口を噤んでいた」と、幽々子が優しく微笑みかけてきて、

「もしかして、行く当たがないのかしら？」
「……すみません。でも、すぐ出ていくので、お一人に迷惑は」
「あら、だつたらしばらくここにいたらどうかしら？」
「え……？」

予想外の言葉に千花は顔を上げた。
相変わらず幽々子は優しそうに微笑んだままだ。

「もちろん、タダで住まわせるのも妖夢や他の侍女たちにも失礼だし、」の白玉楼の使用人として雇つて力タチになるけどいい？」「そんなこと、勝手に決めてよろしいのですか？」

すると幽々子は自慢げに胸を張つて、

「私が主ですもの。私が決めたらそれでいいのよ。ね、妖夢？」
「幽々子様がそう仰るなら、私は異論ありません」
「ふふ、決まり。じゃあとりあえず、妖夢」
「は、何でしょう」
「この人のお世話、お願いできるかしら？」
「お、お世話……ですか？」
「そ。使用者として働くならあなたの方が先輩で、彼は後輩でしょう？ 先輩は後輩の面倒を見るものだつて言ひじやない」
「はあ……わかりました」
「じゃ、私は部屋に戻るわね。あとはよろしく～

そして幽々子はふわふわとした足取りで部屋を出ていってしまった。
残された二人の間に、やや沈黙が流れて、

「……変わった人ですね」

千花が至極正直な意見を言った。

「……ひ、否定はしません。ですが、守るべき主に変わりありません
ん」

妖夢は凛とした眼差しで答えた。

「……その姿、やはり似ている。

ただ、誰に似ているのかはまったく思い出せなかつた。
自分に近しい存在なのか、それとも恋焦がれていた相手なのか。
記憶を失つた今の千花にはまったく見当すら付かなかつた。

「さて、それでまじの白玉楼を案内しまじょつか。こじりへじりつぞ」

妖夢の声にハツと我に返つた千花は頷き、その後ろ姿を追いかけた。

・

「ところで、使用人つて何をするんですか？」

屋敷の長い廊下を歩きながら千花は妖夢に訊ねた。

ちょうど庭に面した廊下に差しかかつた辺りで妖夢が答えた。

「そ、そうですね……えと

「……？」

妖夢は歩きながら口を濁した。

千花は記憶が無くても、多少の常識は覚えていた。

使用者と言えば、専ら召使いや下働きをする人のことを指すものだ。

恐らく千花は雑用を請け負うはずであろう。

しかし、何故か妖夢はもじもじするだけでなかなか返事が返つてこなかつた。

やがて妖夢が千花に振り返つた。やや頭を伏せながら小さく言つた。

「恐らく、千花さんは必要ないんじゃないかと……思つてます」「……えっと、それはどうこう云々？」

妖夢は申し訳なさそうな顔で続ける。

「「」の白玉楼には、数多くの侍女が働いています。炊事、洗濯、掃除、ありとあらゆることを侍女達が全てこなしてしまつんですよ」「でも、数多くつて言つてもそんなにたくさんはいらないんじゃ？それに疲れて交代することだってあるでしょう？」

「う、ううん……」

妖夢は上手く説明できないうのがもどかしいといった表情になつて、

「千花さん、ここがどこだが分かつますよね？」「え？ 白玉楼……だけ？」「そうじゃなくて、「」です」「……？ 地名とかまではさすがに分からぬけれど……？」

素直に答えた千花の表情を見て妖夢は理解した。

たぶん、彼はここがどういう場所なのか知らないのだ。

と、そこでちよづといふことに侍女の一人が廊下の向こう側からやってきた。

「あら、 妖夢様」

「あ、 ちょうどいい所に。 千花さん、 彼女も侍女の一人ですよ」

「妖夢様、 この方は？」

「千花さんと言う者で、 今日から使用人になると幽々子様が」

すると侍女は声高らかに笑いだした。

「使用人？ このお屋敷にこれ以上そう言つた方は要りませんよ。
幽々子様つたらお戯れが過ぎますね。 ほほほ」

そして一礼してまた廊下の奥へと行つてしまつた。

千花は若干冷や汗をかきながらその姿を田で追つていた。

「……理解、 していただきましたか？」

「あ、 あああの人、 足が無い！？ え、 いや、あのー、 い、 ここ何
処なんですかー！？」

「やつぱり……」

はあ、 と軽く息を吐いて、 妖夢はこの場所を説明した。

「ここは冥界です。 もちろん侍女達はすべて靈ですんで、 疲れるこ
ともないですし、 交代する必要もないんですよ」

「……え、 えええええええええー！？」

今度は千花の悲鳴が白玉楼に響き渡つた。

妖夢は驚き戸惑う千花を見てこれからどうよつかと思案して、

「……そつだ、 あの場所なら」

ふと、 ある場所を思い出した。

第三話 ＜白玉楼の使用人＞（後書き）

台風が近づいてますね；

皆様のところは大丈夫でしょうか？

無理に外出したりして怪我とかしないように『仮』をつけてくださいね。

……でも、台風とか雷とかくるとテンション上がりますよね？ w

第四話 ＜ 悪戦苦闘の差し入れ ＞

妖夢の案内で屋敷の外に出て庭の道を抜けると、やがて目の前に小さな道場が見えてきた。

外見はボロボロで相当古い建物らしい。いざ中へ入つて見るとがらんとした空間が広がっていた。最近使つた形跡はなく、ほこりだらけでカビ臭い。

「ここが……道場？」

「そうです。昔、私のおじい様が建てた道場なんですね」「おじい様？」

すると妖夢は道場の奥の壁を指差した。そこには写真が掛けられていた。

写真には髪をたくわえた鋭い眼光を放つ老人が写っていた。その眼差しは妙な気迫があり、背筋がスッと冷えるような気がした。

「魂魄妖忌。（じんぱくようき）私の祖父であり、剣の師匠なんです」「魂魄、妖忌……」

千花は不意にその名を口にした。

何故か、この名前に微かな引っかかりを感じたからだ。どうしてだろうか。もちろん、会つたこともなければ見覚えもない。ただ、あの鋭い眼差しを見ていると胸の奥底から……

「……千花さん？」

「……あ！　え、えっと、何の話だっけ？」

その一瞬、妖夢の声が消えた。

千花は慌てて返事をすると妖夢は道場内を指でさして、

「お屋敷の中はとても他の使用人が入る隙はありませんので、代わりと黙ってはなんですが、ここを掃除していただけませんか？それと、千花さんの部屋はこの道場の個室を使ってください結構です」

「こんな立派な道場で泊るのか。……何かすごいな。よし」

千花は早速道場の中に入つて、奥の小部屋から掃除用具を取り出した。

ほうきや雑巾、それからバケツ。外の井戸から水を汲み、道着の袖をまくつて用意をすると雑巾を湿らせ千花は道場の床を拭き始めた。端から端へと何度も往復し、床を綺麗に拭いていく。道場はかなりの広さなのだが千花の速度もかなりのもので、あっといふ間に道場の床の半分がピカピカになつていた。

「……千花さん、真面目な方だな」

差し入れとか、した方がいいのだろうか。

妖夢は床磨きに励む千花を残してこつそり屋敷の方へと戻つていつた。

「侍女に頼んでおにぎりくらい作つてもらつか。私も、ちょっとお腹空いたし」

調理場へ向かつて歩いていくと、やがて戸の奥から美味しそうな香りが漂ってきた。

ちょうど昼食の時間だから何か作つている最中なのかもしれない。

「失礼します」

律儀に声をかけてから入ると、先ほど会った侍女と田があつた。

「妖夢様、『』昼食ですか？」

「うん。少しお腹が空いてて。何かいただけますか？」

すると侍女は申し訳なさそうな顔をして、

「すみません……今しがた幽々子様の昼食を出したら材料がほとんど底をついてしまって」

「……いえ、いつものことなので気になさらず」

すっかり忘れていた。

白玉楼の主は恐ろしいほどの大食漢だった。

普通の人間の、恐らく一ヶ月分相当の食糧を、彼女は一人であります平らげてしまうのだった。

いつたいあの華奢な体のどこに収まるのかまったく分からない。

「……そうだ、お米は残つてますか？」

「米ですか？ んんと」

侍女は棚の奥から米の入った容器を取り出した。

「……一合と半分、つてどこですかね」

「それ、いただけませんか？ 千花さんの差し入れにおにぎりでも持つていってあげたいのですけど」

「千花さん……ああ、あの誠実そうな使用人さんね。それぐらいならお安い御用よ」

侍女は取り出した米をさっそく研いで釜戸へ入れた。

慎重に火力を調整しながら待つことおよそ三十分程度。焚き立ての白いご飯が釜戸の中から顔をのぞかせた。

湯気と共に立ち込めるほんのり甘い香りに、妖夢のお腹がくう、と小さく鳴いた。

「さて、あとは握るだけなんだけど……妖夢様、お願いしてもいいかい？」

「へ？ 作ってくれるんじゃないんですか？」

すると侍女は再び申し訳なさそうな顔をしながらちょいちょいと指で調理場の外を指差した。

「幽々子様からお呼び出しでね。すぐに戻れるけど、どうせなら焚き立てで出してあげたいだろう。だから妖夢様が作っておやじ」「え、あいや、でも私お料理なんて」

すると侍女はカツカと笑つて、

「おにぎりは料理なんて立派なもんじゃないさ。ただ丸く握るだけなんだから簡単だよ。さて、それじゃ失礼するよ」

「ああ、ち、ちょっと待つて……！」

しかし妖夢の願い虚しく、侍女はペコリと頭を下げて調理場を出ていつてしまつた。

今更気づいたのだが、この調理場には他の侍女が一人も見当たらなかつた。

一人、白いご飯と見つめあう妖夢。

「わ、私だつて一人で作れます！ た、たぶん……」

意を決した妖夢は洗い場で手を洗い、棚から調味料を取り出して戦闘態勢を整えた。

頭の中でイメージを浮かべながら、手の調子を確かめるかのように握つたり開いたりを繰り返して、

「よ……よしつ！」

妖夢は焚き立ての『ご飯』に一気に手を突っ込んだ。

何度も言つが、焚き立てである。そんな『ご飯』の中に手を突っ込めば当然、

「あちゅ、わ！？ ち、あちつ、うわつちつちつ！？」

『ご飯』が炊きあがつて、それからまた三十分が経過して……

第四話 < 悪戦苦闘の差し入れ > (後書き)

ちゅうちゅうじつとアクセス数が戻ってきた感じかな?
嬉しいです。

さて、水曜日辺りに出来たらもつ一つお話を公開できたらといま考
案中です。

こつちはギャグ全開で行きたい、といつかギャグが書きたくてw
相変わらずオリキャラはいますけど、まあ、出来たら、公開します
ね。

第五話 <甘いおひめり>

妖夢が道場を去ったのに気づかないまま、千花は一生懸命に床を磨いていた。

あれほどほこりまみれだった道場は、今ではまるで新築のように綺麗になっていた。

床は磨き立てで光り輝いているし、部屋にたまっていたほこりはすべて拭き取った。

後は、と千花は閉め切っていた戸を全開にした。

「うわあ……」

屋敷側の戸を開くと、優雅な庭園が広がっていた。

石と木々だけで表現する枯山水や、鹿威しの音が響く広大な池。それはとても幻想的で、美しかった。

とても死に満ち溢れた世界の光景とは思えない。

ある種の楽園、もしくは天国なのではないだろうか。

「もしかして、僕死んでたりして。はは……まさかね」

半ば笑えない独り言をつぶやきつつ、今度は反対側の戸を開け放つた。

そして田の前の広がる光景に軽く田を見開いた。

「へえ、弓道場か」

そこには道場の半分ほどの大さの弓道場があった。

使い古された弓の的、弓道場の脇には長弓と矢の束が壁に掛けてある。

妖夢の祖父は剣の師匠だけでなく、一人の武人だったのだろうか。休憩がてら足を運んでみると、凛とした風が千花を通り過ぎていく。戸を開け放っているせいか、心地よい風がするりと抜けていく。軽く深呼吸してみると、何とも言えない冷たい空気が体中を巡る。……何となく身体に悪いような気もしたが。

「これ、少しごらり借りてもいいよな」

千花は掛けあつた長弓と矢を一本借りて、目の前の的に向かって構えた。

グツ、と弓を握りしめ矢尻を掴む手をスウッと軽く引いて止める。そして目標の中心点だけに意識を集中させ息を吸い込む、

「ツ！」

息を吐ぐのと同時に矢尻を放す。

まっすぐ放たれた矢は寸分の狂いもなく赤い中心点に命中した。スカン！ という小気味のいい音が道場の中を響いて消えていった。

「……何だか弓道つて落ち着く。この張りつめた緊張感がいいんだよな」

弓を片づけ道場に戻ると、戸口に妖夢の姿が見えた。手には小さな包みを抱えていた。

「あれ、妖夢さん。……それは？」

千花が何気なく訊ねると、何故か妖夢は顔を赤くしながら

「さ、差し入れです。道場の掃除、頑張つているようでしたから作

つたんですね

「すい、と手にしていた包みを差し出した。

千花が受け取り開けてみると、そこには奇妙な白い塊が数個並んでいた。

「…………おにぎり?」

「そ、そうですよ! って、今の微妙な間は何ですか!…?」

「いや、こんな歪な形のおにぎりは初めてで……」

苦笑交じりに千花は答えた。

包みの中のおにぎりは、二角と丸のちょうど間のよつな、何とも言い難いでこぼこな形のおにぎりだつた。

もしこれを坂道で転がしたら、それはそれは奇妙な軌跡を描いて転がっていくのではないか。

しかし、ちょうど小腹が空いていたので助かる。

あの広い道場を一人でピカピカにしたのだ。腹が減るのは当然の道理だ。

「じゃあ、一つもらひます

「はい、どうぞ」

おにぎりに手を伸ばして、そのおにぎりが意外と温かいことに気が付いた。

もしかして、妖夢が作ってくれたのだろうか。

「いただきまーす

ちょっと誇りしげな表情の妖夢に見守られながら、千花は出来たてであるおにぎりをつかぶつつかぶつとおにぎりにかぶりつく。

ほんのり温かく、そして噛みしめることで生じる米の甘さが……、

甘さ……が？

……「れ、妙に甘すぎないか？

具のないおにぎりのはずなのに、何でかシャリシャリとした歯感いたえが返つてくるのだが……

「……あれ、どうかしましたか？」

「へ？ あ、いや……なんでもない」

「……？」

一瞬不安そうな顔をした妖夢を見て、千花はそのままおにぎりを咀嚼して一気に飲み込んだ。

不味くはないのだが、何というか……いや、やつぱり不味いかもしれない。

とはいって、せつかく作ってくれたおにぎりを残すのは人としてどうだろうか。

それはそれで大変申し訳ない気がするが、と考えていると妖夢もそのおにぎりに手を伸ばして、

「では、私も一ついただきますね」

「あ！ ちょ、ちょっとま！」

時既に遅し。

妖夢は何の疑いも持たずにおにぎりを頬張るとすさま頃が青ざめていった。

そして氣まずそうな顔して「ながらを向いた。

「」「これ、砂糖と塩間違えて……」「

「で、でも甘いおにぎりってのも美味しかったよ？」

「……あう、うう」

妖夢がつめき声をもらした。

そ、そこまで不味かつただろうか。別に千花の味覚がおかしいわけではないのだが、それでもうめくほど不味かつた覚えはない。

妖夢はそのまま俯いてしまって、その顔を千花が覗きこむつとして、

「……よ、妖夢さん？」

「…………つす、ひつぐ……」

小さな嗚咽が漏れたかと思うと、妖夢は泣きべそをかきながら叫んだ。

「「」「「めんなさい……」

起きた時に見たあのべつたりとした土下座を千花の目の前で再び披露してくれた。

千花は苦笑しながら妖夢を見つめて、それからぽんと頭を撫でた。

「そ、そこまで謝らなくともいいって。僕は気にしないから」「でも……でも、ひつぐ……」

それにしても、千花は不謹慎だと思いながら妖夢の泣き顔を見つめていた。

幽々子の前だとあんなに凜々しく振舞っていたのに、その実は見た

目通りの少女らしい。

ぼろぼろと涙を流すさまを見ていたら、自然とその銀の髪を優しく撫でていた。

ふと、昔同じような事をしていたような気がした。
相手は、誰なのだろうか。

思い出そうとしても、記憶が震んで思い出せない。

「……ほひ、もつ泣き止んで」

「は、はー……つぐす」

まだうつすりと涙を浮かべてはいたが、とうとう泣き止んだようだ。

千花は残っていたおにぎりを掴んで頬張った。

別に、そこまで不味いわけじゃない。

「や、そんな無理して食べなくても…」

「せっかく作つてもらつたものだからね。いやんと残すも食べるよ。
……んぐ、ん。わいど」

千花は包みを一寧にたたんでから妖夢に手渡すと大きく伸びをして、

「道場の掃除は終わったから、次は部屋の掃除をやるよ。差し入れ、
ありがとね」

道場の戸を開けて離れにある別室へと歩きだした。

その後ろ姿を、妖夢はちょっと赤くなつた目で追いかけていた。

「…………」

次は、頑張ろつ。

ほんのり頬を朱に染めた妖夢は腕でコシコシ田を擦ると、一礼して
から道場を静かに立ち去つた。

第五話 <甘いおひる>（後書き）

このネタ、どつかで見たような気がするなあと思つたら、ワンピースのかなり最初の方でこんなおにぎりありましたつけねw
しかし、尾田っちの絵もずいぶん変わりましたよねえ……

もう最近のワンピースは話が付いていけなくなつたから見てないけど、

あ、でもアニメはしつかり見てます。

ついにワンピに竹内順子さんが来た！

この人は何となくジャンプ系のアニメと相性が良い気がする。

第六話 『小さな夜会』

その夜、屋敷で豪華な夕食を振るまつてもらつた千花は、道場の離れの一室でこりんと横になつていた。

夜も更け、屋敷はシンと静まりかえつている。いくら侍女の靈でも寝るときは寝るらしい。

千花もしばらくしたら寝ようと布団は敷いてあるのだが、

「……どうも、寝れないな」

何となく目が冴えてしまつてなかなか寝付けなかつた。かと言つて、勝手に屋敷を歩くのも悪い気がする。しかし部屋でボーつとしていても眠氣は全然やつてこない。

「ちよつとだけ夜風に当たつてくるか」

弓道場辺りでのんびりしていればそのうち眠氣が訪れるだろつ。そう思つて千花は自室を出て弓道場へと向かつた。

道場へと続く廊下を歩いていると、屋敷の縁側に人影を見つけた。

「あれは……」

人影が月明かりに照らされてその姿を露にする。

この屋敷の主の、幽々子だつた。

寝巻姿の彼女は縁側に腰掛けながら、首を少し傾げて夜空を見上げていた。

月光に照らされた横顔は、先刻見ていたあの少女とは思えないほど大人びていて美しかつた。

そんな姿を見たせいか、千花の胸の鼓動が少し早くなつて思わず目

を反らした。

……その、あまり女性を凝視するのはよくない気がしたからだ。
気を取り直して『道場へ向かうと、やがて冷たい空気が千花を包んだ。

スツ、とゆっくりと胸の鼓動が落ち着いていくのが分かる。
千花は弓と矢の束を抱えて適度な位置で弓を構えた。
的は用意せず、砂でできた山に向かつて適當な場所に狙いを定めた。
もちろん、的を用意しないのは大きな音を立てないためだ。
自分と幽々子以外の人は全員眠っているのだ。変な物音を立てて起
こしてしまつたら申し訳ない。

「……ハツ！」

息を吐くのと同時に矢を射る。

砂山にザツ、と刺さるだけで味気ないが、それでも多少の気分転換にはなつた。

それからしばらく千花は無言で矢を放っていた。
手元の矢が切れたので砂山に取りに行こうとした時、

「ふふふ。こんな夜更けに弓の練習？」

「……シ？」

振り返ると、いつの間にか幽々子が戸口に腰掛けていた。
扇子で口元を隠しながら、ニコニコと微笑んでいた。

「ゆ、幽々子様……」

「あら、貴方まで様づけなの？ それはちよつと残念ねえ

「え、えつと……じゃあ、幽々子さん？」

「ん~、もう一声」

「ゆ、幽々……子」

「なあに？」

満面の笑みで答えたので、千花はびきまきしながら唾を飲んだ。
もしかして、やつを見ていたことに気づかれたのだろうか。
どう弁明しようかと考えていると幽々子の方から口を開いた。

「貴方も、眠れないのでしょうか？　だつたら少し一緒に居てもいい
かしら？」

「あなたも、つて、幽々子も眠れないんですか？」

「あ、敬語もダメね」

「注文が多いなあ……」

そして、一人して小さく笑つた。

「ちょっと食べ過ぎちゃったのかしら？　ゼーんぜん眠れなくて困
つてたところよ」

「僕もなかなか寝れなくて。だから軽く身体を動かそうかと思つて
弓道場に」

「弓のお手前、見せてくれる？」

「そんな、見せるほど上手くは」

「いいじゃない。ほり、的なら私が持ってきてあげるから」

「ああいや、そこまでしなくとも」

千花の制止も聞かず、幽々子はゆつたりとした足取りで丸い大きな
目的を持ち上げようとして、

「わ、はわわわ……」

「あ、危ない！」

的の重さに耐えられず倒れそうになつた幽々子の下へ千花は一気に

駆け出した。

そして、千花はようじゅうび幽々子の後ろから支えるよつた形で抱きかかえた。

「あらあら、失敗しちゃった」

「あ、危ないじゃないか。これ意外と重いんだよ？」

「そうみたいねえ……でも、今は楽よ？」

「今は……ッ！？」

そして千花は今の状態を思い出して慌てて幽々子から飛び退いた。

「『い、い、い、い』ゴメンなさい！　いや、あの、悪気があってやったわけじや、あの……」

「あら、貴方が謝ることなんてないわよ。むしろ私が貴方に御礼を言わなきゃ。ありがと」

「ど、どういたしまして……」

「……もうひとつだけ、あのままが良かつたかな」

「え？　今何か言つた？」

「ふふふ、なんでもないわ。さ、貴方の『』のお手前、披露していただけるかしら？」

幽々子が落としかけた的を砂山の上に固定して、千花は所定の位置まで下がつて弓を構えた。

……幽々子に見られているせいか、少し、ほんの少しだけ緊張していた。

千花は一度深呼吸をして心を落ち着かせると、弦を引き絞つて狙いを定めた。

的の、赤い中心点だけを見据えて、

「……ッ！」

まつすぐに矢を放つ。

加速した矢はそのままの勢いで赤い中心点に命中した。我ながら、よくもまあ外さないものだと感心する。すると、後ろからパチパチと小さな拍手が聞こえてきた。

「すうじょうじゃない！ 百発百中ね～」

「いや、まだ一発しか撃つてないけど……」

ふと、千花はあることを思いついて的を複数用意して並べてみた。そして矢の束を自分の傍へと置いておく。連射、というほど早くはないが、連續して撃つてみたらどうなのだろう、と小さな好奇心が生まれた。

幽々子の方を振り返つてみると、瞳を輝かせながらじりじりを見ていた。

……ちよっと恥ずかしい。

「試しに、五つの的を一気に射つてみるよ。当たるかどうかは分からぬけど……」

「じゃあ、何か賭けでもしましょうか？」

「賭け、つて？」

幽々子は悪戯っぽい笑みを浮かべたまま言った。

「そうねえ……もし、全部命中したら」

「命中したら？」

「私と、『ティー』しましょつか」

「ティー……つて、で、ででで『ティー』？」

ええ、ただし、と幽々子が付け加える。

「もしも一発でも外したら、遠い、とお~い里までお菓子を買いに行つてもいいわよ。や、これで如何かしら?」

「……が、頑張ります」

「ふふ、頑張つて」

烈火の如く全身を火照らせながら、千花は振り返つて的を見据えた。的は五つ。全てに命中させれば幽々子と、ででデーター。一発でも外したら、どこか遠い里までお菓子を買いに行かれるらしい。

「……外したら大変だな」

これは絶対に当てなくては。千花はもう一度大きく深呼吸して息を整える。

的を見据えると、不思議と心が静まった。

スウ、と小さく息を吸つて、

「ツ！」

短くリズムを取りながら吐く。矢は赤い中心点に難なく命中。

これでまず一本目はクリアだ。

そして、と別の矢を番えようとして、

「あと四つよ~。頑張つて~」

緊張感とは無縁のゆる~い声に応援され、思わず矢を落としかけた。危ない危ない。

「……ツ！……ツ！」

氣を取り直して一発目、二発目と難なく命中させる。

残りはあと一つ。

ここまで当てていると不思議と外す氣がしなくなるな。

……つと、意識を反らしちゃダメだ。次いで四つ目の的を、

「……ハツ！」

スカン、と小気味よく音が響く。

これでリーチだ。

ふと、幽々子が気になつて振り返つてみると、相変わらず一ノ二ノ三
しながら千花を見つめていた。

この人、いつも笑つているような気がするんだけど、とそこまで
考えて首を振つた。

だから余計なこと考へてる場合じゃない。

あと一発で幽々子とデート……つて、違つ違つ。いや、違わないけ
ど。

千花は最後の的を見据えて息を吸う。

絶対に、当てて見せる。

そして矢尻を離そうとした瞬間、

「あ、そつそつ。もちろん、デートには妖夢も一緒に」

「へ？ ……ッあ、しまつた！？」

意識が反れた瞬間、矢尻を掻む力が緩んでしまい矢が放たれてしま
つた。

もう手遅れだ。

すると矢は的から少し右にずれた軌跡を描き、そして突然クンツ、
と急に軌道を修正して中心点を貫いた。

小気味いい音が再び響くと同時に、二人の間に沈黙が走つた。

千花も、笑みつぱなしだった幽々子ですら、その光景にポカンと口を開けて呆然としていた。

「……あ、あらり。すごいのねえ貴方つて。それが、貴方の能力な
のかしら？」

「い、いや……僕にも何が何だか分からなくて……」

確かに、今日の前で矢の軌道が変わつて的に吸い寄せられるようにして命中した。

風が吹いて軌道が変わつたのか。いや、違う。風の力なんかで動いたようには見えなかつた。

それは矢自身が意思を持つて的へ向かつたといふか……

「『狙いを外さない程度の能力』」

「え……？」

幽々子が千花の手にしていた弓を指差しながらいつ言った。

「貴方の能力は、さしづめそんなところかしら？」

「狙いを、外さない程度の……」

千花は自分自身に言い聞かせるように復唱した。
違和感はない。むしろ、その能力が自分のものであるような気がして嬉しかつた。

「ふわ……はふう。それじゃ、そろそろ寝くなつてきたから部屋に戻るわねえ。おやすみい……」

「あ、はい。おやすみなさい……」

幽々子は目を擦りながらぶらぶらとした足取りで道場を出ていった。

……途中で転んだりしないだろうか、と考えかけて大事なことを思い出した。

「つて、デートの話は……」

どうやら、千花はからかわれただけだったらしい。
ちょっと期待した自分にも情けないと落胆しつつ、千花は自室へと戻つていった。

第六話 『 小さな夜会 』（後書き）

第一章、終了です。

ちょっと短めですけど、最初はこんな感じで。
お気に入り登録、コーナー登録等、ありがとうございます。

追記

明日、もう一つお話を公開します。

詳しいことは明日またひらで書きますね。

第七話 『自主鍛錬』

それからしばらく、千花は白玉楼の使用人として立派に務めていた。ある時は幽々子に、

「あ、千花さん？ 今週発売の週刊誌買つてきてほしいのだけれど」と言われ近所の本屋へ買いに行き。

またある時は幽々子に、

「急に焼きそばパンが食べたくなったのだけれど、ちょっと買つてきてくれない？」

と言われ、結局店が分からず調理場の侍女に頼みこんで作つてもらつたり。

「……最近の千花さん、使用者というか完全にお嬢様のパシリなんじゃ」

「そ、そんなことない……と、信じたいけど」

あの笑顔で頼まると断りきれなくて、と傍にいた侍女の一人に言うと、彼女はニヤニヤとやらしい笑みを浮かべた。

「もしかして千花さん、お嬢様にほの字なのがい？」
「ほ、ほの字つてことはないですけど。でも、幽々子様は俺にとっては恩人だし」

「そうかいそうかい。まあ、ああ見えて寂しがり屋なところもあるから、千花さんが守つておやり！」
「だから違うつてのに……」

そう言い残して、侍女はどこかへと消えていつてしまった。

千花はため息をついてから、道場の方へと足を運んだ。

白玉楼の隅に位置する、妖夢の祖父、妖忌が建てたという道場。

今ではほとんど千花が自由に使っている。

道場の戸を全開にして、隣接する弓道場へと向かう。

「……また妖怪に襲われたらたまらないからな」

千花は壁に掛けていた、弓道の弓とは少し形状の違う弓を取り出した。

それは折り畳み式のやや小型の弓だった。

弦の強度、フレームの安定性などを独自で調整、改良を加えた千花専用の弓。

千花は何となく『白花』^{びゃっか}と名付けた。

白玉楼の『白』と、自分の名の『花』を足しただけ、ただそれだけだ。

千花は折り畳まれた『白花』を握りしめたまま所定の位置に着くと、フレームを開いて弦を張った。

そして矢を番えると、眼前の目標に向けて狙いを絞る。

赤い中心点だけを見据えて息を吐いた。

「……ツー」

カン、と軽い音を響かせて矢が中心点を貫く。

千花は幽々子に命名された『狙いを外さない程度の能力』というものを自分なりに考え、現在修行中だった。

この能力、どうやら自分がそこだと決めた場所に対しても絶対にその攻撃が当たるようだ。

そしてこの能力は必然的に投擲系の武器と絶対的な相性を誇る。

例えば、今千花が手にしている弓だ。

あれから何度も練習したが、千花が赤い中心点だけを狙おうとする
と、やはり寸分の狂いもなく命中する。

そのままもう一度赤い中心点を狙おうとすれば、今しがた中心に刺
さっていた矢の中心、つまりその赤い中心点をそのまま目がけて命
中するのだ。

真っ二つに裂かれた矢を見た時は自分でも驚いた。

それと、この能力は千花の意思も強く反映されるらしい。
当てようと思気込めば必ず当たるし、逆に千花自身が狙いたくない
と思うと本当に当たらなくなる、と言った具合だ。

理解するのに多少の時間是有したが、今ではある程度コントロール
出来ている。

しかしながら、何ともいい加減な能力だと千花は苦笑した。

「……さて、次は一本まとめて射るか」

自作した弓の先端には、矢が複数番えられるよう少しへみを削つ
て工夫してある。

普通こんな改造をしたところで、矢はでたらめな方向に適当に飛ぶ
だけだ。

しかし、そこに千花の能力が加われば、

「……せーっ！」

通常より深く弦を振り絞つて矢を放つ。

本来、別々の方向へと飛ぶはずの矢は中心点に目がけて軽く湾曲し
て飛んでいった。

もちろん、一本とも的に命中する。

「これで一本撃ちは大丈夫だな。次は三本か……。流石にこれは大

変そつだな

「あ、千花さん。よろしいですか？」

三本まとめて番えようとしていると、後ろから侍女に呼ばれて振り返った。

「何かお仕事ですか？」

「ええ、今日は幽々子様のご友人方が来客するとのことで、千花さんに使いを頼みたいのですが」

「幽々子様の友人……？　はい、わかりました。じゃあ、近くの商店まで行って」

「あ、いえ。今回は人里の方まで行ってもらえないでしょ」うか？」

「人里……？　それってこの冥界の外の？」

話には聞いたことがある。

冥界を出てしばらく行くと、普通の人間が集い暮らしている小さな里があるんだそうだ。

しかしながら、千花はまだ一度も行ったことが無い。

「……ああ、」心配なさらずに。妖夢様もお付き合いでしてくれるそうですよ」

「そりなんですか。なら安心かな」

妖夢が道案内してくれるなら大丈夫だろう。

侍女がでは、と頭を下げて出でいったのを見送ると、千花は手にしていた弓を折り畳んで背負つた。

一応、これは護身用だ。

「それじゃ、支度して妖夢のどこに行こうか

……それにしても、幽々子の友人とはいったいどんな人物なのだろう。

後で妖夢に訊いてみようか。

第七話 ＜自主鍛錬＞（後書き）

日本語、大丈夫かなあ……？；

能力説明のところ、ちょっと心配です；

それと、この後もう一つ別のお話を投稿します！

よかつたらそちらもチェックしてくださると嬉しいです。

第八話 『寄り道と巫女と』

「ああ、それは紫さんのことですよ」

「紫さん？」

里へと向かう途中、千花は幽々子の友人について妖夢に訊ねた。

「『ハ雲紫』。私も詳しく素性を知っている訳ではありませんが、幽々子様の古い友人なんです。時々白玉楼に遊びに来たりするんですよ。と言つても、ほとんど他愛のないおしゃべりをしているだけですけど」

幽々子の古い友人？

千花はその紫という人物に興味を抱いた。

「ふうん……そなんだ。どんな人なの？」

「うーん、一言で言えば……」

「一言で言えば？」

「……胡散臭い方ですかね」

「胡散臭い？」

それはいつたこどつこつ意味だらうと訊ねると、

「そのまんまな意味なんんですけど……掴みどころがないといいますか、私もイマイチ分かりません。会えばすぐに分かると思いますよ」「そつか。それはちょっと楽しみ」

そして千花は侍女から手渡された小さなメモを開く。

「……さて、頼まれてたものってのはお酒みたいだ。じゃあ酒屋さんを探せばいいんだね」

「だったら、あちらになりますね」

妖夢の指差した方向に小さな酒屋が見えた。

店の軒先には酒樽であると思われる大きな茶色い樽がいくつか並んでいた。

千花が店主にメモに書かれた酒を注文すると、店主はちょっと待つてな、と言ひて奥からやたらデカイ瓶を一本持ち出してきた。

千花でも両手で一本持つのがやっとだ。

こんなにデカイお酒だったのか！」。

そして千花は勘定を払つて店を出た。

「これ、幽々子様も飲むの？ その人お酒も嗜んでるんだ」

「胃袋同様、底無しですよ。それに紫さんも相当な酒豪ですし……」

「あ、酒臭いおしゃべりになりそうだね」

苦笑混じりに歩いていると、ふと壁に張り付いた張り紙に目を奪わされた。

「……縁日？」

「近々、この近くの博麗神社で縁日をやるやつですね。幽々子様も楽しみにしてました」

「博麗神社？」

「ああ……そうでした。千花さんはこの辺りのこと知らないんですね」

「たつけね」

「白玉楼と冥界の地理しか頭にないよ」

「ん……少しお時間もありますし、行ってみますか？」

「え？ でもいいの？ もし幽々子様の友人が来ちゃったら」

「予定の時刻まで多少余裕があるから大丈夫ですよ。それに、千花

さんも、「の辺のこと興味ありませんか？」

「それは……もちろんあるけど」

「なら決まりです。じゃ、行きましょうか」

そして千花と妖夢は里の外へと向かつて歩き出した。

道沿いに歩いていると、やがて小さな山が見えてきた。

道はそのまま山へと延びており、大きな鳥居と石段が見えてきた。

「「」を上ればすぐですよ」

「よし、それじゃ行つてみようか」

木漏れ日に照らされた石段を一歩ずつ上つていくと、けじめ本殿の正面に辿り着いた。

綺麗に正方形に切り取られたような境内は「」となく神聖な空気を感じさせた。

社に続く道の終着点には、小さな賽銭箱が設えられていた。
一言で言つならば、とてもシンプルな神社だった。

「「」が博麗神社……か」

「そうです。自称ですけど、素敵な巫女さんがいるんですよ」

「せつかくだし、お賽銭でも入れてこいつかな。お金お金……と」

「あ、千花さんダメですって！」

懐から銅銭を取り出した千花は怪訝そうな表情で妖夢に振り返った。

「……？　お賽銭ぐらい入れたつていいんじゃ」

「ろ、ろくに働かない巫女にはお賽銭は必要ないと、幽々子様が仰つてたんです！　だからダメです！」

「でも、入れないと逆に罰が当たりそうな」

「そうねえ。目の前に素敵なお賽銭箱があつたら有り金全部叩きこ

むのが常識よね

「……遅かった」

千花が声の方へ振り返つてみると、いつの間にか田の前に赤と白の巫女服姿の少女が腕を組んで仁王立ちしていた。

精悍な顔立ちに、頭には大きな赤いリボンが巻いてあった。

少女は無言で千花の前に手をすいと差し伸べると、ちょいちょいと手を招く。

「……えっと？」

「お賽銭よお賽銭。入れないと罰が当たるわよ

「あ……うん？ わ、わかつたよ」

千花は取り出しかけていた銅銭を少女の手に乗せると、少女は満面の笑みを浮かべた。

「ふふん。毎度あり。今度はもつとお賽銭持つてきていいのよ」「ちょっと靈夢さん！ いくらなんでも失礼ですよ！」

「そつかしら。神社にお賽銭入rezに帰る方がよっぽど失礼だと思うけど……で、コイツは誰？」

靈夢と呼ばれた巫女は驚き戸惑つている千花を指差した。

指先が千花の鼻先に触れそうなほど近づいた。

「えと、千花って言います。初めまして」

「千花……ね。何だか女の子みたいな名前ね。私は靈夢。れいむこの幻想郷の素敵な巫女、博麗靈夢はくれいれいむよ」

それから靈夢は千花と妖夢を交互に見比べて、

「……それで？」「こんな男と一緒にここに来て何の用かしら？」
「用と言つほどいの事ではありません。ただ千花さんにこの辺りの案内をしてくるだけです」

すると靈夢はなんだ、とつまらなそつに言つた。

「それでこんなとこまで来たの。それはそれは！」苦労な」とで……」「ここで縁日をするつて張り紙を見て、そしたら妖夢さんのがここを案内してくれたんですね」
「確かに、もう少ししたら縁日を開く予定だけ……って、ははあ、なるほどなるほど」

すると、何故か靈夢は「やーやーながら妖夢の頭をペシペシ叩いた。

「妖夢もつにじんせうにじつオトシ、ロロつて訳かあ。バカ真面目な子かと思つてたけど、意外と手が早いのねえ」

「……？　どうこいつ意味ですか？」

「しかもこんないい男を捕まえちゃつたら。誤魔化そうたつてそつはいかないわよこの」

今度は靈夢に肘で小突かれた。

何を考えているんだこの巫女はと妖夢は顔をしかめた。

「……そろそろ行きましょうか、千花さん」

「うん。そうだね。お使いの途中なんだし」

「では、失礼します」

妖夢は一応靈夢に一礼してから鳥居を背に歩きだした。千花も真似して軽く会釈してからその後を追いかけた。そして残された靈夢は、

「ん？ 私の勘違いか？ まあ、あの妖夢だし……けど」

一瞬鋭く瞳を細め妖夢たちの後ろ姿、いや、正確には千花の後ろ姿を見つめた。

「妙な妖氣を感じた気がするんだけど、氣のせいかしら……？」

やがて首を振つてその考えを振り払つと、靈夢は鼻歌交じりに社へと戻つていった。

第八話 『寄り道と巫女と』（後書き）

アクセス数が少しずつ上がってきました
読んでくれている方々、ありがとうございます。

言ひ忘れてたんですが、このお話は妖夢の過去のお話ですが、ちゃんと他の東方キャラも出るんだ♪安心してください。

ああ、そろそろ戦闘シーンが書きたいなあ……
誰かを無理やりけしかけてみよつかしら？ w

第九話 『賢者の酒盛り』

千花と妖夢が白玉楼へと戻つてみると、屋敷内は何やら騒々しい音であふれていた。

目の前を走り去る侍女の焦燥しきつた表情を見て一人に緊張が走る。

「もしかして、寄り道し過ぎた……とか？」

「わわわ……！？ ち、千花さんすぐに幽々子様の下へ急ぎましょう！」

「わ、わかった！」

屋敷の玄関を抜け、廊下を駆け、最奥にある幽々子の自室へと走つて向かう一人。

幽々子の部屋に続く廊下まで辿り着くとその足を一度止め、再びゆっくりと歩きだした。

そして、部屋の前まで辿り着くと、

「ゆ、幽々子様！ 失礼しま

戸口に手をかけた瞬間、戸の方から一人でに開いて妖夢は前のめりにつんのめつてしまつた。

結局耐えきれず、そのままぱたりと畳に倒れこんでしまつた。

「あらら、妖夢つたらあわてんぼさんねえ。そんなに急いでじりじったの？」

「も、申し訳ございません！ 少々道草を食つてしまひ、このよつな時刻に……あれ？」

「どうしたの、妖夢さん？」

顔を上げた妖夢の目には、やんわりと微笑む幽々子の姿しか見受けられなかつた。

まだ、紫は来ていないのだろうか。

「幽々子様、その、紫さんはまだ……？」

「ええ、まだよ。ちょっと遅れるつてさつき連絡があつたの。そしたら何だかお腹が空いちゃつてね」

「……じゃあ、侍女が慌てふためいてたのは？」

「ああ、それはたぶんさつき私がプリンが食べたいつて言つたからじゃないかしら？」

「どこまでも、自由奔放な方だな……」

千花は苦笑を浮かべながら頬まれていた酒を取り出した。すると、幽々子はパチンと両手を合わせて笑顔になった。

「あ～！ そのお酒！ 私大好きなのよお。」これで紫が来ても退屈せずにするわ～」

「や、それはよかつた。……では、僕はこれで失礼しまわわわ～！？」

退出しようとした千花の袖を突然幽々子が引っ張つた。

思わず派手に尻もちをついてしまったが、寸でのところで踏ん張つた。

「せっかくだし、一緒に飲まない？ 紫にも貴方のこと紹介してあげたいし」

「あ、いやあの僕はお酒とか苦手で、あの……だからそんな笑顔で目の前まで来ない……で」

「ゆ、幽々子様ツ～？」

キス一步手前ぐらいまで近づく幽々子に、妖夢が頬を深紅に染めな

がら叫んだ。

「そ、それは流石に、は、破廉恥ですよー!？」

「ん~? もしかして、ヤキモチ?」

「違いますッ!」

「…………断言されたよ」

そんなこんなで騒いでいると、部屋の奥の空聞が突然歪んで小さなすき間が開いた。
そしてその奥から妖艶な姿の少女が現れたかと思つと、部屋の真ん中に堂々と着地した。

「こんこむちは、幽々子……って、これはどう状況かしら?」

「あら、紫つたら遅いわよ。もつ待ちくたびれてお酒飲んじゃうところだつたのよ?」

「こじの人人が、八雲紫?」

田の前で千花を見降ろす少女は、その姿を見るなり紫紺の瞳をやや細めた。

「…………こじは?」

「つけの新しい使用者さんよ。千花さんつてこの」

「…………」

紫紺の瞳になめられ、千花は全身を硬直させながらたどたど口調で言つた。

「は、初めまして。夕凪、千花と申します」

「…………そう。八雲紫やくもゆかりよ。紫で構わないわ」

千花は紫の姿を見つめた。

名と同じく紫紺のローブに、艶やかな金の髪。

一見妖艶な雰囲気なのだが、妖夢の言ったとおりどこか信用ならないような空気が漂っていた。

これを胡散臭いと言うのなら、恐らく間違はない。

ただ、何故か紫は突き刺さるような鋭い視線で千花を睨みつけるような気がした。

「じゃ、じゃあ僕は失礼します！」

「わ、私も失礼します！」「いや、いやっ！」

千花と妖夢は脱兎の如く部屋を出ていくと、一目散に走り去ってしまった。

「ふふふ、千花さんは恥ずかしがり屋なのねえ」

「…………」

「あら、貴方がだんまりなんて珍しいわね。どうかした？」

「…………え。ただちょっと、変わった人だなあって思ってね」

「そうでしょ。狼のお耳に尻尾まであるのよ。可愛いわよねえ」

「狼…………か」

紫は小さく、唱えるようにつぶやいた。

そのつぶやきに幽々子は気づいたのか気づかなかつたのか、用意した杯に透き通つた清酒を注いだ。

第九話 ＜ 賢者の酒盛り ＞（後書き）

酒盛りとか言って全然酒盛りしてねえ……w

そういうえば、前作の空想夢ってけつこう読んでくれてる人がいるみたいで嬉しいです。

俺もあのお話はけつこう気に入つてて時々自分でも読んでるんです。でも、自分のお話を改めて読むってのは、ちょっとくすぐったい気分になりますね。

海鳴譚の方はまだ一話しか更新していないけど、また水曜日に更新したら読んでみてくださいね。

第十話 『スキャンダル？』

「……何とか間に合ひてよかつたね妖夢さん」

道場で仰向けに転がりながら千花がつぶやいた。

妖夢も同様にひっくり返りながら、それに答えた。

「つ、次は気を付けましょっ……はあ、緊張した」

背と腰の刀を降ろすと、妖夢はうんと背伸びして息を吸った。

千花は立ち上がると、いつものように道場の戸を開けてから『道場へと向かった。

そして的を用意して矢を番える。

弓を構える千花の後ろ姿を見ながら、妖夢は軽く微笑んだ。

「千花さん、毎日』の鍛錬しているんですね」

「うん。最低限自分で守れる程度の力はつけておきたいし。それに

「それに？」

千花が優しく微笑みながら振り向いた。

「こやとなつたら、妖夢さんとか幽々子様を守れるようになりたいからわ」

「…………」

一瞬、妖夢はその柔らかな眼差しを見つめていた。清らかな湖畔のように澄んだ、黒くまつすぐな瞳。

守れるようになりたいから。

その一言に、何故か妖夢の心がドクン、と強く鼓動した。

妖夢は千花に微笑みかえして、

「……それは頼もしいですね。いつか、私の背中を預けられるぐら
い強くなつてほしいものです」

「妖夢さんは僕なんかよりも凄く強いもんね。前に剣の稽古に付き
合つた時も僕がコテンパンに負けたんだし」

「誰にでも、得意不得意はあるものです。それに、あの時は千花さ
んが無理して付き合つてくれて」

カシャッ！

突然聞こえた耳慣れない謎の音に、千花と妖夢は顔を合わせた。

「……今の音、何？」

「ああ……？ カメラのシャッターを切るよつな……つて、まさか
！？」

音の聞こえた方向に、妖夢は手近な場所に置いてあつた盆をフリス
ビーの要領で放り投げた。

盆はそのまま弓道場わきに伸びた木々の奥へと吸い込まれていって、
「あたッ！？」

小さな悲鳴で帰ってきた。

「だ、誰かいるのか！？」

「あやや、これはマズイ……とおー！」

木々の隙間から小さな掛け声が聞こえると、何者かの影がバツと飛
び出しそのまま空の向こうへと消えていった。

呆然と見上げる千花と、それを悔しそうに睨みつける妖夢。

「今、何だつたんだろう?」

「……不覚を取りました。まさかこの白玉楼に侵入者を許してしまったとは」

「侵入者? けど、何のために……?」

すると妖夢はグッと拳を握りしめ、影が飛んでいったであろう明後日の窓を見つめ、

「あの天狗め! ……ぐずぐずしてられません。見つけ出して成敗しなくては!」

「せ、成敗? いやあの、だから妖夢さん……?」

妖夢の瞳が怒りの炎で燃え上がっている。

そこまで気にすることなのだろうかと千花は首を傾げた。

「千花さん、私は少し出かけてきます。すぐに戻りますので、しばしこをお任せします」

「へ? あ、うん。わかった……」

では、と律儀に千花へ一礼すると、妖夢はその場から飛んで白玉楼を飛びだしていった。

その間、千花は呆けたまま見送ることしか出来なかつた。

そして間もなくして、『道場に幽々子が顔を出した。

「あら、妖夢は?」

「それが、今しがた飛びだしていつちやつて……」

「……? どうこう」と?」

不思議そうな顔をする幽々子に、千花は先刻起こつた出来事を事細かく説明した。

すると口元に軽く緩め、やがてクスクスと微笑をもらした。

「それ、いつものことよ。実は天狗の新聞記者さんがいてね。よくここに取材に来るのよ」

「取材？ そういうのって普通許可とかいるんじゃないんですか？」

「彼女の場合、そういうの気にしないから」

「……無許可の取材ってことですか」

「気になるなら追いかけてみたら？ ビリセ『妖怪の山』に逃げてつただけでしようし」

「妖怪の山……？」

すると幽々子は『道場から外を指差して、

「冥界の境界を抜けると大きな山が見えるの。そこが妖怪の山。この幻想郷で一番大きな山だからすぐに分かると思うわ」

「そうか……じゃあ、ちょっと様子見てきますよ」

「気をつけてね。それと、千花さん？」

「はい？」

不意に呼び止められ、千花は幽々子に振りむいた。

「敬語、ダメって言つたでしょ？」

「う……すっかり忘れて」

「真面目ねえ。そういうとこ、ちょっと妖夢と似てるわ」

「そ、そ、うかな。妖夢さんはもつと真面目な気がするけど」

そこで何故か幽々子が眉根を寄せた。

「あらあら、妖夢にまでさん付けなの？」

「そりゃあ命の恩人ですし……つて、幽々子はそんなにさん付けとか敬語嫌いなの？」

そして何故か少し悲しそうな表情をして言った。

「私は、普通に接してほしいもの。お嬢様だとか言われても、全然嬉しくないわ」

「…………」

「あ、ゴメンなさいね。さあさあ、早く妖夢を追いかけなさいな」

「…………うん。じゃあ、行ってきます」

白花と矢束を背負つと、千花は幽々子に軽く微笑みかけてから口道場を出ていった。

第十話 ＜スキャンダル？＞（後書き）

次回、戦闘回です。

しつかしこう……男主人公つてのは落ち着かないですね。W
ずっと女主人公ばかり考察してるからなのかな。

今度公開する予定のオリジナルも、女主人公だしなあ。W
さて、幽々子と妖夢。貴方ならどっちを選ぶ？

俺だったら……妖夢かな。

いや、決して口リ属性という訳ではないんですが。

第十一話 『剣と風の輪舞曲』

「待ちなさい！」

「うわっちやあ、もう追いついてきましたよ」

太い木々が乱立する山の斜面を、妖夢は猛烈なスピードで駆け抜けていた。

ある時はその木に飛び乗り、枝から枝へと渡つて飛んでいく。そして、田の前で滑空する黒い影に叫び続けた。

「また勝手にお屋敷に忍び込んで隠し撮りをするなんて、もう許せません！ 天誅を下します！」

「相変わらず堅苦しい口上で。天誅なんて、今どき時代劇の台詞でしか聞きませんよ」

黒い影はそのまま妖夢を後ろにしながら、妖夢のそれを上回る速度で逃げていく。

このままじゃ、埒が明かない。

妖夢は背の刀を素早く抜刀すると、一度姿勢を整え刃を構えた。

「一撃で落とします。人符『現世斬』！」

大きく上段から振り下ろされた切つ先から閃光を纏つた斬撃が走る。そのまま光の軌跡を描きながら黒い影に向かつて凄まじい速さで伸びていく。

しかし、

「殺氣ッ！ ですが！」

影はくるつとその場で回転すると斬撃をあつさりを避けてしまった。その反応速度に、妖夢は唇を噛みしめた。

「チッ……！　背後からの攻撃なのに避けられるなんて！」
「じつこいですねえ。しょうがないからお相手しますよ！」

すると妖夢の目の前の枝に影が降り立つた。
木漏れ日がその影を照らしだすと、現れたのは白いシャツの少女だつた。

動きやすそうな黒のショートヘア。好奇心に溢れた天真爛漫な瞳。
そして背には、鴉のような漆黒の翼が広がっていた。

「しかし、この清く正しい射命丸文に不意打ちとは卑怯ですね。仮にも妖夢さんともあろう武人のすることは到底思えません」
「許可も無く写真撮影する人のどこが清く正しいんですかッ！」
「眞のスクープを求める私の心は、常に明鏡止水の如くですよー。」「それは微妙に使い方が違います！」

再び刀を払つて斬撃を飛ばす。

しかし文は軽く枝を飛んでそれを回避、と同時に腰から鳥の羽を思わせるような団扇を取り出し構えた。

「幻想郷一の速さを誇る私に、そんな軽い攻撃が当たるもんですか。
それッ！」

文が団扇を一薙ぎする。

小さな団扇が軽く薙いだだけで激しい暴風が巻き起つて、枝に立つていた妖夢が吹き飛ばされかける。
ギリギリのところで枝に片手だけでつかまつてそれを堪える。

「へッ……」

あの団扇さえ、奪えれば。

妖夢は一度刀を木に差して体制の安定を図る。そしてもう一度相手の姿を睨み据えた。

文は太い木の枝に仁王立ちのような形で構えていた。余裕の笑みでこちらを見降ろしている。

……嫌な気分だ。

「ここの風の中では、貴方ご自慢の刀も振るえないでしょう。や、降参するなら今の内ですよ？」

「誰が降参なんかしますか！」

「じゃあ、次は弾幕を織り交ぜましょつか

文が一度団扇を構え直して一瞬だけ風が止んだ。

その刹那、妖夢は枝を蹴つて文の正面に踊りかかった。この距離なら、届く！

「はっあああああああ……！」

「……浅はかですねえ。そんな簡単に」

刃が届くよりも先に、文の姿が震む。

「届くと思いますか！」

そして妖夢の背後を取った文は、握りしめた団扇に力を込めて再び放った。

「疾風『風神少女』つと！」

「あ！ つく、しまつた！？」

風と共に大小様々な光弾が妖夢に襲いかかる。

体勢を崩しながらも妖夢はそれを斬り払い凌ぐとするが、今一步遅かった。

さばき切れなかつた一分の弾幕は妖夢を直撃し、そのまま妖夢は地面に叩き落とされてしまった。

背に重い痛みが走り、肺に溜まつていた空気を吐きだした。

「う、くう……」

「私に負けるとは、まだまだですね。恋に現を抜かしているヒマがあるのならもう少し修行したらどうです?」

「い、恋……？ 何を言つて……？」

「さて、とりあえず決着といきましょうか

「ぐ……」

文の団扇が妖夢の鼻先に近づけられる。

この距離では、回避しようと思つぽうが馬鹿馬鹿しい。

潔く、妖夢は瞳を閉じた。

「これで、私の勝ちといつことで」

文が団扇を振り上げる。

そして今までに振り下ろされたようとした瞬間、二人の間に一陣の疾風が薙いだ。

目を開けてみると、文は団扇を持っていた手を抑えながらあらぬ方向を見つめていた。

「……ツ！？ 何者ですか？」

そして妖夢は、自分の足元に刺さっていた小さな矢を見つけた。

「こんなものいつたい何処から、と視線を彷徨わせ、そして気づいた。

「間一髪、だつたかな」
「ち、千花さん！？」

枝に立つ、一人の少年。

道着のような衣服に、狼の耳と尾を持つ白玉楼の使用人。そんな彼が、今日の前で弓を構えて立っていた。

「ほほう……ヒロインのピンチに颯爽と駆けつけるヒーロー気取りですか。面白いじゃないですか」

「……あの人ガ、屋敷に忍び込んできた新聞記者つて人ガ」

千花は弓を構えながら文を観察した。

清楚な白シャツに首から下げた小さなカメラ。それに、よく見れば胸ポケットには手帳のようなものが見える。千花が文を見つめていると、文はニヤニヤしながらペンを抜いて千花に向けた。

「『突如白玉楼に現れた謎の少年！ 道場で屋敷の護衛と逢引！』『……は？』

突然の言葉に、一瞬言葉を失う千花。

「私は見ましたよ！ この、恋とは無縁どころか、そんな運命の赤い糸（なんて）縁までも消し去る右手を持つていそうなこの妖夢さんと！ 貴方が弓道場でいやつく現場を！」
「は、はあッ！？」

この素つ頓狂な声は妖夢である。

千花は「…」と、まつたく意味が分からぬと言つた様子で首を傾げていたが。

「い、いぢやつぐー？ 私が！？ あの方とー？ そ、それは大きな誤解です！」

「誤解も一階もありませんって。仲睦ましげに熱うい視線を送り合つていたじやないですか！」

「だ、だから違いますって！？」

「……？ よく分かんないけど、そんなことを記事にしているの？」

「そ、そんなコトとはどういう意味ですか！？ これは、幻想郷中を震撼させるビッグニュースなんですよ！？」

「変な新聞記者さんだな」

「私から見れば、貴方もそうとう変ですけどね」

「……妖夢さん、怪我ない？」

木の根元にもたれ掛かる妖夢の姿に目をやると、妖夢は小さくうなずいて返した。

「僕にはよく分かんないけど、無許可の取材ってのは良くないんじゃない？ だからさつきの写真、返してもらいたいんだけど」

「ご冗談を。せっかくのスクープ、この私が簡単に手放すと思いませんか？」

「じゃあ、しょうがない」

刹那、千花の弓から数本の矢が一気に放たれ文の足元に突き刺さる。すると文は千花を見上げ、余裕たっぷりの笑みを浮かべた。

「威嚇射撃のおつもりですか？ 別にこんなもんじや私は驚きもしませんよ」

「なら、これはどうかな」

次いで矢を放つ。

今度は一本だけだったが、その軌道は文へとまっすぐ伸びていく。何の捻りもない攻撃、避けるのもつまらないしあの少年を齧かしてやろうか。

そう思った文はギリギリまで引き付けてその矢を掴んでやろうかと構えた。

矢が胸の前まで近づいたその瞬間手を伸ばし、そして矢がガクンと軌道を下に変えた。

「なッ！？」

虚空を掴む手。

文の行動を読んだかのように矢は落ち、そのまま首から下げていたカメラに直撃した。

レンズが派手な音を立てて割れる。

「な、な、な……！？」

「すごい……！」

がくがくと体を震わせながら、文は木の上の千花を忌々しげに睨みつけた。

「わ、私の大事なスクープが……！ もう絶対に許しませんよ……！」

激昂した文は落ちていた団扇を手に取り千花に向かって大きく雑いだ。

強風が生み出す弾幕と真空の刃が重なり、その全てが一斉に千花に襲いかかる。

「に、逃げてください千花さん…」

「……シ、これはマズイかも」

それでも、千花は矢を数本番え正面に向き直る。
目標は、あの弾幕。

「動く目標つてのは初めてだけど……大丈夫だよな」

落ち着いて狙いを定め、そして息を吐く。
放たれた矢は見事な曲線を描き、そして光弾を貫きかき消した。
……しかし、如何せん量が多すぎた。
数本番えるので精一杯の千花には、とてもじゃないが全ては対応しきれない。

「そのまま消し炭になりなさい…」

もう、ダメかと思つたその時、

スコシ、チカラヲカシテヤロウカ。

「ツツー?」

目の前で、文の放った弾幕が全て一瞬の内にかき消えた。
その衝撃で生じた白煙に包まれ、千花の姿が消える。
……そして、

「……」

「あ……」

千花の双眸が、文を舐めた。

一瞬で、千花の姿が豹変していた。

それは妖夢が初めて出会った時と同じ、蒼の髪、そして蒼の瞳。千花は無言で文を見下ろしていた。

その表情に特別な色は無く、ただ、見下ろしているだけだった。それだけなのに、文も、妖夢も背筋がスッと冷えていくを感じた。

「あ、蒼くなつただけじゃないですか！？ そんなこけおどしが私に通じると思つてるんですか！ 疾風『風神少女』！」

再び襲いかかる弾幕と暴風。

すると千花は弓を下に構え、矢を番えず弦だけをつまみ、

「……『鳴キ弦』」

ピン、と小さく弾いた。

三味線の弦をゆっくりと弾くよつな、とても無機質で小さな音だった。

たつたのそれだけ。

千花が弓の弦を弾いただけで、目の前の弾幕や風が全て一瞬の内に消え失せた。

それはあまりにも呆気なく、そして異様な光景だつた。

「そ、そんな……！？ 私の切り札ですよコレ！？ それなのに、弓の弦を弾いただけって……」

これを田の間たりにして、ショックを受けない人物など存在するのだろうか。

千花は弓を折り畳んで枝を降りると、再び文をその蒼の双眸で見据えた。

「ひ……ッ」

「もう決着はついた……それでもまだ鬪つてしまつたのなら、相手をするけど」

文は顔を恐怖に引きつらせ、大きく後ろに飛んで、

「お、覚えてなさいよー。」

捨て台詞を残し、脱兎の如く逃げ出した。

千花はその姿を途中まで目で追いかけ、そして視線を妖夢に戻した。

「ち、千花さん。その姿は……」

「……あ」

すると、千花の髪の色がだんだんと薄くなつていき、やがていつも
の黒髪に戻つた。

ぐらりと体が崩れると、その場にへたれ込んでしまつた。

「千花さん！」

「あれ、力が急に……だ、大丈夫、妖夢さん？」

「わ、私は大丈夫です。でも、今は……」

「……よくわかんない。頭の中に声が響いてきて、そしたらこうな
つてた」

「……」

千花が優しく微笑んだ。

「さて、そろそろ帰るわ。幽々子様も心配してるので、
「は、はい……」

ふらふらと立ち上がる千花の背を見ながら妖夢も立ち上がる。

この人、本当に何者なのだろうか。

体についた埃や枯れ葉などを払つと、妖夢はその背中を追いかけて走りだした。

第十一話 『剣と風の輪舞曲』（後書き）

関係無いんですけど、輪舞曲ってさくと輪舞旋風を思い出しちゃうねw
さて、久々の戦闘回…… すけど、どうも迫力に欠けるな；
弾幕勝負を文章にするのは、やはり難しいものです。

いつも読んでくれてる読者さん、そしてお気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。
感想とか登録とかされると、やっぱり嬉しいです。
今後の励みになります。

第十一話 ＜謎の力＞

「あの力は、何だつたんだね?……」

妖怪の山から帰った千花は一人、弓道場で弓を構えながら先刻起こつた出来事を思い出していた。

突然頭に声が響き、気がついたらとんでもない力を見につけていてあの少女をあつという間に退散させてしまった。

あの声は、何者なのだろうか。

あの時感じた、重くのしかかるような重圧。

ただ、千花はあの声に聞き覚えがあるような気がしていて、

「千花さん

「…………あ

背後からの声に気づいて振り向くと、そこには妖夢が立っていた。普段幽々子や他の侍女たちにも見せる、いつもの凜とした表情のままだ。

「ゴメン、ちょっとボーッとしてて……何か用?」

「先ほどは、ありがとうございました」

すると妖夢は丁寧に頭を垂れ、千花に礼を述べた。千花はいやいや、と両手を振つて、

「大したことはしてないよ。運が良かつただけで」

「運…………ですか」

妖夢は納得がいかないという表情を浮かべ、そして懐から小さな長

方形の紙を取り出した。

初めて見る千花はそれをしげしげと見つめ、

「これは？」

と訊ねた。

「一般的に術符^{スペルカード}と呼ばれるものです。私たちが弾幕『』^{ヒツ}と称される遊びや戦闘の時に使うものなんですねけど」

「……それが、どうかしたの？」

千花が首を傾げる。妖夢はかまわず話を続けた。

「もしかして、千花さんこれと似たものをお持ちですか？」「いや、そんなもの初めて見るけど……？」

「そうですか……すいません、おかしな事を聞いて。……では、失礼します」

術符を懷に戻すと、妖夢は一礼して『道場を後にした。

千花はため息をついてから自分の右手を見つめた。

「……そりや、気になるよな。僕だって知りたいぐらいなんだし」

そして振り返つて『』の稽古に戻る。

赤い中心点を見据え、矢を放つ。

ただ、心中ではあの声のことが気になつて仕方がなかつた。
恐らく、自分の記憶に関する重要な事だと思う。

それなのに、思い出そうとすれば頭がそれを拒むかのように激しい
頭痛に悩まされる。

……もしかして、思い出してもいけないのであつが。

自分の記憶なの、思い出してもいけないような記憶なんであるのだろうか。

「……ツ

少しだけ、的からずれた位置に矢が当たった。

・・・

「はあ……」

妖夢は屋敷の縁側で珍しくため息を吐いた。
別に疲れた訳ではない。

ただ、何となく千花のことが心の隅で引っかかっていたのだ。

「あの蒼い姿はいったい何なのだ。助けてもらつたのに、何故
か……」

恐かつた。

しかし、その言葉は口にせずに飲み込む。
助けてもらつたのに失礼だ、というのもある。
だが、あの姿はやはりおかしい気がする。

「……何か、調べる方法とかないのかな」

「あら、妖夢?」

振り返つてみると、そこには幽々子が立っていた。

妖夢は慌てて姿勢を正そうとしたが、幽々子がそれを軽く手で制した。

「そんなに堅くしなくてもいいのに。それで、どうかしたの？」

「いや、えつと……」

「妖夢がこんなところでボーッとしてるなんて珍しいわ。何か悩み^いとかしら」

「まあ……そんなとこひかですか」

「ふうん……？」

幽々子は妖夢の隣に腰掛けると、妖夢の顔を覗きこんで、

「もしかして、千花さんのコト？」

「……はい。先刻、妖怪の山で千花さんに助けてもらつたのですが、

その、何と言いましょうか……」

「……？」

その時の光景を思い出しながら、妖夢はぼつりぼつりと語りだした。

「突然、姿が真つ蒼になつて、それでもの凄い力での天狗を退けてしまつたんです。その時の表情が、少し怖くて……」

「確かに妖夢があの人を見つけた時も、蒼い姿をしていたつて言つてたわね。そんなに凄いの？」

「弾幕と暴風を、弓の弦を鳴らしだけで消し去つてしましました。あれは、千花さんの妖力が何かなのでしょうか、……」

「流石に、私には分からぬけど……気になるのなら訊いてみたらいいじゃない」

「そ、それは……ツ」

「千花さんの蒼い姿かあ……私も、ちょっと見てみたいかも。蒼い狼みたいできつと可愛い……」

「……幽々子様？」

何故か、そこで幽々子は言葉を切つて普段見せないような、何か思

案しているような表情を作った。

こんな表情、初めて見た。

「蒼い……狼？ そういうえば最近、ビーカでこんな話を聞いたようにな」

「幽々子様？」

「ん~、ちょっと待って。すぐに想に出すから。ううん、ううん

……」

腕を組んで唸つてると、幽々子がパッと顔を上げ手を打った。
そして、もうよわうよと繰り返しながら、

「思ひ出したー！ やよいび紫と一緒にお話しする時よ。えっと、確か『蒼狼』って言つた凄く強い妖怪のお話ー。」

「蒼狼……？」

「私の部屋に絵巻があるから見てみる？ もしかしたら何か関係があるかも」

「ぢ、是非！ お願ひします！」

妖夢は幽々子に深く頭を下げた。

幽々子は、いいから早く行きましょ~。と優しく微笑んで返した。

・ · ·

「ひれよ。少し古こものばび……」

唐草模様の絵巻を広げると、そこにままで蛇が走りまわっている
よつなぐにゃぐにゃとした文字が広がっていた。

妖夢は目を凝らしてそれをじらぐ見つめて、

「よ、読めません……」

「はいはい。ちょっと待つて……と。あら、眼鏡は何処に置いたかしら？」

あつたあつたと、机の上に置いてあつた小さな眼鏡をかけると、その難解な文字を読み上げた。

「簡単に言つとね、昔、この幻想郷のどこかに、蒼狼と呼ばれる強い聖獸を信仰する小さな里があつたそよ。蒼き体躯に、その足は千里をも駆け抜け、牙は山をも碎く。よくある御伽噺なんだけど、実はこの蒼狼は実在するそよ」

「でも、そんな里なんか聞いたことがありますんけど……」

「本当にあるのかしら。どうせなら紫に聞いておけばよかつたわね。でも、これって今の話と似てない？」

幽々子が巻物を広げると、その先に狼の耳と尾を持つ人物が描かれた絵を見つけた。

蒼く輝く髪に、蒼の双眸。

そして手には、同じく蒼い色をした太刀を握りしめていた。

妖夢は幽々子を見つめて、

「これ、何処で見つけたんですか？」

「んと……確か、妖忌伯父さまのお部屋よ。ずっと前に私がこつそり忍びこんで借りちゃつたの」

「……よく怒られませんでしたね」

「私もまだちつちゃかつたから許してくれたんじゃないかしら？
それはさておき……」

幽々子が巻物を広げようとして、途中でその手を止めてしまった。いや、正確には巻物のその先の記述が切れて無くなっていた。

「残念だけどコレ、ここまでしか書いてないのよ。大まかな伝承と、それからこの絵だけ。ちょっと情報としては足りないわねえ」

「……そうだ、慧音先生ならもしかしたら」

「慧音先生つて、里で寺子屋を開いてるあの？」

妖夢は幽々子と向かいあつて姿勢を整えた。

「幽々子様、その、折り入つて頼みがあるのですが」「分かってるわよ。これ、貸してほしいんでしょ。もちろんいいわよ。可愛い妖夢のお願いですもの」「……ありがとうございます」

幽々子から両手で丁重に受け取ると、妖夢は静かに立ち上がった。そんなに気になるのなら自分で調べればいい。里へ行って、寺子屋での巻物の伝承について慧音先生に訊ねてみよう。

「ねえ、妖夢？」
「は、何でしようが幽々子様」「千花さんの口ト、そんなに気になるの？」
「……失礼だとは思いますが、やはりあの姿は」「ん、そうじゃなくて」「……？　どうこう意味でしうつか？」

幽々子はからかうようにクスクスと微笑して、

「妖夢がそれだけ必死になるなんて珍しいじゃない？　何か特別な気持ちもあるのかなあ……つて」「……そ、そういう意味ではありません！」

「なんだそりゃ。分かったわ。じゃ、気をつけて行ってらっしゃいな」

「は、はい。失礼します」

全く、妖夢といいあの天狗といい、そして幽々子様まで何を言いたいのだろうか。

妖夢は顔が火照るのを感じながら、幽々子の血煙を出て自分の部屋へと向かつた。

しかし、妖夢は廊下の途中で足を止めて自分の心に問うた。

それなりじつして、蒼狼の事など調べよつて思つのか。
別に、千花の事など気に掛ける必要などないのでは、と。

「い、これは……幽々子様の安全のため……なんですね」

身支度を整え、妖夢は白玉楼の門をくぐつた。
まずは寺子屋だ。

妖夢は気を取り直し、里へと向かつて歩き出しだ。

第十一話 ▲ 謎の力 ▼ (後書き)

書けない病が……；
だ、大丈夫ですッ！ 何とか書き続けます！

第十二話 ＜ 蒼狼伝説 ＞

「おや、珍しい客人だな。白玉楼のお庭番がこの寺子屋に何用かな」

知的な微笑を浮かべながら、上白沢慧音は戸口に立つ妖夢に言った。

「幻想郷の歴史を知りつくす貴女に、お訊ねしたいことがあります。蒼狼という聖獸を信仰する里の事を」

「……蒼狼とは、懐かしい話だ」

「やはりご存じなんですね」

「もちろん。そしてこれは君にも関係のあるお話だ」

「私……ですか？」

ついてきなさい、と慧音は妖夢を促した。

そして寺子屋の中を歩き、やがて蔵書室と書かれた部屋に辿り着いた。

中は陽の光がほとんど届かないのか、少し埃っぽかった。

棚の本や巻物にも、うつすらと埃が積もっている。あまり使われていないのだろうか。

妖夢が部屋を見まわしていると、慧音は奥から一つの巻物を取り出した。

それは幽々子に見せてもらった物と同じ、唐草色の巻物だった。

「正確には君の祖父、妖忌が関係してるんだ。これを『一覽』

「…………」

広げられた巻物は、妖夢が見たそれと似たような難解な文字で書かれていた。

慧音がそれを音読しながら説明する。

「一つずつ説明しようか。まず、この幻想郷の西の果てに秘境とも言えるような小さな里がある。名は忘れてしまったが、ここでは聖なる蒼き狼を聖獣として崇め信仰していたそうだ。しかし、その力は大変凶暴で、定期的に贋を捧げないとけなかつたほどらしい。そしてある時、村で蒼狼の力が暴走した」

「…………」

巻物の続きを広げながら慧音が続ける。

「その時に君の祖父、魂魄妖忌が村人に依頼されて蒼狼退治に赴いたのさ。そして見事蒼狼を退治し、蒼狼の魂をある刀に封印したそうだ」

「刀……ですか？」

巻物の少し先を広げた時、妖夢の目が微かに見開かれた。
そこに描かれていた太刀は、最初に千花が振るつていたあの蒼き太刀だった。

「封印された蒼狼はその後特に暴走することもなく、刀は里の奥で安置され村は平穀を取り戻した……が、この話には少し続きがあつてね」

「続き、ですか？」

巻物を收めると、今度は比較的新しい巻物を取り出し広げた。

「その刀は蒼狼の妖氣や神力といったものが宿つていてな。度々他の妖怪に狙われていたそうだ。手にすれば一騎当千、森羅万象の理をも断つ……なんて噂も広まっていたそうだ。確かに、聖獣の力が宿つた刀ならそれぐらいの能力が備わっていても不思議ではないが」

「…………」

妖怪を一刀の下に伏せたあの一撃はこの刀の力だったのか。でも、それならどうして千花がこの太刀を……というより、

「……これ、本当に実在するお話なんですか？」

すると慧音は口元で軽い笑みを浮かべて、

「ああ、実在する話だよ。確か……少し待ってくれ」

戸棚の奥から別の巻物を取り出して広げる。

それはこの幻想郷の簡易な地図だった。

地図の中心を指差しながらそのまま西へと動かし、

「こじがちょうどこじが今いる里になる。そしてこじから西へずっと行くと、今話した蒼狼信仰の里がある……らしき」「らしいとは？」

「こじの目で見たわけではないから、私の口からは確かな事は言えないんだ。ただ……あの新聞記者の、何と言ったかな。あの天狗が昔一度だけ調査に行つたと話を聞いたが」「あの、迷惑極まりない天狗が……ですか」

分かりやすいくらい嫌悪の表情を浮かべると慧音は苦笑して、

「迷惑極まりないのは事実だが、彼女の情報収集能力は侮れないぞ。聞いてみたらどうだ？」

「う、ううん……」

先日戦闘した手前、そんなことを簡単に頼めるわけがない。

とはこえ、ここまで聞くと気になつてしょうがない。

「……自力で何とか行けませんか?」

「難しいと思つた。君にとつては未開の地だらう? 何か手土産でも用意して、天狗のこの機嫌を伺つたらどうだ?」

「それだけは嫌です!」

「そ、そうか。ううん、しかし他に方法は」「いえ、けつこうです。……失礼します」

「あ、お、おい!」

妖夢は慧音に簡潔な礼を述べると、一礼してから蔵書室を出て行つてしまつた。

残された慧音は頭をかきながらつぶやいた。

「あの子は何で急にこんなことを調べているんだらうな。妖忌の部屋で巻物でも見つけて興味が湧いたとでもいつのか……だが」

あいに手を当て、慧音は眉根を寄せた。

「少し気になるな。あの天狗に依頼して調査でもしてもうむづか…

…」

そして広げた巻物を全て一寧にまとめるとい、慧音は蔵書室の鍵を閉めた。

第十三話 ＜ 蒼狼伝説 ＞（後書き）

そろそろ恋愛モノなのか怪しくなってきた……；
さて、明日は週に一度の海鳴譚の更新日だ。

第十四話 ＜記憶の手がかり＞

寺子屋から帰つてから、妖夢は自室でため息ばかり吐いていた。

「……ダメだ。おじい様の部屋には地図になりそうなものは一つもなかつた。これ以上の手がかりはないのかな」

ふと、机の上に置いた巻物に目を落とす。

これは先刻幽々子から借りたものだ。

もう一度内容を確認したが結果は変わらず、あの蒼狼伝説の伝承が少し残つているだけだ。

破れた先がどこかにあると思い、祖父の部屋や書斎を片つ端から調べたが結局何も出て来なかつた。

妖夢は仰向けに倒れると、そのまま軽く瞳を閉じて、

「他に探してないところかあ。あとおじい様に関係する場所つていうと……あ

一つだけ、あつた。

「あとは……道場だ。でも、本棚とかあつたかな……？」 とりあえず行つてみよつ

部屋を出て廊下を渡り道場の正面に立つと、奥から聞き慣れた小気味のいい音が聞こえてきた。

「千花さん、相変わらず鍛錬してるんだ。邪魔しちゃ悪いから、一
言断りないと」

失礼します、と言つてから道場に踏み込むと千花が弓道場から顔を覗かせて微笑んだ。

「ああ、妖夢さんか。何か用事?」

「いえ、少し探し物をしてて……。お部屋を見てもいいでしょうか?」

「探し物か。じゃあ僕も手伝うよ」

「そんな、千花さんの手を煩わせるような……」

千花は弓を収めると妖夢の方へとやつてきた。

千花はちょうど妖夢より頭一つ分ほど背が高いのだが、妖夢の視線に合わせようと千花はいつも屈んでくれる。

少し恥ずかしいのだが、それを口にするのもやはり恥ずかしい。

「遠慮しなくてもいいって。僕は一応この白玉楼の使用人だからね。妖夢さんの手伝いも、もちろん使用人の仕事さ」

「……ありがとうございます。それと、私の事は妖夢で結構ですよ」「ん、分かった。じゃあ、僕も千花でいいよ」

そして千花と共に妖夢は道場の奥の個室、今現在は千花の自室として宛がわれている部屋へと向かつた。
戸の前に立つた瞬間、何故か突然妖夢は頬を染めて、

「そ、そういうえば殿方の部屋に入るのって、は、初めてだ……」「何もそんなに緊張しなくとも……」

千花は苦笑しながら部屋の戸を開けた。
何故か一瞬無言になる二人。

「…………」

「…………」

千花は苦笑したまま、妖夢はその部屋の内部をしばし見つめていた。これといった装飾も無し。

隅に置いてある箪笥に、それから小さな文机。

押し入れがあつて窓があつてと、至つて普通の部屋。

「……私の部屋とあまり変わりませんね」

「そもそも、寝るとき以外はほとんど使わないからね。……何か期待してたなら『ermen』」

「あ、いやそんな『ト』で謝られても……」

「それで、探し物つて？」

「ああ、はい。巻物なんんですけど、どこかで見かけませんでしたか？」

「巻物……？」

すると千花は押し入れを開けて何やら「そ」と奥の方へと手を伸ばしていた。

その間、妖夢はぐるりと部屋を見まわしていた。火照っていた頬に手を当て、

「わ、私つたら何を考えたんだか……」

先刻の謎の行動にため息をついた。

……どうも最近雜念が混じる気がする。

「あ、もしかして『レ……かな』

千花が押し入れから小さな巻物を取り出して戻ってきた。

妖夢が何度も見た唐草色の巻物だつた。

「あ！ それかもしけません。よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

千花から巻物を受け取ると、そこにには相変わらず歪んだ文字が書き連ねられていた。

「何だこの、あまりにも達筆過ぎて分からぬ文章は……？」
「おじい様の文章……だと思います。でも、こんなに下手つひだつたかなあ」

「で、内容は？」

「えつとですね……あ」

ふと、千花の顔を見て妖夢は思った。
もしかしたら、これが千花さんの記憶の手がかりになるんじゃないだろうか。

「……妖夢？」

「千花さん、記憶を失くしたと前に言つてましたよね」

「それがどうかしたの？」

「もしこれが、自分の記憶の手がかりになるとしたら……どうしますか」

「え……？」

千花の瞳が妖夢を見据える。

ただ、その瞳は何かを恐れているように微かに揺れていた。
妖夢は意を決して口を開いた。

「実は、この巻物は……」

そして妖夢は千花に、蒼狼伝説の事とそれを信仰する里の事について語りだした。

蒼き聖獣の事、聖獣を信仰している里がある事。

ただ一つ、千花の姿に恐怖して調べ始めたことだけは言わなかつた。話を聞き終えると、千花はふうと嘆息して、

「蒼狼伝説……か。すごい話だね」

「気にはなりませんか？ 自分の記憶のこと。余計なお節介かとも思いましたが……」

「お節介なんてとんでもない。むしろ嬉しいよ。僕のこと気にかけてくれてさ」

千花はフツと表情を和らげ微笑した。

凛と澄んだ、とても優しい瞳だった。

その瞳に見つめられると、胸の端っこがむず痒い気がしてくる。妖夢は頬を染めながらはにかんだ。

「で、でも正確な場所が分からんんです。慧音先生はあの天狗なら詳しい場所が分かるとは言つてるんですけど」

「前に戦つてるから頼みづらいね。……じゃあ、僕たちだけで行こうか？」

「で、でしたら早速準備を」

「あらあら、一人してデートの相談かしら？」

『ゆ、幽々子様！？』

いつの間に現れたのか、二人の後ろで幽々子が立っていた。夕日を背にしているせいか表情が影で少し見えない。

「だったら私も混せてほしいなあ……ダメ？」

「で、でででデートの計画なんとしてませんよ！ こ、これは千花

さんの記憶の……

「そんなことより、もつタタ食の時間よ。早くいらっしゃいな」

そう言って、幽々子はあつとこつ間に部屋を出て行ってしまった。

……それだけを言つたためにここまで来たのだろうか。

そして妖夢は、思いつきり忘れていた主の存在を思い出していく

「……これじゃあ、里まで行くのは難しいかもしません」

「仕方ないさ。幽々子様を守るのが、僕たちの仕事だろ?」

「で、ですが……その、すみません」

すると、妖夢の頭にポン、と千花の手のひらが乗つかると優しく撫ぜた。 猫でも撫でるような手つきだったが、その手はとても暖かかった。

「気にしなくていいよ。やうごう話を聞けただけでも嬉しかったし。

ありがとう、妖夢

「…………はい」

妖夢は恥ずかしくなつて、ちょんと一歩身を引いて一礼してから逃げるようにして部屋を出で行つた。

何だか全身がカーッとなつてているのが、不思議でたまらなかつた。

「蒼狼伝説……か

部屋に残つていた千花は、その伝承が記された巻物をひらと見やつた。

蒼き髪、蒼き太刀。

そして、その先に描かれた巨大な狼の図。
その姿を見ていると、胸の底が疼く。

「……蒼ノ聖獸、力」

蒼の光を帯びたその瞳は口の端を微かに上げて笑んだ。

第十四話 ＜ 記憶の手がかり ＞ （後書き）

少しずつ、妖夢の心境に変化が……？

お気に入り登録件数20件、ありがとうございます。

ひょっとミスがあつて少し遅れました；

第十五話 ▲ 月下飛行 ▼ (前書き)

今回、少しグロ注意です。

第十五話 ＜月下飛行＞

薄く輝く月光の下、一人の少女が夜闇を切り裂きながら滑空していた。

真白のシャツに、闇に溶け込んでしまったような黒の翼。

先刻妖夢と千花と対峙したあの天狗、射命丸文だつた。

彼女は時折木のてっぺんに器用に着地しながら、何度も進路を確認しながら再び跳躍。

目指しているのは、

「あの名もなき里……ですか。こんな真夜中で迷惑だけど、あの状態で断つたら私も死んじゃいますからねえ……」

今宵、空を飾る月は満月。

彼女はワーハクタクという妖怪とのハーフであり、満月の夜になると覚醒して平常時では考えられないほどの能力を得るのである。

慧音が自宅を訪れた時、彼女は最高にハイな気分だあ！ とか叫びながら寝起きの文にこの里の調査を命じてきた。

半ば強制、逆らつたら恐らく天地をも割るような威力の頭突きが文に襲いかかつたであろう。

「しつかし、ほつ、と。どうしてまた急にあの里の調査なんか。あの里は外界との接触を頑なに拒んで今まで至るというのに。幻想郷の歴史に何か追記したいことでもあったのでしょうか？」

トントンとテンポよく木々を蹴つて奥へと進む。

不思議な事に、真夜中だというのに妖怪の気配がまったく感じられない。

そして奥へと進むことに木々の姿がどんどん寂れていく。

少し前まで青々とした新緑の森だつたというのに、今では田の前全てが葉の一つない枯れ木ばかりとなつていた。
文は少し眉根を寄せて辺りを見まわした。

「……おかしいですね。そろそろ里の入り口に当たるはずなのです
が」

一度、着地しよう。

文はぐるりと回転してから地面へと着地する。
トン、と足音が響くと森の闇の中へと吸い込まれて消えていく。
妖怪どころか、人の気配すら感じない。

真夜中でみんな寝ているからか、それとも……

そのまま漆黒の闇の中を歩いていくと、田の前に見覚えのある小さな小屋を見つけた。

里の入り口を見張る監視小屋だ。

この里に入る時には必ずここで断つてからでないと村人から攻撃される。

前に文自身も村人総出で襲われたことがある。
ぱちんこ、弓矢、槍とか刀とか、割と容赦ないもんだから一目散に退散した思い出が……

「あれ？ 変だな……」

小屋には常に明かりが灯っているはずなのに何の明かりもない。
見張りの兵士もいないうらしい。

文はくすりと悪い笑みを浮かべて、

「これってばもしかしてスクープの予感？ くふふ、それでは早速取材しましょうか」

閉ざされた木製の門を飛び越え、文は里の中へと入つていいく。

小さな道を抜けると、やがて目の前に小さな家屋が見えてきた。見張り小屋同様、明かりは無い。

そして一步踏み込んだ瞬間、

「……ツ」

そこに広がる光景に文は思わず一步後ろに後ずさつた。

「な、何ですかコレは……！？」

暗闇に浮かぶボロボロに朽ち果てた家屋。

そしてそのままに横たわる、恐らく人間であろう死体。

以前文が見た里の面影は何処にも無かつた。

「！」コレ、どういうこと！？ 私が取材したのって数か月前です
よ？ それなのにこの有様は……！」

カメラを握りしめながら、一軒一軒家屋を調べて行く。

手前の家屋は、壁に巨大な穴がぽつかりと出来ていて中の様子がう
かがえた。

その奥には、

「う……」

人の腐乱死体が無残に転がっていた。

ある者は腕が引きちぎられていて、またある者は首から上が無くな
つていた。

まるで獰猛な獣にでも襲われたような有様だった。

「 いじみは……？」

里の中央には里の全員が共同で使つ井戸があるのだが、その井戸の縁にも死体が倒れていた。

井戸の奥から異臭がした。

さすがにこの中は、見たくない。

そして他の家屋も同様にボロボロだった。

酷いものは家屋の原形をどどめていなければ崩れ去っていた。

「 な、何ですかコレは！ いつたい何が起こったっていうんですか！」？

思わず文は叫んでいた。

すると、背後に気配を感じて文はバツと振り返る。

そこにいたのは、

「 ……紫さん？」

「 あら、貴方もここの調査かしら」

胡散臭そうな衣装に身を包んだ金の髪の少女、八雲紫が自分の式を背後に連れ従えながら立っていた。

九尾の式が紫の傍へ一步歩み寄る。

「 ……紫様。微かに妖氣を感じます。里が襲撃されたのはつい最近かと」

「 ええ、おそらくそうでしょうね」

次いで九尾の少女の傍から、一回りほど小さな少女が顔を出す。その表情が微かに震えていたが、何とか口を開いた。

「あの建物、牙とか爪でバリバリ！ つて壊した感じだつたよ。すつごく大きな獣みたいな……」

「ありがとう、かえん 橙。怖いのにちゃんと調べてくれたのね」

「……えへへ」

震えていた表情があつという間に緩んだ。

そんな光景を間近で見て悶絶している少女がいるが、とりあえず無視して、

「紫さん、これ、どういう事なのか知ってるんですか！？」

目の前で微笑む紫に、文が叫んだ。

すると、いつものように余裕たっぷりの笑顔で返してくるかと思つていた紫の表情が険しくなつて、

「……貴方、あまり深入りしない方がいいわ。でないと、死ぬわよ」

物騒な返事が返ってきた。

それは冗談でもなんでもなく、真剣そのものだつた。

「真実を追求するのが私の務め。ここまで知った以上、最後まで調査したいんです。だからお願ひです。教えてください！」

「……」

紫は険しい表情のまま、しばしあごに手を当てながら思案した。やがて小さくうなずくと、くるりと向きを変えた。

「ついてきなさい。面白い物を見せてあげるから」

そのまま式を連れながら里の奥へと歩く紫。

文は早足で追いかけると、やがて開けた場所に辿り着いた。

「な、何ですか……コレ。わざわざから死体ばかりですよ」

そこは、かなりの広さのある空間で、恐らく里の祭事か何かで使う広場なのだろう。

だが、そこを飾っていたのは先刻見たものと同じ、いや、少し違う。広場には、いくつもの死体が転がっていた。

ただ、里の内部とは違ひヒト以外の死体も転がっていた。

妖怪だ。

人の死体と重なるように、いくつもの妖怪の死体が散らばっていた。里で見た人の死体よりも損傷が酷い。臓物を全てぶちまけた死体。

頭蓋の中身まで散らかした、もはやただの肉塊と化したものまで。里の死体が可愛いと思えるほど、こここの死体は更に惨殺されていて、文は思わず吐き気がこみ上げてきた。

「…………」

「すごいでしょ。人だろうと妖怪だろうとお構いなしつて感じ」

「……血の匂いしかしませんね。何とも汚らわしい所業です」

「……気持ち悪いよう」

一人の式もその光景に口元を覆った。

こんな光景、人だろうと妖怪だろうと見れば皆同じ気持ちになるだろ？。

「何が、あつたんですか」

「恐らく、アレの暴走ね。最近静かだったから特に気にも留めなかつたのが災いしたわね」

紫が奥に見える小さなほら穴を指差した。

その小さな穴の奥から、氷のように冷たい妖気が漂つてきている。

……どこかで覚えのあるような感じだ。

「あの奥、何があるんですか？」

「真実を追求したいんでしょう？　自分の瞳で確かめたら？」

「……わかりました」

カメラを握りしめたまま、文はほら穴へと歩いていく。

汗でカメラを持つ手が滑りそうになるのをこらえながら、闇の中へと一步踏み込む。

夜闇よりも暗く、仕方ないので力を使って光球を作り出す。奥へと進んでいくと、小さな社が見えてきた。

「これは……」

その社は、ちょうど神棚を少し大きくしたような感じのもので、中央の戸は外側から無理やり開けたのかズタズタに引き裂かれていた。

その奥に、小さな部屋が見える。

恐る恐る足を踏み入れると、そこには小さな台座と、少女らしき死体が横たわっていた。

他と同様、何かに引き裂かれたかのように崩れ落ちていた。

可憐な着物は深紅の血に染まり、酸素に触れて黒ずんでいた。

「こんな小さな女の子まで……」

「ここに刀が安置されていた、貴方はご存じかしら？」

いつの間にか、紫が文の背後に立っていた。

式は連れていなかった。

外に待機させているのだろうか。

文は紫の問いに答えた。

「蒼狼伝説の太刀ですよね。……でも、刀なんてどこにもありますよ」

「ええ。誰かに持ち去られたのでしょうかね」

「……それは、おかしいですよね」

「…………」

紫は黙つたまま文を見つめていた。

そして文が言った。

「あの太刀は、魂魄妖忌が蒼狼の血で封印したものです。普通の人間や妖怪が握つてもその血が手にした者を拒むはずです。だから、蒼狼の血を引く者でもないかぎり抜くことは……」

「なら、蒼狼の血を引く者が現れた、ということになるわね」

「そんなこと、あるわけ……」

「狼だって生涯孤独で生きるわけないもの。別に不自然じゃないわ」

「…………」

しかし、紫は軽く歯噛みした。

蒼狼はとてもなく凶暴で残忍な獣だ。

聖獸などと信仰していたこの里の人間には悪いが、そんな上品な獣ではない。

孤高で、狡猾で、常に血に飢えた存在。もし、そんな獣が幻想郷中を駆け巡つたら……？
脳裏に過ぎるだけで虫唾が走る。

「貴方、一つ頼まれてくれない？」

「何でしようか」

「……もちろん、狼探しに決まっているわ」

紫紺の瞳に、強い決意の光が宿っていた。

第十五話 ＜月下飛行＞（後書き）

今回はちょっとばかしグローシーンあり。

調子はそこそこといった感じに戻つてきましたよ。

それと、海鳴譚の方も一日一話にしようかなあと考え中。

もう少し調子が戻つたら時間をずらして一日一話でいこうか

第十六話 ＜ 幽々子の膝枕 ＞

千花が白玉楼の使用人となつて早一ヶ月。梅雨を抜けた幻想郷の青空は雲一つなく、太陽が真白に輝き世界を照らしている。

その日の千花は『道場の影でだらしなくひっくり返っていた。

「あ、暑い……暑すぎる……まるで灼熱地獄だ……」

戸を開けても、吹き抜ける風がなければ意味がない。燐々と降り注ぐ陽の光とは裏腹に、風はちつとも吹きやしない。視線の先の風鈴は完全にお飾りとなっていた。

しかし、千花は汗を吹き飛ばしながらもガバッと起き上がって頬を叩いた。

「だ、ダメだ。こんなにぐつたりしてちゃ。』の練習でもして心頭滅却すれば暑さも忘れるつて、妖夢も言つてたんだ」

その妖夢はつっさつき顔を真つ赤にしてぶつ倒たのだが、そんなことは露知らず、千花は的を用意し弓を構えた。いつものように赤の中心点を見据えて、見据えて……

「…………

やがて、眼前の中心点がぐにやりと歪んだ。

次いで今度は視界全てがぐにやりぐにやりと奇妙な世界へと変わつていつて、千花の頭から湯気が出始めた。

……ヤバイ、意識までぼやけてきた。

「…………だ、ダメ……だ」

矢尻を掻む指がするりと解けて、矢は的をかすめて砂山に突き刺さる。

と、同時に千花の目の前の世界の天地が逆転して千花はそのまま後ろに倒れてしまった。

・ · ·

真っ白な世界の中、千花の頬に風が吹いてきた。

そよ風にも似たその風は、驚くほどに冷たく、そしてとても優しい風だった。

あまりにも心地よく、このままだと炎天下の中で昼寝をしてしまいそうだ。

千花は揺りぐ意意識に喝を入れ、両目をゆっくりと開けた。

そして目の前に、幽々子の桃色の髪と笑顔が映った。

「…………」「

「ふふ。おはよう、千花さん」

「…………あ、はい、おはようござります」

幽々子の滑らかな指が千花の額を小突く。

「もう。驚いたわ。弓道場に遊びに来てみたら、千花さん全身から湯気出して倒れてるんですね。大丈夫?」

「す、すみません……」

「それで、私の膝枕の御加減はどうかしあ?」

「へ? 膝まく……ひ?」

そこでようやく、千花は今の状況を理解した。

幽々子の顔が真正面、後頭部は適度な硬さの何かが……つて、

「わ、わわわわわわわッッッッッ！？」

千花が慌てて身を起しあつとすると、肩に幽々子の手が伸びて優しく掴んだ。

「ダメよ。まだ顔が赤いもの、もう少し横になつてなきや」

「そ、それはゆ、幽々子様の、膝の、あのッ、あのッ…」

「あ、いま私のコト様付けしたわね？」

「あひ……」

結局幽々子に逆らう訳にもいかず、千花はせつぜつも顔を真つ赤にさせながら横になつた。

「……そりやつて頭をちょっとだけ上げると、私の膝枕が気に入らないように見えるのだけど?」

あつむりばれた。

千花は恥ずかしさと暑さの両方に挟まれながら幽々子の好意に甘んじた。

何故か、幽々子は嬉しそうに微笑んでいたが。

幽々子の扇子が扇ぐ、何だか良い匂いのする風を頬に受けながら、千花は恥ずかしさをこまかすために目を瞑つた。
しばらくすると、弓道場にも風が吹いてきた。

飾りかと思っていた風鈴の音が響くと、不意に幽々子の扇子を煽ぐ手が止まつた。

「ねえ、千花さん？」

「……な、何？」

心音が響いているのではないかと心配しながら、千花は答えた。

「今度、博麗神社で縁日があるのはご存じよね？」

「え、うん。この前妖夢と張り紙を見かけたから」

「よかつたら、千花さんも一緒にどう?」

「僕が……？」

幽々子は千花の顔を覗きこんだままニッコリと微笑んだ。

「たまには貴方も息抜きしなきゃ。毎日お仕事頑張ってくれてるじゃない」

ほとんど幽々子の雑務ばかりだったが。千花は片目だけ開けて幽々子の顔を見た。

「あそここの巫女さんはケチだけど、お祭りとかやる時はパーティーと豪勢になるの。きっととても楽しいわ」

「縁日……か」

縁日は確か、あと一週間後だつたか。

しかし千花は少し申し訳なさそうな顔をして、

「……でも、僕は」

「むう。優柔不断な人は嫌われるわよ?」

幽々子が頬を膨らませて千花に言った。

さすがにここまで言われて断るのも失礼か。

千花は幽々子の膝の上で首を縦に振った。

「わかりました。」一緒にしますよ

「ありがとう。ふふ、縁日が楽しみね」

「……はい」

……そろそろ暑さも和らいできたし、立ち上がっても大丈夫だらうか。

「あ、ダメダメ。もう少しのままゆくつしてなさいな」

「あうあう……」

また額を突かれた。

……そして、

「つう、完全に入るタイミングを失ってしまった……」

道場の戸の陰で、じつそり待機していた妖夢が小さくつぶやいた。
手には冷たく濡らした手拭いなんか握りしめながら。

「幽々子様つたら……ズルイな」

主にこんな気持ちを抱いたのは初めてだつた。
仕方なく、妖夢は自分の顔を脱ぎながら屋敷へと歩いていった。

第十六話 ＜ 幽々子の膝枕 ＞（後書き）

幽々子の膝枕とかいいなあ……

膝枕なんて、最後にしてもらつたのいつだつたかな……

あ、そうだ。

創作キャラの短歌作らうと思つてたの忘れてたつけ。
出来たらメッセージしてみよつと。

第十七話 ＜侍女達の賭け話＞

今、白玉楼の侍女たちの間では「こんな話題で盛り上がりつて」いる。

「最近、幽々子様も妖夢様もちょっと様子がへんだと思わないかい？」

「ああ、それはあの使用人の千花さんのことですよ」

「もしかして、『恋』ってヤツか？ いやあ、若いねえ」

少なくとも、幽々子は亡靈なので年齢云々は論外な気もするが。

「で、千花さんはどうちを選ぶのかね？」

「さあ……？ でも、よく妖夢様と一緒にいるのを見ますよ」

「二人とも武芸に秀でている方でいらっしゃるから気が合つかもしれませんね」

「でも、それと恋は別問題では？ 妖夢様はとても色恋沙汰にいゝ縁のあるように見えないのですけど」

その発言は侍女としてどうなのかと。

「やうよみえ……。いつも堅苦しい敬語でお話しますし生真面目なお方でいらっしゃいますから、『恋』とは意識していらっしゃらないかも」

「いやいや、稽古の途中でけりりと横田で千花さんを見つめてその想いをひっそりと秘めているじゃあるに違いないよ。時々けりりとしたような瞳で見てているじゃないか」

「無意識の恋！ 惹かれる一人！ 私もそんな恋愛したかったなあ

……」

「じゃあ、千花さんは妖夢様と結ばれるつてこと？」

すると、一人の侍女が首を横に振る。

「いやいや。相手はあの幽々子様だよ？ 前に見たのだけれど、千花さんに頼み」とする時の表情つてすこく優しいのよ。私たちにも笑顔で話してくださるけど、私たちのそれとは少し次元が違うような気がするの」

「幽々子様は上品な雰囲氣があるからねえ……。普通の男なら放つておけないでしょうし、千花さんも例外じゃないさ」

「妖夢様も可愛らしけど、幽々子様には気品がありますし、時折見せるあの儂げな仕草と言つたら……じゅるり」

この侍女、今すぐ解雇すべきでは……

「じゃあ千花さんは幽々子様と結ばれる、と？」

「いやいやいや。妖夢様だと思つわ」

「違うわよ。千花さんが選ぶのはゼッタイ幽々子様！」

「いいや、妖夢様よ」

「幽々子様よ」

「妖夢様！」

「幽々子様！」

集いに集つた侍女達が廊下のど真ん中が大はしゃぎ。ガールズトークとは恐ろしいものだ。

いや、靈体だから」「ーストートークが正しいのか。

「おつと、そろそろ仕事に戻らないとね」

「そうそう。お洗濯お洗濯」

「今日のお夕食は何にしましょうか」

「私は昼ドラマの続きでも見ようかしら」

侍女達が消えたあと、妖夢は少し顔を俯かせながら廊下を歩いていた。

「……結局、言いそびれちゃったな」

先刻千花の道場へ足を運んだのにはもちろん理由がある。

妖夢はこいつそり隠し持っていた縁日のチラシを取り出してため息をついた。

「千花さんも頑張ってるから、一緒に縁日でも行って気分転換でもしようかと、思つてたのに」

道場には先客がいた。

幽々子だった。

おまけに膝枕なんかしちゃってとても割つて入れるような空氣ではなかつた。

「……って、どうしてそんなコト考へてるんだろう。普通に縁日に行くだけなのに。どのみち、幽々子様と私と、千花さんの三人で行くに決まってるのに」

何を焦つていたのだろうか。

首をブンブン振つて無理やり雑念を飛ばすと、ペシペシ自分の頬を叩いた。

「……最近ダメですね。ここは、剣の稽古でもして集中しなければ

道場は使えないから、また外でやろうか。

今度は水分も用意して、倒れないよう気をつけなければ。

そして妖夢が廊下の突き当たりを曲がりうつとして、ドンッ、と何かにぶつかった。

「あやっ」「うわっ、ヒ」

突然の衝撃で思わず尻もちをついてしまった。起き上がろうとするとき、前から手が差し伸べられて妖夢はその手を取つた。

「す、すみません。私の不注意で……」
「いいよ、気にしなくて。怪我無かつた?」
「へ……? あ、ち、千花さん!」
差し伸べられた手は千花のものだつた。
千花は背に弓と釣竿を背負いながら、いつものように優しく微笑んだ。

「す、すみません! えと、あの」
「いいって。でも、妖夢がボーッとしてるなんて珍しいね」
「……すみません」
「あれ、今度は妖夢が謝つてばっかだね」

クスリと小さく笑う千花。

自分でも、何故か謝りっぱなしでビックリしていた。

千花は微笑んだまま、手の空いている左手で妖夢の頭を撫でた。

「…………」

「それ、で。僕に何か用かな。さつきから手を握りっぱなしなんだけど……」

「へ……? うあわー! ?」

慌てて手を引ひこめる妖夢、そして、ハツとなつて千花を振り返つて、

「いや、これはあの、えつと、決して嫌だとおもひわけではなく、
あのあの……」

「……？ 何かドーバーしてる？」

「ち、違います！？」

顔を真っ赤にして力こぶぱに拍打したが、心の中では違つんじゃな
いかと思つていた。

「やつだ、侍女さんに頼まれて今から川に魚釣りに行くんだけど、
よかつたら妖夢も来る？」

「わ、私は稽古があるから遠慮しておきます。その、すみません」「
気にしなくていいって。しかし、今日の妖夢はちよつとヘンだ
な。ははッ」

じやあね、と小さく手を振つて千花は白玉楼の門をくぐつて出て行
つてしまつた。

呆然とその後ろ姿を見送る妖夢は、自分で聞こえるような声で
言つた。

「……誰のせいだと、思つてるんですか

千花の姿が見えなくなると、妖夢はくつと身を返して屋敷の中へ
向かつて歩きだした。

第十七話 × 侍女達の賭け話 ×（後書き）

女の人、特におばさんレベルの人が4、5人集まるところ「い井戸端会議を見せますよね；

俺のバイト先でも、交代時間なのにバックルームで凄い声で世間話してたりするし……。w

ヤヴァアイ、天子書きたい天子。

第十八話 < ノ女な語らい >

「…………」

自室に戻った妖夢は一人座禅を組んで瞑想していた。もちろん、先刻胸に湧いた雑念を払うためである。

「…………」

幽々子は、どうして道場で膝枕なんてしてたんだろうか。千花は、幽々子の膝枕の上でいつたい何を話していたんだろうか。無にしているはずの心が、知らず知らずの内に余計な事ばかり考えてしまう。

「…………どうして私は『こんな』ことを考えているんだろう。

「…………ああもうー。」

あつといつ間に心が乱れて、妖夢は姿勢を崩してため息をついた。

「…………おつかしいなあ。いつもならもつと長く瞑想できるのに

自分の未熟さのせいだらうか。
まだまだ修行が足りない……

「妖夢～、ちよつといい？」

「幽々子様……？」

こいつの間にか部屋の戸に幽々子が立っていた。

手には何かの包みを抱えている。

「さつき侍女さんからお菓子貰つたの。妖夢も一緒に食べない?」

「あ……はい。いただきます」

幽々子が妖夢の前にちよんと座ると、菓子の包みを開いて差し出してきた。

ほんのりと甘い香りが漂つてくる。

「良い香りよねえ。マジレーメットでいいわよ」

「甘くて、美味しいです」

口の中に広がる優しい甘み。

ただ、妖夢は少し洋菓子が苦手だつたが。

美味しいお菓子に舌鼓を打つている幽々子と、お菓子をちまちまとかじる妖夢。

ほんの少し、一人の間を流れる空気が違つていた。

「……どうかしたの?」

幽々子が妖夢の顔を上田づかいに覗きこみながら言った。

「いえ、その……なんでもないです」

「ホントに? だったらそんな顔しないでしょ?」

「…………」

妖夢は微かに視線を下げる。幽々子から田を反らした。

幽々子は、いつものようにニコニコしているだけだ。

その笑顔が、今は少し嫌だった。

「あの、幽々子様
ん？ なあに？」

妖夢は思い切って口を開いた。

「幽々子様は千花さんのこと、どう思ってるんですか？」
「千花さんのことへ、わづねえ……」

すると幽々子はクスッと笑つてから言った。

「良い人よね。お手伝いもちゃんとやってくれて真面目で」
「や、やひじやなぐでー！」

思わず声を荒げてしまった。

幽々子も田をパチパチさせて妖夢を見つめていた。

「…………あ！ す、すみません……」「いいのよ、気にしないで。でも、妖夢がそつやつて感情を露にするの珍しいわね」「…………」

「そういう妖夢は、千花さんのことどう思ひうるの？」

「へー？ え、あのわ、私は……」「…………はあ、なるほど。そういうことね」

慌てふためく妖夢を見て、幽々子は悪戯っぽく笑った。

「妖夢は千花さんのこと気になつてるのね。妖夢もすっかり一人前の淑女レディつてわけか」「ち、違います！ ただ、その、ずいぶんと親しげでしたから、あの……！」

「あら、まさか妖夢がヤキモチ焼くなんて。明日は雪でも降るのかしら？」

「い、今は真夏ですよ！？」

「そこは眞面目に返すのねえ？　ふふツ」

うつむいたり、顔を紅く染めたりする妖夢を見て幽々子は本当に面白そうに笑った。

こんなに感情豊かに変わる妖夢は初めてだ。
千花の存在が妖夢を変えたのだろうか。

だとしたら、ずいぶんと罪なお方だ。

「いいじやない、人を好きになるって素敵なコトよ？　そんな素敵なコト、隠すのはもつたいないじやない」

「だ、だから私はそんなんじやなくて……！」

どうやら、妖夢は自分の気持ちをまだ理解していない様子。

“恋”なんてふわふわしてて甘い気持ちは、修行ばかりの妖夢には全然分からぬのだろう。

それはそれで、面白いけど。

さつきから幽々子は微笑^{わら}いつぱなしだ。

「じゃ、私も正直に言つわね

「へ……？」

一拍置いてから、幽々子は言った。

「私も、千花さんことは気に入つてるわよ。もちろん、使用者さんとしても、一人の殿方としても、ね」

「…………」

表情を強ばらせたまま妖夢は黙りこぼしてしまった。

「 妖夢は、千花さんのことをどう思つてゐるのかじりへ。」

「 ……え、えつと」

耳まで真っ赤にしてうつむいてしまった。

自覚があるのか無いのか、あやふやに迷つてこらるのは妖夢らしい反もしたが。

「 そんなに迷つてると、私の方が先に告白しちゃうわよ？ いい？」

「 だ、だだだダメですッ！」

「 あら、どうして？」

「 や、それはそのう……」

妖夢が返事に困つている間に、幽々子は残つていた菓子を一口で食べ終えるとゆつべつと立ち上がつた。

「 さて、と。私は縁日の時に着て行く浴衣でも探していよつかな。妖夢は、千花さんでも迎えに行つてあげたら？」

「 い、い命令とありますー。」

握りしめていた菓子を一気に放り込んで立ち上がると、妖夢は脱兎の如き勢いで部屋を飛び出していく。

「 さて、私も浴衣探さなきや。あ、そつだ。千花さん用の浴衣も探さなきやね」

お菓子の包み紙を丁寧にたたんでからくずかごに詰めると、幽々子は鼻歌交じりに部屋を出て行つた。

第十八話 < 乙女な語らい > (後書き)

いつもアクセス数にムラがあるなあ……；
まあ、仕方ないか。

何故か今日帰つてからブルーな気持ちで困つております。

理由は……謎ですけど。

第十九話 ＜ 博麗縁日 ＞

夕暮れの空に、ほんのりと灯る提灯の明かり。

今、人里から少し離れた場所にある博麗神社では縁日の真っ最中だつた。

縁日へと訪れた人々は皆、浴衣に身を包んで下駄の音を響かせながら楽しそうに歩いている。

神社の入り口では香ばしい香りを漂わせる屋台や、綿菓子の屋台では子供の列が出来上がっていた。

境内では酒の席が設けており、大人たちや、それに混じって一部の妖怪たちも大酒を喰らっていた。

「ほらほら、千花さん早く早く！」

「あ、あんまし強く引っ張らないでよ幽々子。この下駄、けつこう歩きづらくて……」

神社へ続く道ではしゃぐ男女二人。

一人は、桜の花びらを散らした桃色の浴衣姿をしていて。

鶯色の帯と相まって、なんだか夏なのに春を思わせるような姿だつた。

桃色の髪を揺らしながら、少女は純粋な子供のように明るく笑つていた。

「あ、綿菓子あるわよ千花さん！」

「う、うん。だけどほら、金魚すくいとかもあるよ~。」

「あー、あつちにはリンゴ飴が！ 早く食べましょ~！」

「……食べ物しか見えてないや」

苦笑を浮かべる少年は軽く頬をかいた。

こちらは薄い水色の浴衣で、幽々子に比べるとすこぶると落ち着いた印象。

ただ、下駄にはあまり慣れていない様子でその歩みはややゆづくつとした感じだ。

すると、少年の後ろからもう一人少女が現れた。

「幽々子様つたら、大はしゃぎですね」

「そうだね。これは僕たちもちゃんと頑張らないと」

「はー」

白地に、アサガオの絵が描かれた色鮮やかな浴衣。

提灯に照らされた銀の髪は、少女の幼さを隠して神秘的な雰囲気を醸し出していた。

千花も、そんな姿の少女を見て微笑みながら、

「何か、今日の妖夢はいつもより大人っぽいな」

素直な感想を述べた。

妖夢の顔がみるみるうちに真っ赤になっていく。

ちょうど、目の前のリンゴ飴のような感じだ。

「え、えっと……あの、お、お褒めいただき光栄です……」

「妖夢も、何か食べたかったりやりたい物があつたら遠慮なく言ってね」

「い、いえ！ 私たちは幽々子様をしっかりと護衛しなくてはいけないので」

「あとで幽々子様に言つておけば大丈夫だよ。紫さんと上の境内でお酒を飲む約束してるんだってさつき言つてたし」

「で、ですが……」

「せっかくのお祭りだよ？ 楽しまなきゃ損だよ」

「ちよつと一人とも～？　早く行きましょ～つよ～？」

いつの間にか、幽々子は列のかなり前まで進んでいた。すると妖夢が慌てて駆け出し、目の前の人混みをかき分け進んでしまった。

千花も、それを追つて走り出した。

・・・

上層の本殿前では、大きな卓と酒が用意され、人々が思い思に語らいながら酒の席を楽しんでいた。

幽々子はそのまま本殿正面の道を突っ切つて、一番奥の席へと向かつた。

ちゅうど、紫と靈夢が座つていた。

「遅いじゃないの幽々子ったら。もう勝手に飲み始めてしまつと」
「だつたわ」

「ごめんなさいね。妖夢と千花さんがのんびりしてたから」

「千花？……ああ、新しい使用人さんの。ここに来てるんだ？」

「そうよ。一緒に行きましょうって私が誘つたんだもの」

「で、その人は何処に？　姿が見えないじゃない」

「……あら、何処行つちゃつたのかしら」

「幽々子様～！」

「なんだ、ちゃんとついてくるじゃないの」

妖夢が息を切らしながら幽々子の下へと走つてきた。
千花もそのすぐ後についてきた。

「ゆ、幽々子様、き、急に走らないでくださいよ……」

「危うく見失つところでした……」

「『めんねえ。私も早くお酒飲みたくなつちやつて』

クスクス微笑する幽々子の後ろで、紫だけは冷たい視線で千花の様子をうかがっていた。

視線に気づいたのか、千花が紫に振り向いた。

「……な、何か？」

「いえ。なかなか優形な殿方だなと思つてね」

「その耳と尻尾さえなればいいオトコなのにね」

「そうかしら？ 千花さんの尻尾つて可愛いじゃない」

「そ、その……」

頬をかきながら視線を反らす千花。

「ううう時、どう返事したらいいのやう。

「あ、そうだ幽々子様。少し僕もお祭りの方見に行つてもいいでしょうか？」

「ええ、もちろん。でしたら妖夢も連れて行つてあげてちょうだいな」

「わ、私ですか？ でも、幽々子様のお傍にいないと」

「大丈夫よ妖夢。私たちがついてるもの」

「……ちょっと、どうして私だけじと目でこちらむのよ

「ほらほら、遠慮せずに行つた行つた

「わわわ！ ちょっと幽々子様？」「

妖夢の背中を押しながら、幽々子はこつそりと耳打ちした。

(千花さんと二人で楽しんできたら？ せっかく浴衣用意したんだし、妖夢も楽しんだ方がいいわよね？)

(だ、だから私は……あうう)

しかし幽々子の満面の笑顔に負けて、妖夢は頬を紅く染めながらちよんと頷いた。

「じゃあ、ちょっとだけ失礼します。行こつか、妖夢」

「……し、失礼しますッ」

そんな二人の後ろ姿を見送りながら、幽々子は早速お酒に一口つけた。

「幽々子はいいの？ ホントは幽々子があの人と一緒に行きたいんじゃないの？」

「さ、今日はじゅんじゅん飲みましょ？」

「……あらあら。綺麗にはぐらかされちゃったわね」

空になつた幽々子の杯に、紫は新しい清酒を注いだ。

第十九話 × 博麗縁日 ×（後書き）

そういうえば、そろそろ梅雨も抜けて縁日とかのシーズンですね。地震の影響で自粛ムードだつたのも束の間、こっちでは花火大会が七月の終り頃に行われるようです。

ただ、不思議なことにこの花火大会って、一個も屋台が出ないんですね……

そういうえば、気になってる人のためにこっちで書き足しますけど、妖夢の半靈は書いてないだけでちゃんとあります。
ただ、特に必要ないから今は描いてないだけですので。
け、決して忘れてたとかそういうんじゃないですよ！』

第一十話 ＜ 妖夢の初デート ＞

幽々子の許可を得て、千花と妖夢は境内を背に歩きだした。二人は境内へと向かう人々をかき分けながら屋台が立ち並ぶ下層へと戻っていく。

「さて、幽々子様の御許しももらえたし何をしようか？」

「え、は、はい。えつと……」

ふと、妖夢の目の前で若い男女が手を繋ぎながら仲睦まじく歩いていた。

互いの顔を見つめ合いながら、一人並んで神社の奥へと向かっていく。

しばし、妖夢はその姿に見惚れていた。

「…………」

「あれ？ どうかしたの妖夢？」

「ふえ！？ あ、えっと、ボーッとしちゃって……」

「大丈夫？ …… そうだ、ちょっと待つてて」

千花は屋台へと駆けだして、やがて小さなビンを一つ持つて帰ってきた。

ビンの中には小さなビー玉が入っていた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

差し出されたラムネを両手で丁寧に受け取ると遠慮がちに一口つけた。

慣れない炭酸の刺激にほんの少し体を震わせる。でも、冷えたラムネはとても美味しかった。

「それにしても、すうい人だね……迷子にならないよつて飯をつけないと」

「そ、そうですね」

すると、妖夢の前に千花の手が差し伸べられた。しばらくその行為の意味が分からず、妖夢は千花の顔を見上げながら首を傾げた。

「え、えっと……？」

「手でも繋いだら逸れないでしょ？」

「……ッ！」

千花にとつては何気ない一言だったのだが、妖夢はその一言を耳にしただけで一気に顔を紅に染めてしまった。

「やー、あの！　えとー、そ、その……！？」

「……？　どうかした？」

不思議そうな顔をする千花。

その黒の瞳に見つめられただけで、胸の鼓動が一段と早くなつたような気がする。

「…………ふ、不束者ですが、よ、よひしくお願ひします」

「え？　ああ……うん。でも、そんなに畏まりなくていいような

……？」

千花は苦笑しながら、ゆっくりと妖夢の手を取つて握つた。

ほのかな温もりが妖夢の左手を包みこんでくる。

その温かさが、恥ずかしいような、でも嬉しいような、何だか曖昧な気持ちにさせる。

こんな姿、幽々子には見せられない。

手汗とか、大丈夫だろうか。

もしも、知人に見られてしまつたら何と説明すればいいだろうか。

私の手、もしかして小さくて握りにくらいのではないだろうか。

何故か、頭の中でどうでもいいような事ばかりが浮かんできてしまう。

「…………」

「…………あ、もしかして嫌だった？」

千花の表情が微かに曇る。

そんなこと、当然ない。

「い、いえ！ その、いついたことは初めてである、緊張しちゃつて……」

「ははは。手を握るくらいで大袈裟だな妖夢は」

「そういう千花さんは遠慮無しというか、ずいぶんと手慣れてませんか？」

妖夢が唇を尖らせて言つ返す。

「手だけに手慣れてるつて？ すごいな、妖夢は『冗談も上手いや』
「ち、違いますよ！」

「もちろん分かってるつて。うん、実は僕にもよく分かんないんだ
けど、前にもこんな感じで誰かと手を繋いでたような気がしてね。
自然、というか、勝手に手が出たんだよ」

「…………失くした記憶、ですか」

「うん。今はもうたいして気にしてないけどさ」「手を繋いでいた記憶……」

失くしたはずの記憶なのに、片隅に残っているとこいつとは、千花の大事な人なのだろうか。

家族なのか、それとも、恋人……なのだろうか。

「それ、どんな人なんですか？ もしかしてこ、恋人とか？」

「恋人……？ ううん、たぶん違うかな。でも、とても大切な人だつたと思うよ」

「……そうですか」

千花と手を繋いだまま屋台の立ち並ぶ道をゆったりと歩いていく。一步ずつ、この時間を忘れないよう踏みしめる。

左右で屋台の店主であろう掛け声が響いているのに、妖夢は千花の言葉と、自分の言葉しか聞こえないような感じがしていた。時々千花が屋台を指差して、それに妖夢が答える。

たつたそれだけ。

「それにしても、こここの縁日つてちょっと変わってるね。ぬいぐるみを売ってる屋台とか初めて見たよ」

「私も初めてです。しゃべるぬいぐるみ……」

「ちょっと可愛かつたな。

後でこつそり買いに行こうか。

妖夢がそんなことを考えながら歩いていると、目の前で綿菓子を頬張る少年とすれ違った。

「…………」

空を浮かぶ雲のよつよつとふわふわで、優しく甘やかされた口の中とろけて……

「もしかして食べたい？」

「へえ！？ わ、私は子供じゃないんですよー？ 綿菓子なんかもうひとつくらい卒業です」

でも、最後に食べたのこつだつただらりとか。

祖父と一緒に縁日に行つたのは……もう何百年と前の話だつただろうか。

正直もう覚えていないが、あの味だけはしっかりと覚えてる。

「ほひ、妖夢よだれ出でるよー？」

「ツー？」

慌てて口を隠す、が、修行で鍛えた妖夢がそんなミスを犯すわけなどなく、

「わひー、脅かさないでくださいよー？」

「『メン』『メン』。でも、せつぱつ食べたこんでしょー。」

「…………ほー」

正直に答えた。

「ん、素直でよひじこ。買つてくれるからひとつ待つてね

出来たての綿菓子を一つ、千花が手渡す。

そういえば、今日は千花に一度も、駆走になつてない。あとでお返しなこと。

「どう? 美味しい?」

「……すごく美味しいです」

「そつか。それじゃあ次は何食べる? それとも何かやりたい物ある?」

「い、いえ。私はラムネとの綿菓子で十分嬉しいですから……」

「ホントに?」

「……えつと」

すると、千花が妖夢の頭をぽふっと撫でて微笑んだ。

「…………き、金魚すくい、やりたい…………です」

「ん、了解。お店は……あっちだね」

千花に手を引かれ再び歩き始める妖夢。

その後ろ姿を見つめながら、妖夢はほんのり頬を染めて微笑していった。

「……幽々子様が一緒じゃなくて、よかつたな」

妖夢はこの口初めて、主の不在を喜んだ。

第一十話 ＜ 妖夢の初デート ＞（後書き）

もう少しでバイトから正社員（？）にランクアップしそうです。

……よく分かりませんけど；

もしなつたら更新時間を変えないとなあ

お気に入り登録、ありがとうございます。

ついでにコメントとかもらえたなら嬉しいな

第一十一話 ＜ 宿闇を裂く牙 ＞

「縁日、楽しかったわねえ」「結局幽々子様は紫さんたちとお酒飲んでただけじゃないですか」「やあねえ。ちゃんとたこ焼きとかつもろこしも食べたわよう」「……まあ、いつも通りってことだね」「……まあ、いつも通りってことだね」

幽々子と妖夢、それに千花は森の中の細い道を並んで歩いていた。この奥を抜ければ冥界へと続く境界が見えてくる。夜も更け、虫が奏でる音色が森を静かに彩る。

「どうだった妖夢？ 縁日はちゃんと楽しめた？」「は、はい。千花さんのおかげで満喫できました」「うふふ、そうみたいね。ほっぺに綿菓子ついてるもの」「へー？」
「ふふうん。ジョーダンよ」「もう！ 幽々子様つたらー！」

そんな静寂の中ではしゃぐ二人を見ていたら、笑いがこみ上げてきた。

仲の良い一人だ。

白玉楼の中にいるときと今とでは、一人とも表情がまるで違う。幽々子も妖夢も、心の底から楽しそうに笑っている。
……もしかして幽々子は、いつもこうやって妖夢に笑っていてほしいから、ずっと二コ一コと微笑んでいるのではないだろうか。

「さすがは白玉楼の主、なのかな」

今の一人は主と護衛、というよつつかは仲の良い姉妹のようにも見え

た。

おつとりで大食漢な姉と、生真面目過ぎる妹、と言つたところだろうか。

不思議な組み合わせだ。

千花がぼんやりと考えていると、いつの間にか一人の姿が森の奥へと消えていた。

「千花さ～ん。何してるの～？」

「あ、はい。すぐ行きますよ」

そろそろ森を抜けて境界へ辿り着くだろう。

千花が駆けだそうとしたその時、

「さやああああ～！」

突然森の奥から幽々子の悲鳴と思われる声が響く。

千花は血相を変えて全速力で走りだすと、目の前で妖夢が倒れていた。

「妖夢！？ しつかりして！？」

「うう…… ゆ、幽々子さまは……？」

辺りを見回すが、幽々子の姿は何処にも見当たらなかつた。妖夢の体を起こさうとするが、妖夢は千花の腕を握りしめて言つた。

「ゆ、幽々子様を探してください。まだ、遠くに行つては……」

「でも、妖夢は！？」

「私は、大丈夫です。しかし、今は武器がないので追うことが……

「…………わかつた。けど、どうすに行つたんだ……？」

「…………」

「あ、あちらの方へ行くのは見ました。しかし、それ以上は「ありがとう。妖夢。すぐに戻るから待つてよ」

千花は妖夢の指差した方向へ一直線に駆け抜けた。

弓はないが、今は体術でどうにかするしかない。

暗い森の中を走っていると、やがて千花は不意に視線を感じ足を止めた。

「…………」

その数、およそ五人程度だろうか。

四方八方から微かに殺氣の混じった視線を感じる。

「……出てきたらどうですか。隠れてたって気配で分かります」

すると、茂みから音もなく何者が現れた。

夜闇に溶け込みそうな黒装束で身を固めた者が案の定五名。

千花は軽く拳を握りながら体に緊張を走らせる。

「…………幽々子様は、どこだ」

「…………」

「答える。幽々子様は……ツ！？」

千花の言葉は黒装束の攻撃に遮られた。

上体を反らし初撃をかわすと、そのまま右足で相手の腹を素早く蹴り上げる。

直撃を受けた黒装束はあっさり悶絶して倒れてしまった。

「…………？ 妙な手応えだな」

そして最初の攻撃を合図に他の黒装束も襲いかかってきた。

中には刃物のような武器を握る者もいたが、千花は落ち着いて相手の動きを見切り、掌底や拳打を当てて一人ずつ相手を伏せていく。暗殺者が何かかと思ったのだが、素人のような無駄な動き、軽すぎる攻撃、とても手練の者とは思えない。

……それに、

「何だろう、いくら打ち込んでも手応えが軽い…………？　こいつら人間じゃない。けど、妖怪とも違つ…………」

氣絶させたかと思えば、急に起き上がつて襲いかかってくるし、それを倒しても再び容易く起き上がつてくれる。
どう考へても人間ではない。

かと言つて妖怪なのかと言えば…………これも違う。
まるで空虚な人形でも叩いてるような感覚だった。

「くそッ！　何なんだよこいつ等…………！」

気づけば黒装束の人数が倍増している。
いくら相手が軽い攻撃しかしてこないとはい、こうも人数が多いとキリがない。

「どけッ、ここの…………！」

鬱陶しい。

こんな雑魚ばかりばら撒いて何を考えてやがる。

「…………ツ？」

くだらない。

くだらない。

こんなカス、一撃で消し去ればいいんだろうが。

「なんだツ？」

ちまちめめるな。

殺せばいいだろうが。

消したまえにししたNニーカ

「くッ、頭……がッ！？」

体の内から力が溢れる。

得体の知れない力が、まるで噴火直前の火山のように込み上げてくる。

抑えられない。

髪が蒼く明滅する。

胸の鼓動が速くなる

まじめ井戸のシーフィッシュ

腰に手を当て、在るはずの無い“太刀”を抜き払う。

蒼く輝くその太刀を、千花は全身全靈を込めて地面に叩きつけたその瞬間、爆音と共に千花の周囲一帯が蒼の閃光に包まれた。

「……誰だよ。んな不愉快なコトする奴はよ」
「相変わらず無粋な力ね。蒼の狼一

千花が振り返る。

白く輝く月を背後に、一人の少女が立っていた。

見るからに胡散臭そうなローブの少女は蒼く染まつた千花を見て瞳を細めた。

そこにはまるで、汚らわしい物を見るような侮蔑の表情が浮かんでいた。

「ああ？ 引きこもりの妖怪が何の用だよ」

「この美しい幻想郷を、貴方のような汚れた野獸に走り回ってほしくないの。だから、死んでくださらない？」

紫の手から光弾がほとばしる。

千花は半眼でそれを見つめ、手にした太刀で難なく両断した。

「……汚れた、か。妖怪はみんな汚ねえもんだと思うがね。特にてめえは胡散臭い上に汚ねえ。いつもスキマから覗くだけの傍観者だろ？」「ううが」

「黙りなさい。そもそもどうして貴方が生きてるのかしら？ あなたは魂魄妖忌に封印されたでしょ」「うう」

「妖忌……か。久しい名前だな」

忌々しげに小さくつぶやく千花。
瞬間、全身の妖気が膨れ上がる。

「あの老害、もう！」の世にいらないらしいじゃねえか。まあ、生きてたとしても俺が殺しだろうけどな」「貴方の目的は何なの。まさか復讐なのかしら？」

「いいや、もつとシンプルな事さ」

「一ツと不敵な笑みを浮かべ千花は続けた。

「単純に、俺自身の復活さ。あの老害に封印されてから俺の妖氣や力なんかはずいぶん弱くなっちまつたからな」「そうなの。それはつまり、今は弱いのね」

紫が冷たい微笑を浮かべる。

だが千花も同じような笑みを浮かべて返した。

「今は弱い方がいいのさ。てめえらがお遊びで使うような弾幕で死ねる程度のな」

「……どういう意味かしら」

「素直に答えるわけないだろうが、阿呆」

「まあいいわ。なら容易く死んでちょうだい」

「そうだな。てめえの攻撃なんぞ受けたら“この体”は死んじまうな

「……

「……

光弾を構えていた紫の手が止まる。

言葉の真意を理解した紫は顔をしかめた。

「どうした？　早く撃てよ？　でないと俺は死ないぜ？」

この自信、肉体を消されてもアイツは生き永らえると言つひとか。
それに、あの体は……

「大事な友人の想い人、なんだっけな。そんな人を、果たして親友のお前が殺すことができるのかね」

「……外道が」

「もともと道なんぞに縛られる性格はしてないぞ」

こいつを撃てば、千花が死ぬ。

そして千花が死んでも、こいつは何らかの方法で再び復活するだろう。

紫は唇を噛んだ。

手持ちの装備に、アイツだけを封印できるような武器はない。

靈夢を呼んでもけばよかつたか。

「さすが賢者様。ボケつとしてるヒマがあるんだな」「ツー！」

蒼の太刀が一閃。

刃の先端に深紅の血が滴るが、紫の姿は無い。

「……チツ、仕留めそこなつたか。まあいい」

そして体の具合を確かめるように、太刀を振ったり体を動かす。
悪くない。

本調子一歩手前つてところだう。

「ずいぶん長い時間表に出られるようになつたな。この体に馴染ん
できたのか、それともコイツが限界なのか。……前者であることを
祈りたいね」

さてと、千花は太刀を光に変えて収めると、森の奥を見つめた。

この先に幽々子とかいう女が寝てるようだ。

とりあえずコイツに意識を預けて、囚われのお姫様を救出する役を
くれてやるか。

「ま、せっかく“創つて”やつたんだ。せいぜい頑張つて生きてみ

ろよ。夕凪千花君」

そして蒼の聖獸は静かに瞳を閉じた。

第一十一話 ＜ 宿闇を裂く牙 ＞（後書き）

大丈夫か……？ 本当に大丈夫かオレ！？ w
この設定に穴がないかとビクビクしています。

傍観者、と記くとあるラノベのシームルグさんが出てきます。
さ、今田は海鳴譚も更新だ。

第一十一話 ＜ 紫の手紙 ＞

「紫様、お怪我の方は大丈夫ですか……？」

真横で自分の式が心配そうな表情を見せる。

紫は傷を手で抑えながら力無く微笑んだ。

「ええ、この程度掠り傷よ。大丈夫だから心配しないでちょうどいい」「紫様にこのような深手を負わせるとは……許せません！　すぐにでも討伐に出向く所存で」

「はいはい。貴方は物騒な口ではしなくていいの」

「しかし……！」

「それより藍、一つ頼みがあるのだけれど、お願ひしてもいい？」

「……は、何なりと」

従順な式だ。

とはいっても少し砕けた表情でも見せてくれた面白いのだけれど。

紫は小さな文机に向かうと小さな便箋を取り出し筆を執った。

簡潔な文章を認めるに、紫は丁寧にたたんでから欄に手渡した。

「これを、幽々子に渡してちょうだい。私が直接出向いてもいいのだけれど、この姿を晒して幽々子に余計な心配かけたくないのよ」

「承知しました」

手紙、と言つても内容はそんなに堅苦しいものではない。

ただ報せるべきである情報を簡単に記しただけ。

それでも、幽々子には知つてもらわなければならぬ。

「最悪、あの子の力を使ってももうわなきやいけない可能性もあるんだし」「

親友の友を殺す手伝い当の本人に任せようなどと、ずいぶんと非道なことをすると自分でも思う。

けど、万が一封印に失敗した時は……

「……紫様、あの蒼狼をどうやって封印するおつもりなのですか？」

「……まず、彼と蒼狼との精神を分離させる。そして蒼狼の精神体を消す、それだけよ。口で言つのは簡単なんだけどね」

上手くいく確証はない。

そもそも、蒼狼と彼自身の精神がどうこいつ構図をしているのかがわからない。

常に蒼狼の意識下にあり、いつでもその姿を現すことができるのか。それとも平時は眠つていて、ある時途端に力を爆発させるのか。昨日の状態を見る限り、恐らく前者だらうか。

蒼狼の精神が眠つていれば、いくらかはやり易いというのに。

「……では、私は白玉楼へと参ります」

「ええ、お願ひね」

手負いの紫は藍の尻尾を見送りながらふうとため息をついた。

今の私は、何と情けない姿だらうか。

敵の目の前で思考を巡らせるなど、幻想郷の賢者が聞いて呆れる。避けられない攻撃では、なかつたはずなのに。

「……平和ボケかしら。これじゃ、どつかの巫女を笑えないわね」

自嘲するように紫はクスリと微笑を漏らした。

・・・

縁日が終わり、それから数日したある日。

幽々子は自室でのんびりと小さな本を読んでいた。

「……紫じゃなくて、貴方が来るなんて珍しいわね。何か用?」

背後の気配に気づき、机に向かつたままで幽々子は言った。
すると、九尾の少女が姿を現した。

「紫様は別件で忙しいので、この度は私が遣わされました。……
これを」

手渡されたのは小さな封筒。

幽々子は顔を上げて藍を見やった。

「紫がお手紙なんて珍しいわね。どうかしたの?」

「……私からは特に何も」

「ふうん……」

引き出しから鍼を取り出し、丁寧に封筒の端を切り取ると文面に目を通した。

数分の後、幽々子の表情が微かに曇つていき、やがて笑顔が消えた。

「……紫にしては面白くない冗談ね。これじゃまるで、千花さんが
恐ろしいバケモノだつて言つてるようじやないの」

「ですが、これは紛れもない事実。どうかこの事を」

「紫は、どうしてゐのかしら?」

「…………」

幽々子に言葉を遮られ藍は口を噤んだ。
その声には、冷やかな怒りが感じられた。

「……すみません。紫様は現在療養中です。ですのでもうして私が
参ったのです」
「その怪我、千花さんが関わっているの」
「……彼にやられた傷です」
「……やつ」

便箋を閉じ封筒の中に入まつて、幽々子は藍に向け再び机に向
かってしまった。

「……失礼します」
「…………」

幽々子の背に一礼をすると、藍はフツと姿を消してしまった。
藍が消えてからじまじめりへじて、幽々子はもつて一度、紫の手紙に田を
通した。

「……何よ。珍しく手紙なんて寄越すから何か画田こいじども書い
てあるのかと思つたのに」

彼は、幻想郷を齎かす存在
でも、私が何とかして彼の封印を試みる
もしも。

もしも、それが叶わなかつたら、その時は貴方にお願ひしたいこと
があるの
彼を

微かに肩を震わせながら、小さくつぶやいた。

「私に、彼を殺せ……。やつがいるのね、紫」

便箋に認められた文章が、ゆっくりと滲んでいった。

第一十一話 ＜ 紫の手紙 ＞（後書き）

お気に入り登録件数30件！

そして何故か海鳴譚のお気に入り登録件数もじわじわ伸びています。
登録してくださった方々、ありがとうございます。

……正直、今回のお話はちょっと自信がないです；

でも、書きはじめたら最後まで書くのが作者としての務め。

最後まで全うさせていただきますッ！

第一十三話 ＜ 微かな違和感 ＞

「…………ツ」

いつものように、千花は『道場で』の練習に励んでいた。だが、珍しいことに今日は赤い中心点に突き刺さっている矢が一本だけだった。

それ以外の矢は中心点から微妙にずれていたり、あるいは的から外れていたりしていた。

「…………」

縁日のあの日から、千花は自分の胸に謎の違和感を覚えた。妖夢を抱え、幽々子を追いかけ、そしてあの黒装束姿の奴らとの戦闘。

昨日の記憶は何故かここまでしか記憶になかった。そして、気がつけば幽々子を背負いながら白玉楼へと戻つていて、妖夢には泣きながら感謝され、幽々子からは熱い抱擁……は、さすがに遠慮したけど。

一番の違和感は、記憶を失ったあの瞬間、内から沸き起る声だった。

まるで野獣のように残忍で狡猾な声。

以前、妖怪の山で聞いたあの声と同じものだった。

その声が心に響いた途端、千花の意識が揺らぎ、やがて消えて無くなつた。

……それなのに、何故か手には妙な感覚が残つている。

「僕、どうしちゃったんだ？　まるで自分の中に知らない自分で
もくるような感じだ……」

そんな雑念ばかりで弓を撃つているせいか、さつきからいまいち命中率が悪い。

千花はため息をつきながら的へと歩き矢を回収した。
いくつかは折れてしまつていて使い物にならないため処分した。
こんなに強く弦を引いた覚えはないのに。

「……はあ。あの日からどうも調子が悪いな。無意識の内に力入っちゃつてるし」

「うう」ときは瞑想だ。

そういうえば、前に妖夢が教えてくれた。
道場の真ん中で座禅を組んで、心を空っぽにする…………だけか。
見よう見ま似で足を組んで瞳を閉じる。
何も見ず、何にも考えず、ただただ静かに呼吸するだけ。

「…………」

だが、どんなに心を無にしようとしても、違和感は拭えない。
千花はあつという間に姿勢を崩して仰向けに寝転んだ。
質素な天井が天に映る。
この違和感はどうしたら拭えるのだろうか。

「…………」

ふと、千花はあることを思い出した。

以前妖夢に教えてもらつた蒼狼伝説が伝わる里の事。

千花の記憶の手がかりになるかも知れないと妖夢が教えてくれたの
だが、結局調べずじまいで終わってしまったが……

「記憶の手がかりか。もしかしたら、あの声や力と何か関係があるかもしれないな。だけど……」

何故か、記憶を取り戻そうとすると体が拒む。

心のどこかで、それは知つてはいけないとブレーキをかけてくる。この感覚も相変わらずか、と千花は歯噛みした。

「怖がってるのか、僕は。過去の記憶を知つたら今の自分が無くなるとでも思い込んでるのかな。……そんなことあるはずもないのに」

動かなければ始まらない。

まずは幽々子に外出許可を貰い、それから以前出会ったあの天狗の女の子に場所を訊いて里へ向かえよ。

里に着いて、何か記憶の手がかりが見つかればそれで良し。何も手がかりにならないようなら、ただ単純に気分転換に遠出しただけだと思えばいい。

善は急げだ。

千花は体を起こして道場を出ると、幽々子の自室へ向かつて歩き出した。

・ · ·

「幽々子様、よろしいでしょうか」

部屋の前まで来ると、千花は戸の前で幽々子を呼び掛けてみた。いつもなら間延びした返事が返ってきてから戸が開くのだが、今日に限って返事がなかつた。

どこか別の部屋にいるのか、それとも昼寝でもしているのだろうか。人の気配はするので中に誰かいるのは間違いないのだが、千花はもう一度声をかけた。

「幽々子様？」

「…………はい、ちょっと待つてて？」

やつと声が聞こえた。

千花は一度身なりを整えてから戸が開くのを待つた。
程なくして幽々子が姿を現す。

何故か、微かに目元が赤くなっているのに気づいた。

「幽々子様、どうかしたんですか？　目元が何か赤くなっていますよ
？」

「あ、ああこれ？　ちょっと本を読んでいたら感動しちゃって。ち
どつぞ？」

促されるまま千花は部屋へと入り、中央に敷かれた座布団の上に正
座した。

「それで、何か御用かしら？」

鼻をすすりながら幽々子が言つた。

そんなに感涙に咽ぶほどの物を読んでいたのだろうか。
声まで震えている。

「その、実はお願いがあつて……」

「何かしら。言ってござんなさいな？」

「少しだけ、外出許可を貰えませんか？　少し調べ物をしたくて

「……調べ物？」

幽々子の瞳が千花を見つめる。

適当に誤魔化そうかとも思つたが、かといつて隠す理由もない。

千花は正直に話した。

「記憶の手がかりになるかもしねないって、妖夢から聞いたんです。それで気になつて、自分で調べようかと思つたんです」

「そつ……。記憶を」

何故か幽々子の表情が曇る。

千花のことを心配してこねとこねとだらうが。

「大丈夫です。ちゃんと武器は持つていませうし、陽が落ちるころには帰つてきますから」

「……ホントに? ホントにちゃんと帰つてくれるの?..」

「え……?」

幽々子の台詞に思わず目を丸くした。

どこか、幽々子の様子がいつもと違うような気がする。

何かあつたのだろうかと問いかげようとしたとき、幽々子の方から口を開いた。

「あ……」「メンなさい。今のは忘れてちょうだい」

「そ、そつですか……」

「ん。じゃあ、今回は許可するわ。氣をつけ行つてらっしゃい」

「……はい。ありがと!」「わざとめめ」

立ち上がり退出しよつとした瞬間、ドン、と背中に強い衝撃。何事かと振り向くと、細い腕がするつと千花の体に伸びていた。突然幽々子が、背中から抱き付いてきた。

「え……ツー? ちよ、幽々子様!?」

ほんのり冷たい感触が背中越しに伝わってくる。
幽々子の体が、ほんの少し震えていた。

「絶対に帰つてくるのよ。絶対」

「わ、わかりました」

「……よろしい」

それだけ言つて幽々子の体が離れていった。
振り返つてみると、いつもの笑顔に戻つていた。

「じゃあ、行つてきます」

「ええ、行つてらっしゃい」

ひらひらと手を振る幽々子に軽く頭を下げてから、千花は廊下を歩
きだした。

第一十三話 ＜ 微かな違和感 ＞（後書き）

もつべししたら、またおまけ的なお話を書いつかと思つてます。

内容は今書いている作品とはたいして関係ないんですけど、今まで書いた創作キャラ同士を会わせて何かやつてもらひ……みたいなヤツです。

葉月とか、あてなとかだけを集めておまけトーク的な感じのを予定しています。

……あ、葉月だけぼつち確定なんだけビーフショット……

第一十四話 ＜狼の川流れ＞

白玉楼を出た千花は早速妖怪の山へと向かい、あの新聞記者の天狗を探して山道を歩いていた。

高くそびえる木々の枝を注意深く見つめながら先へと進んでいると、やがて目の前に広大な滝が広がった。

「うわあ……。すごいな」

激しい水しぶきが霧となつて千花に降り注ぐ。

山道を歩き続けていて汗だくだった千花はちょうどいいと、手近な場所にあつた石の上に腰掛けてのんびりと滝の音に耳を澄ませていた。

轟々と落ちる水の勢いに乗つた風が冷たく心地がいい。

いつも堅苦しくしている妖夢にも見せてあげたいなと、こっそり思つた。

「けど、あの天狗の新聞記者全然見当たらぬ。気配も何もしなん？」

気配と視線を感じて言葉を止める。

殺氣はないのだが、やたら凝視されてるような気がする。

方向は……と首を回してみると、何故か視線は水の底から感じた。

水の中に誰かいるのだろうか。

千花は川面に向かつて顔を突っ込んでみた。

滝のすぐそばとあってか流れはかなり速く、魚の姿もあまり見られない。

そして当然ながら、水中には誰の姿も見当たらない。

「つはあ。……おつかしいな。確かに視線を感じたんだけど……？」

姿を消してこのひとでも書つのだらうか。

しかしここまで巧みに消されていると、千花の能力を以てしても狙うのは不可能だ。

あくまで、可視できる対象でないとこの能力は発揮されないし。

「いつの時、妖夢の言つてたあの蒼い田とやらになれば、もしかしたら見えるのかも。つても、そんな物をどうやって使うのかなんて知らないけど」

強く祈れば蒼くなるのだろうか。
試しにやってみようか。

千花はそんな軽い気持ちで念じてみた。

蒼の瞳を灯せ。

- - - - -

「あ、無理だよね……。でも、見つけられればなしつてのせいで
気になるんだけど……ツー？」

チクチク刺さる視線が気になつて仕方ない。

試しに川面に向かって呼びかけようとした瞬間、突然背後から殺気を感じ前へと跳んで振り向いた。

「な、何だ！？」

目の前にいたのは幅広な太刀を握りしめる白髪の少女だった。キツ、と鋭い視線で千花を睨みつけ、太刀の切っ先を向けてきて叫

んだ。

「」の妖怪の山に無断で侵入するとは不届き千万！ 早々に立ち去りなさい！」

「え？ 」の山って入るのに許可がいるの？ エ、と……参ったな。そういうことは全く聞いてなくて……」

幽々子も妖夢も、そんなこと一言も言つていなかつたような。

「……？ と、とにかく早々に立ち去りなさい！ セもないど、斬ります！」

「へ？ いやいやちょっと待つて！？ 第一どこので許可なんか」「覚悟ッ！」

「うわわわわッ！？」

千花に踊りかかる刃を寸でのところで回避する。

もう少しで髪がばっさり斬りおとされるところだった。危ない危ない。

「ま、待つて！？ 僕は人を探しに来ただけで、うわッ！ と、とにかく剣を收めて！？」

「この山の哨戒が私の任、侵入する不埒な輩は全て敵です！ はああッ！」

少女は千花の言葉など聞く耳持たず、その太刀を軽々振り回して襲いかかってくる。

弓を構えようと背に手を伸ばそうとするが、少女がそれを許さない。猪突猛進に迫る少女を右に左にと地を蹴つて回避しながら千花は呻いた。

近距離戦じゃ分が悪すぎる。

一度大きく距離を取つて『』で応戦するか、それともこの場は体術で凌ぐか。

思考を巡らせながら退いていると、右足が冷たいに何かに触れて千花はハツと振り向いた。

マズイ、追いつめられた。

文字通り背水の陣となつた千花はもう一度少女へと向き直ろうとして、その少女がいない事に気が付いた。

フツ、と千花の頭上から影が落ちる。

「……ツー！」

「でええやああああああああーー！」

高く飛び上がつた少女はまっすぐに太刀を振り下ろしてくる。

千花は悩んだ末、その場で両手を構え真っ向から白刃取りの形で太刀を受け止めた。

「え……！？」

「ツ、ゴメン！」

「へ？ ……きやあー！」

そのまま勢いを保つたまま千花は体を捻り、太刀ごと少女を豪快に投げた。

綺麗な放物線を描きながら少女は真っ逆さまに激流へとダイブして派手な水しぶきが上がる。

そしてそこまでやつてから千花はしまつたと顔をしかめた。滝の麓の激流は想像を絶するほど速い。

仮に彼女が妖怪だったとしても、泳ぐことは困難なはずだ。

「……ああ、もう一因縁応報というか句と言つかー！」

自分が放り投げた少女を助けるべく、千花は一心不乱に激流へと飛び込んだ。

全身に襲いかかる冷たさと激流に己が体が震える。

それでも懸命に水をかき、少女の下へと近づいていく。

……が、おかしい。

一向に前に進まない。

それどころか、自分がむしろ溺れてるような気がするのだが。
……もしかして、

「ほ、僕泳げないのかあ！？」

ガバガバと水を飲み込んでしまい、あつという間に体が沈んでいく。本末転倒。少女の姿も、いつの間にか見えなくなっている。

「ふはッ！ も、もう限界……」

ナサケネエヤツダナ……

薄れゆく意識の中、そんな声がした。

以前聞いたような枯渇で野蛮な声ではなく、何とも頼りない我が子を窘めるように、優しいが、どこか呆れているような、そんな声だった。

そして千花は激流へと沈んでいった。

第一十四話 ＜ 狼の川流れ ＞（後書き）

……まあ、たすがに本物の狼なら少しは泳げるかと思いますが；
そして出る予定ないとか言つてたわりに結局出た桟 w

そしてこの次から、話がややこしくなります。
作者も今後の展開に頭を抱えております……

ああ、もっと感想が欲しい！ w

読者の声が聞きたい！ w

第一一十五話 ＜ 食い違つて承 ＞

「おうい。大丈夫があ？」

声が、聞こえた。

重い瞼を静かに開けると、田の前に雨合羽を羽織った少女が千花の顔をじつと見つめていた。

何度も瞬きしてから、ゆつくつと体を起こす。

何故か千花は薄暗い洞窟の中にいた。

「（）」は……？

「私の家だぞ。怪しいヤツを見張つてたら桺と一人して流れてきたから助けたのさ」

「桺……？」

ちょいちょいと指を指す方向に、先ほど戦っていた少女が横たわっていた。

微かに胸が上下している。

よかつた、どうやら無事だつたらしい。

「お前、何者なんだ？ 妙な妖氣を感じるし、おまけに泳げもしないのにあの激流に飛び込むだなんて、バカか？」

「う……返す言葉も無い。……でも、助けてくれてありがとう。

えと

「河城」とつ。これでいいよ。お前は？

「千花つて言つんだ。夕凪千花」

「ふうん……お、桺も気が付いたみたいだな。どれ

【】とつは桺の下へと駆け寄ると、その体をゆつくつと起しして何や

ら話をしている。

千花は、とりあえず吐息してから自分の衣服を確かめた。激流に飲まれていたはずなのに全然濡れていない。

どうこうことだらうか。

それに、この場所はいつたい何なのだろうか。

見たことも無いような物体や、小難しそうな本が満載の本棚で、

「少しよろしいですか、侵入者さん」

「……あ」

振り返ると、桜が頬を染めながら立っていた。

怒りと感謝がない交ぜになつたような、何とも言えない表情で言つた。

「……その、助けてくれたこと、感謝します。それに免じて今回は不問と致します。それでよろしいですか？」

「あ……はい。それで結構です。……すみません、許可取らないと入れない山だなんて知らなくて」

「いえ、妖怪ならまあ……私ももう少し貴方を観察するべきでしたね。私と同族だったとは思いもしませんで」

「同族？」

千花と桜が同時に首を傾げた。

すると、横からにとりが口を出してきた。

「違うのかい？ 桜と同じような尻尾に耳まで似てるじゃないか

「そ、そういう……」

桜の頭にはピロピロ揺れる三角の耳、そして背後で揺れる尻尾まで。今の今まで気がつかなかつたがこの少女、千花とよく似ている。

「しかも殿方だなんて、久しく見たような気がします。どこかへ旅にでも行っていたんですか？ それでこの山に帰つて来たとか」

「い、いや違います！ 僕は……えと、何だろう？」

「……？」

「そういえば千花は自分の種族が何なのか知らない。
ただの人間、ということはないだろう。

ならば妖怪ちからなのか。

確かに能力は備わつているが、かといってそれが妖怪たらしめる所以となるだろうか。

「……えと、千花さん？」

「どうしちゃつたんだろう。急に唸りだしちゃつて」

悩む千花の姿を見つめて二人は顔を見合せた。

「た、たぶん妖怪と人間のハーフ。……だと思つ」

「だと思つて……自分の種族がわからないんですか？」

「……うん。助けてもらつたときに記憶を失つたらしくってさ。それで、今は記憶の手がかりを探してる最中なんだ」

「それで人探し、ですか」

「うん。その人が蒼狼を信仰してる里の場所を知つてゐたから」

「蒼狼信仰？ ああ、私も知つてるよ」

にとりは頷くと、本棚から一冊の本を取り出した。

意外と薄く、表紙には妙に可愛らしい蒼い犬が描かれていた。

「……これは？」

「まあ、御伽噺おとぎばなしみたいなものさ。内容はだな」

にとりの話を要約するところだ。

昔、この幻想郷のどこかに、それはそれは美しい蒼き毛並みを持つ蒼狼がいたそうだ。

狼はある里の守り神として信仰されていたが、決して人前に姿を見せたり、安易にその力を里のために使つたりはしなかつた。ただ、里の人間が本当に窮地に立たされた時にだけその姿を現し、力を使って人々を救済した。

蒼狼は、人間が好きだった。

常に孤高の存在である狼にとって、他人と群れを成して生きる人間が可笑しくてたまらなかつた。

そして何時しか蒼狼は人間を愛していた。

妖怪が里へ襲いかかってくれば、その牙と爪で容赦なく妖怪を退け里を守つていた。

「とまあ、こんな感じだよ。よくある子供向けのお話や。……って、どうしたのかな、変な顔をして」

「いや……。僕の知つている話と随分違つんだけどな」

「でも、妖怪の中じゃ割とポピュラーな御伽噺なんだけどねえ。桜も知つてるだろ?」

「はい。よく読み聞かせてもらつてましたし、自分で何度も何度か読んだことがありますよ」

「……どういうことだろ?」

「千花さんはどんな話を聞いたんですか?」

「んと……確か」

千花は妖夢の言葉を思い出しながら、自分が記憶している伝承の事を話した。

聖なる狼までは正しいのだが、定期的に生贊を必要とするほどの凶

大な力であるということ。

里で一度暴走し、その時に魂魄妖忌によつて蒼狼は蒼き太刀に封印されてしまつた……と。

「そりやあ、人間が編纂したからなのかね。でも、普通妖怪なら蒼狼は守護の象徴として扱われるんだけど」

「ちょっと変ですね。千花さんは何方からこの話を？」

「白玉楼で一緒に働いてる妖夢から。でも、妖夢も別の誰かから聞いた話だつて言つてたけど」

「一緒に働いてる……って、え、千花さん白玉楼の人間なんですか！？」

「あ……そういえば言つてなかつたっけね」

「だから妖夢さんの名前が出たんですね。……意外と凄い人ですね？」

千花さんって

「それほどでもないけど……」

「で、そういうえば人を探してるって言つてたけど誰を探してるんだ？」

「あ、そうだつた。実は天狗の新聞記者を探してるんです。知りませんか？」

千花が訊ねると、何故か柵の顔が引きつった。

「も、もしかして……」

「もしかしながら、柵の先輩のアイツだろ」

同じような表情でにとりが続けた。

「え、二人とも知ってるんですか？」

「そりやあまあ……な。特に柵の場合上司だし」

「上司……？」

「……お恥ずかしいかぎりです。千花さんも何か迷惑被つたのでしょっ?」

「いや、僕は別に……。それより、何処にいるか分かりますか?」

「そういえば、最近は忙しそうに飛び回っていて、あまりこちらの方には帰ってきてませんね」

「私も姿を見かけないな」

「そう……ですか」

何かまた別の取材でもしているのだろうか。
しかしこれでは里へと続く道が分からない。
いつたいどうしたものか……

「おやおや、こんな場所で見つけとは奇遇ですね」

突然洞窟に声が響き振り返ると、そこには見覚えのある少女が立っていた。

「……あ、君は」

白シャツに勝気な瞳。

それはまさしく、千花が探していた天狗の新聞記者、射命丸文だつた。

第一十五話 ＜ 食い違づ伝承 ＞（後書き）

千花が聞いた蒼狼伝説、そしてにとりの語った蒼狼伝説。
同じ伝承のはずなのに何故か食い違つその物語。
果たして何を意味するのか……？

何て、ちょっとと思わせぶりな後書き。
一番混乱しているのは作者です。w

第一十六話 ＜ 真実の真実 ＞

洞窟に突如現れた天狗の新聞記者射命丸文。不敵な笑みを浮かべながら千花へと歩み寄ると、こいつのようへん先を千花に向けた。

「ふふ。飛んで火にいるなんとやら。こいつらも探す手間が省けました」

「探す手間って、君も僕を探していたの？」

文は「ク」とうなずくと、胸元から小さなメモ帳を取り出しへーページを捲つていった。

「ええ。いくつか貴方にお伺いしたいこともありますし、それに頼まれてますからね」

「頼まれてる……？ 何を？」

「貴方を蒼狼信仰の里へと案内することを、ですよ」

・ · ·

文の案内で、千花は「」の幻想郷の西にあるところ里へと向かっていた。

妖怪の山を出て、そこからまっすぐ西へと進む。

一時間ほど経つと、やがて田の前に薄暗い森が見えてきて文はそれを指差した。

「」の森を抜けた先に蒼狼信仰の里があります

「……ずいぶんと不気味な森だな」

薄靄も立ち込めており、今にも何か出そうな雰囲気だった。
心無し肌寒いような気もある。

「案内しますから、ちゃんとついてきてくださいよ」と…」

文は地面を蹴つて木の上へと飛んでいった。

千花も真似して枝へと飛び移ると、文の背中を追いかけた。

奥へと進むごとに、木々の葉が失せていた。

今は真夏だというのに、ここだけ真冬のような景観だった。

いつしか飛び移る木々は全て枝だけで葉の一つも無くなっている。

「……何だろ？ 心がざわつく。この先に行つて本当に大丈夫なのか……？」

胸騒ぎを抱いたまま進んでいると、やがて文の姿がフツと消えた。
枝から下りたらしい。千花も文の少し手前で枝から下りた。
すると目の前に、ボロボロの小屋と大きな門がそびえていた。

「……が……」

「里はこの先です。では、私は案内を終えたので行きますね
「え？ いや、ちょっと……！」

千花が振り返つた時にはすでに、文の姿がかき消えていた。
本当にここまで案内をするだけだったのか。

まだ礼も言つていないので。

「また今度言えばいいか。……さて」

千花は目の前の門をそつと片手で押してみた。

ギギッ、と木の軋む音を響かせながらゆっくりと門が開いていく。

門の奥には雑草だらけの道が一本伸びていた。

念のためにと弓を握りしめてから歩きだすと、奥の方から異臭が漂ってきた。

何かの腐敗臭のような匂いに千花は顔をしかめながら手で覆つた。

「……………酷い」

朽ち果てた家屋に、そこらじゅうに転がる腐敗した亡骸。奥へと進む度に、異臭の強さが増していく。

ここが本当に蒼狼信仰の里なのかと、千花は何度もその目を疑つた。やがて開けた場所に出ると、今度はおびただしい量の死体が田の前に広がつた。

「うう…………」

吐き気を催して何とか堪える。

どれもこれも惨殺されていて見るに堪えない。

人間以外にも、妖怪の死体まである。

この里でいつたい何が起こったというのだろうか。

「……………あれば」

死体の山の向こうに、岩山をくり抜いて造られた祠を見つけた。

ぽつかりと開くその姿に、何故か千花は見覚えがあるような気がした。

……といつより、この里全体に既視感のようなものを覚えていた。

ここを訪れたのは、初めてだというのに。

やはりここは記憶と何か関係があるのであらうか。

「……………だけど、何も思い出せない。結局無駄足だったのかな」

祠を出て里の入口へと向かおひとした瞬間、千花の足元に短刀が突き刺さった。

「またこいつ等か」

縁日の時幽々子を襲つた黒装束の奴らが、再び目の前に現れた。数はざつと見て八人。

刀を手にじつとこちらを見据えている。右手で矢を掻むと素早く番えて構える。

「幽々子の次は僕か。何が狙いだ」

「……」

だんまりか。

そういうば、以前も言葉など発しなかつたような気がする。氣味の悪い奴らだ。

「……正当防衛、だからね」

黒装束が一斉に千花へと飛びかかる。

後退しながら矢を放ち、距離を詰められたら蹴りや徒手空拳で応戦し、再び距離が開けば弓矢で射る。

器用に立ち回りながら戦っていると、以前のように黒装束の数が増えっていた。

「どうからこんなに湧いてくるんだ、くそッ！」

「一体多數で得物は？」

分が悪いにも程がある。

どうしたものかと思考を巡らせていると、突然後頭部に鈍い痛みが走った。

「がッ……！」

いつの間に背後を取られ、体勢を崩した千花に黒装束が一斉に襲い掛かる。

意識がふらつき膝をつぐ。
視界が霞む。

体に上手く力が入らない。
ここで、死ぬのか？

こんな訳のわからない連中に不覚を取つて無様に死ぬのか？
そんなの……嫌だ。

「…………」

瞳が蒼に染まる。

黒髪が蒼に染まる。

目の前に太刀と鞘が映る。

ほとんど無意識に、いや、本能的に鞘を掴み抜刀する。

そして千花は犬歯を剥き出しにして咆哮した。

「俺を殺そなんて、てめえら見たいな雑魚に、出来るわけねええ
だろうがあああああああ！」

れっぶく
裂帛の気合いと共に、蒼の太刀が一閃。

黒装束の姿が霞み、やがてその存在が抹消されていく。
その場から、塵一つ残らず黒装束が消えた。
大きく肩を上下させ、千花は、目の前の虚空を斬り払う。
引き裂かれた空間の先に、紫紺の瞳が驚愕の表情を浮かべていた。

「次元を引き裂いた……！？ そんな力まで」「つむせえ引き籠り野郎！ 今すぐそっから引きずり出して殺してやる！」

紫紺の瞳が細まり、口元あざわらが小さくつり上がった。
浅はかな、とでも嘲笑うかのよう。

「いいえ、引きずり出されるのは貴方の方。気づかないのかしら？」

貴方の足元

「……ッ！？」

いつの間にか千花の足元に巨大な円形の陣が広がり白く発光していた。

円の端には何やら紋様のような線が描かれ、千花を中心になぐりと囲んでいる。

「てめえ……！」

「……まずは、その動きを封じましょつか。境符『四重結界』」

紫の詠唱と共に千花を包みこむ陣が呼応する。
ぐるりと囲っていた陣がさらに一重二重にと重なり、最終的に千花を中心四重の陣が重なる。

端の陣から光が生じ、千花は陣の中心で光の檻の中へと閉じ込められてしまった。

「なめるなよスキマ妖怪。こんな封印ぐらい、俺の太刀で事象を断てばそれで済む話だろ？」「ちょっと時間を稼げればそれで十分よ。捌器『全てを二つに別ける物』」

別の術符を取り出し紫が再び詠唱を始める。

その間、千花は蒼の太刀で乱暴に光の壁に叩きつける。

ほんの数秒で壁に亀裂が走り、紫の頬に汗が一粒流れる。

「相変わらず、粗暴な聖獣だこと」

「黙れ。くだらねえコト考え……ツー」

「……でも、間に合つたわ」

千花の足元に、別の陣が現れ赤い光を放つと千花を飲み込んでしまつた。

紫は汗を拭うと、次元の裂け目から姿を現し陣の中心へと近づく。

「…………とりあえず、これでよし」

目の前の陣の中心に瞳を閉じて浮遊する千花と、千花の背丈の倍ほどの蒼い狼が同じく浮遊していた。

何故千花も狼も、半透明に透けていて向こうの景色が映っている。

「これで、蒼狼を消してしまえばそれで」

「…………紫さん」

伸ばしかけていた手を止め、振り返ると文が立っていた。
複雑そうな表情を浮かべたまま文は口を開いた。

「…………何かしら」

「本当に、彼は凶悪な存在なのですか?」

「…………ええ、そうよ」

「私は貴女と、それから慧音さんから調査を依頼され、そして一つの事実を突き止めました」

「…………」

紫は答えない。

文はそのまま言葉を続ける。

「人間が遺したとされる凶悪な蒼狼の伝承、そして妖怪に伝わる守り神としての蒼狼の伝承。同じ蒼狼なのに、異なる説。これは……どういう事なんですか？」紫さんは真実を知っているんじゃないですか？」

「それは……」

紫の表情が微かに歪む。

相反する面を持つ、異なる伝承。

「…………どちらも真実よ。凶悪な力を持つということも、そして、この里を守っていたということも」

そして紫は、蒼狼伝説の全てを語りだした。

第一十六話 ＜ 真実の真実 ＞（後書き）

全くプロットをまとめてないため、非常にピンチです；
そろそろ物語の穴や違和感が目立ち始めるかも……

それと、評価ポイントありがとうございます。
せっかくポイントもらえて、その人が分からぬから本人にちゃんと御礼を言えないのは残念ですが……

第一十七話 ＜ 気まぐれな狼 ＞

人間といつのは、どうにも現金な生き物らしい。

その昔、蒼狼は幻想郷の西の果てに生きていた。毎日自由気ままに森や野山を駆け抜け、他の妖怪や精霊とは関わりを持たず、一人孤高に暮らしていた。

そんなある日。

蒼狼がとある洞窟の中で眠っていると、どこからか耳をつんざくような悲鳴が聞こえてきた。

人間が妖怪にでも襲われたかと最初は氣にも留めなかつたのだが、ちょうど空腹で人間を喰らつた妖怪を喰らつて漁夫の利を得るのも悪くないと、蒼狼は起き上がり洞窟を出て丘の上にと立つた。

眼下に小さな人影がいくつかと、その人影の視線の何倍もの背丈の妖怪が仁王立ちしていた。

どう足搔いても人間に勝ち目はない。

蒼狼は早く妖怪があいつらを引き千切り、喰らうのを静かに待つていた。

……だが、一人の人間がこちらの存在に気づき指を差して叫んだ。

「あ、蒼い狼がいるぞ！？」

するとその場にいた人間と、妖怪までもがこちらを振り返った。

蒼狼は何やつてるんだ？ と眉をひそめたが、次の瞬間何故か歓声が上がってきて、

「せ、聖獸だ！ 蒼く輝く狼なんて聖獸様に違いない！ きっと我

らを助けに来てくれたんだ！」

「ああ？ 何言つてんだアイツら……？」

人間は急に地面にひれ伏して何度も何度も仰々しく「ひらりを仰いで拝み始めた。

まるで救いの神に助けを求める殉教者のような、ちょっと危ない眼差しで。

そんな神でもなんでもないのに助けを求められても困るし、それに、今度はもう一人の妖怪の視線が突き刺さって、

「ああ？ あんな犬つころが神だと？ あんな弱そうな犬に俺様が負けるかよ」

「……バカじやねえのかアイツら」

フワアと大欠伸をして首を回す。

別に準備運動でもなんでもなく、ただ首が凝つただけだ。

それなのに人間は何だか嬉しそうに見上げてくるし、妖怪も舐められてるとでも思つたのか肩を怒らせこむらに向かつてやつてくるではないか。

「おいおい。俺は何にもしてねえだろ」

「うるせえ。てめえを倒してあいつらの顔を恐怖震わせてから喰らつてやるんだよ。その澄ました顔へし折つてやる」

「澄ましてるつもりはないんだがね……。やるつてんなら相手するぞ」

「

「イツと歯をむき出しにして笑うと、襲いかかる妖怪を真上に飛んで避けてから、その背に向かつて飛びかかった。

下級の妖怪程度にやられるわけなく、蒼狼はあっさりその妖怪を倒してしまった。

名は、忘れた。

どうせ名のある妖怪じゃないだろう。
そして、妖怪を倒してから気づいた。

「オイオイ。これじゃ人間を喰らつた妖怪を喰らえないじゃねえか。
我ながらバカなことしたねえ」

「あ、ありがとうござります！ 聖獸様！」

下は下で歎声が上がつてゐる。

ただ成り行きで助けたといふのに呑氣な奴らだ。

そもそも俺がお前らを喰らつてもいいのだが、生の人間は骨ばつて
て好きじゃない。

半眼で見下ろしていると、人間たちはペコペコ頭を下げながら森の
奥へと消えていった。

その先に、いつ出来たのか小さな村が見えた。
あのひ間たちの村だろうか。

「……まあ、いいや。今日はまちづ眠いし、明日にでも様子を見に行
つてみるか」「

蒼狼はくるりと踵を返すとねぐらへと戻つていった。
それから半日過ぎて……

・ · ·

陽が昇り、何か木を打ち付けるようなコンコンという物音に耳を覺
ました。

「んあ……？ なんだこの音」

物音はちゅうどいの丘の真下の方から響いていた。

崖の下を見てみると、たくさんの人間たちが集まり何かを造っていた。

まず最初に目についたのは、木造の小さな建造物だ。

恐らく、神を祭る社だろう。

つてことはこの辺りに何か神様が来るといふことだろうか。

そんな話は聞いていないが。

……気になる。

もづ少し観察してみようか。

蒼狼は音を立てないよう静かに岩場を蹴つて森へ着地すると妖力を使って姿を消した。

昨日みたいに騒がれるのは御免だし。

どうやら社以外にも、田の前の山の岸壁をくり抜いて何か祠のようなものも造っているようだ。

「だからなんでこんなとこに社や祠を造るんだっての」

意味が分からねえ。

本当にどこから神様が降臨してくるのだろうか。

……そうなつたら、この場から離れないといけないな。

「いやあ、それにしてもいい所に里を造れたよな」

ふと、人間の話し声が聞こえてきたので耳を傾ける。

どうやら昨日妖怪に襲われていた人間の一人らしく、聞き覚えのある声だった。

「ああ。まさかこの地に聖獸様がいらっしゃるだなんて知らなかつた。未開の地を切り開いて里を起したが、どうやら俺達は運がいいらしい」

「聖獸……。まさか、俺のことか？」

よくよく見てみれば、社には狛犬じゃなくて狼の石像なんか飾つてある。

そこは狛犬のポジションだらうに、俺が立つてどうするんだ。何も守らないぞ。

そんな蒼狼とは裏腹に、社や祠はあつと/or>う間に完成してしまって、しまいには早速参拝客が訪れる始末。

毎日拝みに来る婆さんとか、お供え物を持つてくる巫女さんとか。

思いの外けつこうな参拝客だった。

信仰される、というのがどういふものかは知らないが、別に悪い気分はしなかった。

里のために働いたことは一度もないけど。

「ああ……何でいうか、因果応報つてか」

あの時、最初から身を隠して傍観してりや、妖怪に人間が喰われて、その妖怪を俺が喰つて満腹のはずだったのに。

「…………… アイツ、また来たのか」

そして社が出来てから熱心に通う少女を見つけ蒼狼は少し丘の上から身を乗り出した。

少女は何を祈っているのか、雨の日だらうと風の日だらうと毎日毎日この社に訪れては祈りをささげていた。

そんな姿を蒼狼はいつも見下ろしていた。

特に理由はないのだが、毎日見ているうちに何となく気になっていたのだ。

「何を祈ってるんだか知らないがヒマな奴だねえ。……ちょっとからかってやろうか」

姿を消し少女のすぐ傍へと着地すると、ふわあと風が舞い上がる。少女はハツと顔を上げ周囲を見まわしたが、当然蒼狼の姿を見ることはできず、再び両手を合わせ祈りはじめた。くつくつと小さく笑いながら、蒼狼はちょっとカツコつけてから少女に問いかけた。

「少女よ。ここで何を祈っている」

「……え？ 今、声が……？」

再び辺りを見回す少女の姿が滑稽でたまらない。

「も、もしかして聖獣様ですか？ で、でしたらお願ひです。私の願いを聞いてください！」

「ああ。何だ言ってみろ」

低めに声を調節して少女に答える。

すると、少女は天を仰ぎ頬に涙を伝わせながら言つた。

「ここに、危機が迫っているんです！ 私はそれを、夢で見たんですね！」

「はあ……？」

突拍子もない言動に蒼狼は首を傾げた。しかし少女の表情は真剣そのもの、蒼狼は面倒になつたかもと後悔しつつ、話してみよと少女を促した。

第一十七話 ＜ 気まぐれな狼 ＞（後書き）

ここから蒼狼の過去話。

……なんか、今回のお話は過去話ばつかだな；

しかし、アクセス数落ちちゃったなあ

第一十八話 ＜ 成り行き守り神 ＞

話を聞き終えた蒼狼は、ハアと大きく嘆息してやれやれと首を振った。

少女の見た夢を簡単に言つと、

この里に突然大量の妖怪が村に襲いかかってくるのだという。
そして里の人間は一人ずつ殺され、やがて最後は跡形も無く破壊されてしまふのだとか。

「……これが本当の狼少年、あいや、この場合は少女か」
「し、信じてください！ 私にはそういう能力ちからがあるんです！」
「能力だと？」

すると少女は自分の持つ能力について話し始めた。
それは自分の身に起こる近い未来を夢で見るという未来予知の力だと。

蒼狼はその眼を細めるとふむ、と小さく唸つた。
どうも嘘をついているというわけではないらしい。
それに、微かだが少女の体から力の波長を感じる。

「お前、巫女なのか？」

蒼狼の問いに少女は首を振つた。

「いえ、普通の農家の娘です」
「はあ……。それはそれは変わった農家の娘だ」

年の頃は十代前半と言つたところか。

腰まで伸びた黒髪と、頬のそばかすが幼さを強調している。別段変りない普通の人間なのに、力を持つているとはどういうことだろうか。

まさか信仰の賜物だとか言うわけないだろ？

「その能力のこと、他の奴には話したのか？」

「……いいえ。話しても、誰も信じてくれませんでした」

「ま、そりゃそうか」

いきなり娘が、『明日里が妖怪に襲われるの…』なんて言つても、笑い話か夢の話だろ？と流してしまうだろ？ 真に受けるヤツはちょっと危ないに決まってる。しかし蒼狼もすんなり頷くわけもなく、

「……しかし夢のお告げだけで信じるってのも妙な話だな。こういふのはアレだろ、ショーコってヤツがあれば信憑性が上がるんじやないか」

「証拠……ですか？」

少女の表情が誰にでもわかりやすいくらいに沈んだ。ただの農家の娘が出来ることなどたかが知れてる。

蒼狼はそろそろ退屈になつてきてふわあ、とそこいら辺の犬そつくりな欠伸をした。

……いけね、涙まで出てら。
帰つて寝たいかも。

そんなことを考へていると、不意に少女が顔を上げた。そつちを見上げても俺はいないぞお嬢ちゃん。

「で、ですからお願ひです！ 私と一緒に、その証拠を、探しに行つてくれませんか？」

「…………ああ？」

思わず地声が出た。

少女はその声にビクッと体を震わせてキョロキョロと辺りを見回し始めた。

「そつちじじゃねえ。」

「…………シ！？」

少女の目の前に、蒼狼はその毛並みを輝かせながら姿を現した。こそこそ隠れながら話すのに飽きた……もとい、そういうのが嫌いだつたし。

少女は目をパチパチさせながら、え！？　だとか、あ！？　とか途切れ途切れな悲鳴を上げている。

「おつと。叫ぶの禁止。人間に姿を見られるのはあんまし好きじゃないんでね」

「あ、わわわわ…………！？　ほ、ホントに聖獣様だ！　蒼い狼の聖獣様だ！」

「聖獣つて…………まあ、いいか。さて小娘、話をしようつか」

「は、はい！？」

社の真ん前で正座する少女。

瞳が光を浴びた水面みたいにキラキラしていて、蒼狼の言葉を待ち望んでいる。

とりあえず、蒼狼はん、うん、と喉の調子を確かめてから言った。

「俺は人間のために働くってのは一度もやったことがない。故に、お前の言葉に耳を貸して証拠を探しに行くのは御免だ」

少女の顔が歪む。

まさか協力してくれるとでも思っていたのだろうか。
オメデタイ娘だこと。

「そ、そんな……！？」この里が滅んじやうかもしれないですよ！

？ それでも守り神なんですか！？

「別に守り神になつたつもりは全くないんだが……。それを説明するのも面倒だし。つまり、そういうことだ。諦めな

「お、お供え物をいっぱいあげますから！」

「んなもん一度も食つた事ねえよ。っていうか、お前んとこの里の

ガキが食つてんじゃねえか

「あうう……。じ、じゃあたくさんお酒をお供えしますからー！」

「酒はやらん。健康に悪いからな。それに俺は酒を分解する酵素が

云々

「じ、じゃあじゃあ……。あ！」

めんどくせこなので右手で少女の頭を軽く叩いた。
一応爪は引っこめておく。

「酒だとか供物で聖獣を釣るつてのか？ それは信仰としてどうな
んかね？」

「だつて、私にできることなんて……」

右手が微かに下がる。

少女がうつむいたからだ。

今の蒼狼はちょうど、出来の悪い犬が主人の頭にお手じてる、よつ
に見える気がする。
流石にカツコつかないので手を引っこめた。

「…………じゃあ、いりこりのはどうですか

「ああ？ 何だよ

「私が、生贊になります」

「…………」

引っこめていた右手を少女の鼻先に持つていく。

少女が顔を上げた瞬間、爪をピンチと立てて鼻先にぶつけた。

「つたあッ！？」

狼式デコピング。

そんなに強く弾いた覚えはないが、少女は社の真ん前でじるじるの
たたき回った。

「阿呆。そつやつて自分の命を軽々しく贊にとか言うんじゃねえ」「い、痛あ……。で、でもこれぐらいしないと聖獣様は動いてくれないんでしょう！？」

「つとに、めんどくせえガキだなオイ……」

鼻のてっぺんを真っ赤にさせた少女は、それでも蒼狼をまっすぐ見
据えて見上げていた。

澄んだ黒い瞳に映る蒼狼は、大きくため息を吐いた。

「…………わかった。そこまで言つなら動いてやるよ」

「ほ、ホントですか！？」

「ただし」

一拍置いて続ける。

「もしも、お前の言う妖怪襲撃の手がかりが見つかなかつた場合
は本当に命で償つてもうづぞ」

「そ、それは……」

少女がたじろぐ。

本当にそれだけの覚悟があるかどうか確認するためで、別にこんな小娘を喰らうつもりはないが。

やがて、少女は顔を上げて頷いた。

「……わ、わかりました」

「ほひ……」

澄んだ瞳がまっすぐこちらを見据えている。
それは覚悟を決めた者の目だった。

「わかった。……じゃあ一つ訊くが、その妖怪とやら何者ばかり出てくるんだ？」

「えと、あっちの方……です」

森の奥を指差されてイマイチわからなかつたが、方角は北東か。
あつちは確かにこの里を造る時に結界を施しただとかで普通の人間
は立ち入り禁止の区画じゃなかつただろうつか。

「つてことは、考えられることは一つか

「へ？ あの、聖獣様？ ……わわわッ！？」

少女の首根っこくわえてポイと後ろに放り投げると、背中にぽふつ
と軽い衝撃が落ちてくる。

「ひゃ、ひゃあ！？ わ、私、聖獣様の御身に乗つてー！？」

「ちゃんと掴まつていろよ。落ちたら置いてくからな」

「は、はいー！？」

「あ、と少女が蒼狼の背中に抱きつぶ。

蒼い毛並みは羽毛のようにふわふわで、そのまま寝つたらとても心地よいんじやないかと少女は思った。

……すぐに首を振つてその考えを振り払つたけど。

「やつだお前、名は何ていいうんだ」

「は、はい！ わ、私は夕凪志星しはと言いま、きやあああーー！」

「ん、志星だな。どうでもいいが走つてるとときは黙つとけ。舌切るぞ」

「そ、そういうのは走る前に、言ひてへだ、そこーー？」

激しく上へ下へ躍りふられる志星は向とか名乗ると、あとは口を動かさず懸命にしがみ付いていた。

そして蒼狼は志星を背に乗せたまま、志星が指差した北東へ向かつて一気に駆け出した。

第一十八話 × 成り行き守り神 ×（後書き）

評価ポイント、ありがとうございます。
しかし調子が微妙；
さて、30分後には海鳴譚を更新しますよつと。

第一十九話 ＜ 結界の綻び ＞

蒼狼が一気に走つてだいたい数分後、目の前に小さな祠と石柱が見えてきた。

「これが結界石ってヤツか。人間の造つた物にしちゃあずいぶんとよく出来る」

「昔、里長が東の巫女様に造り方を教わつて造つたそうです。私は、初めて見ましたけど……」

「ふむ……」

蒼狼は腰をフン、と揺らして背の志星を落とすとゆっくり石柱に近づいていった。

石柱はちょうど六角形の形をしていて、注連縄に縛られた表面は大理石のように滑らかだった。

大きさはだいたい、普通の人間三人分と言つたところか。妖氣、とはまた違う妙な力の気配がするが、今すぐにも消えてしまいそうなほどか弱い波長だった。
よく見ると、背面部分に亀裂が走つている。

「「Jの結界石、ちょっと壊れてるな。修理しないと使い物にならないな」

「で、でも！　Jのことを里長に知らせれば、何か手を打つてくれると思います」

「まあ、そりやそつだらうな。……用件はこれで済んだな。もう帰るぞ」

「え？　あ、はい！」

志星が背中に飛び乗つとしたので、ひょいと避けてみた。

そのままバカ正直にまっすぐ地面と正面衝突。

「わふー!?

「おい口下。勝手に乗ろうとするな。許可しないだらうが」

「ひい……痛たた……だ、だつてさつきは乗れって言つたじゃないですか!」

「さつきはさつき、今は今だ」

言つて、子供みたいな言い訳だなとも思つたが、志星はそれに負けじと腕をブンブン振り回し始めた。

「だ、だつて！ 聖獣様に乗らないと、私里まで帰れないじゃないですか！」

「俺を馬か何かと思つてないかお前。そもそもいつやつて接してやつてるだけでもありがたいと思えよ？ 普通の人間ならその首引き千切つて喰つちまつつての」

「ひ……ッ！」

志星の顔が恐怖に染まる。

そもそも俺は妖怪で、こいつは人間。

一般的な常識を持つ人間なら死を覚悟するといひだらう。

「しかもだ。これだけで妖怪が襲撃してくるかどうかなんて俺にだってわからん。もしかしたら本当に襲つてくるかもしけないが、逆に何も起こらない可能性も見えたつてことだ」

「ち、違います！ 絶対に当たるんです！ 今までだつて……

「……ん、なら今まで当てた具体例でも教えてもらおつか」

「た、例えば」

隣の家の子が転ぶ夢を見て、それを注意したが聞かずには結局転んだ、

だとか。

畠に野犬が来て作物を食い荒らす夢を見て、祖父に伝えたが聞く耳持たず、結局食い荒らされたとか。

「ど、どうです！ 憂いでじょう？」

「……」

返事をするのもめんどくさかった。

未来が見えて、全部意味ねーじゃねえか。

てか、ずいぶんちっぽけな未来だな。

蒼狼が呆れて嘆息すると、何故か志星は勝ち誇ったように胸を張つてきて、

「わ、私の夢見はホンモノなんです！ 信じていただけましたか？」

「……あー、うん。とりあえず俺がバカだった」

「そ、その顔は信じていませんねってひやああ！」？

問答無用で志星を背中に放り投げる。

誠に遺憾だがコイツを里まで戻さなくてはならない。

「……とにかく、一応の確認はしたぞ。これで何もなかつたらお前は俺の腹ん中だぞ」

「ぜ、絶対妖怪が襲つてくるんです！ ……た、たぶん

「今度はずいぶんと自信がないんだな」

それきり、志星は黙りこくれてしまった。

里へと帰る途中、蒼狼は背後に微かな妖氣を感じながら里へと駆け出した。

・ · ·

「ほれ。ついたぞ」

社へ着地すると、蒼狼は背中の志星を強引に落とした。
ふらふらと覚束ない足取りで一、二歩ほど歩くと、何故か背中から
倒れかかってきた。

蒼狼の足に志星の背がポンと当たると、志星は慌てて振り返って、

「す、すみません！ め、目が回ってしまって……あわわ」
「……やれやれ。何でこんなガキに協力したんだかな」

自分でもさっぱりだ。

一度ぐるりと首を動かしてから欠伸をすると地を蹴つて丘の上へと
飛んでいく。

あつという間に小さくなつた志星は蒼狼に向かつて手を振りながら
叫んだ。

「あの、聖獸様！ ありがとござります！」

「……ただの気まぐれだ。調子に乗るなよ人間」

「それでも、嬉しかつたです。私の言葉を信じて聞いてくれたの、
聖獸様だけでしたから」

澄んだ瞳が蒼狼を見つめて微笑んだ。

……バカな人間だ。

氣まぐれに過ぎないといつのこと。

「……そうかい。や、とつとと帰んな。結界の事とか里長に言つん
だろ」

「はい！ ジヤ、失礼しま……あ」

何故か志星は一度振り返つて蒼狼を見上げて、

「また、お話してくれますか？」

そんなことを言つてきた。

「……気が向いたらな」

「えへへ。ありがとうございます」

志星はぺこりと頭を下げるが、小走りに里へと戻つていった。

「…………人間、ね」

小さく呟いた後、蒼狼はぐるっと向きを変えて寝床へと戻つていった。

今日はバカなガキに付き合つて疲れた。
さつむと寝よう。

洞窟の奥で瞳を閉じたのも束の間、蒼狼はすぐさま田を覚ますことになつた。

理由は至極単純、爆音と共に田の前の里で火の手が上がつていたからだ。

第一十九話 × 結界の綻び ×（後書き）

地の文が弱いのを本当に痛感しています……；何か、自分のイメージと語彙が追い付いていなかつたり、噛みあつてない感じです；

第三十話 く 欲喜と、恐怖と く

丘の上へと歩いていくと、赤い輝きに照らされた里が眼下に広がっていた。

目を凝らしてみると、里が襲撃されているのだ。
どうやら結界はもう機能していないらしい。

北東から微かに感じていた気が完全に無くなっている。

「……しかし、本当に襲撃されるとはね」

燃え上がる家屋を見つめながら一人ごちた。

あの志星とか言う小娘の言つことは本当だつたのか。
結局蒼狼が力を貸しても未来は変わらなかつたが、このままでは里
は燃え尽き、人間はその炎で全て焼き尽くされるか、妖怪の腹の中
に収まるか、どちらかだろ？

チラチラと視界に映る赤い光が眩しい。

こつちは眠いというのに迷惑だ。

やるなら時間帯を教えてくれ。

こんな真夜中で火柱なんか上げられたら嫌でも起きちまうだろ？

「聖獸様あああ！」

里の悲惨な光景を呆然と眺めていると、足元から声が聞こえてきた。
言つまでもなく志星だろ？

首を微かに下方へ傾けると、顔中ススだらけの志星が一いつ朶ぢを見上
げていた。

「なんだよ小娘。何か用か？」

「よ、用かつて、聖獸様はこの里の守り神なんですよ！？」 どうし

て助けてくださいなのですか？」「

蒼狼は「うそをやりだと言わんばかりに顔を歪ませ、吐き捨てるよつこ言つた。

「だから、守り神とかつてのはてめえら人間が勝手に言つてるだけの話だらうが。俺には関係ないっての」

「そんな……！？ 目の前で、大勢の人人が死んでるんですよ！？ それなのに、聖獣様は見てるだけで何もしないおつもりなんですか？」

「関係ねえな。……そうだ、里が滅んでたらふく人間を喰つた妖怪を喰うつてのはアリだな。満腹になつた妖怪を引き裂いて喰うなんて久々だし」

「……幻滅しました」

「ああ？」

志星の体が震えている。

怒りだらうか、呆れだらうか。

どちらでも構わないが。

志星はキッと蒼狼を睨みつけると、力いっぱい叫んできた。

「私は、聖獣様はもつと氣高くて強いものだと信じてました。なのに、そんな悪党みたいに姑息で弱い心の持ち主だと思いませんでした！ もう、いいです！」

肩を怒らせ回れ右、そして一目散に里へと走り出した。
何をするつもりだらうか。

人間の小娘に出来ることなど、たかが知れてるだらう。

「…………しつかしまあ、好き勝手言つてくれるじゃねえの」

俺が悪党？

俺が姑息で弱い？

そんなことを言われたのは初めてで、非常に不愉快だ。

重い腰を上げて一步、一步と崖へ向かつて歩き出す。

ちょうど里の全景が見渡せる場所に立つと、蒼狼はもう一度眼下を見回した。

里のあちらこちらで火の手が上がり、団体だけはテカイ妖怪たちが逃げ惑う人を追い回している。

「……ま、たまには本気で体を動かすのも悪くはないか」

蒼の毛並みが青白い燐光に包まれると、蒼狼の瞳も同じ色に染まる。そしてもう一歩踏み出して崖の上に立つと、大きく身体を反らして咆哮した。

長く、そして凜と響くその咆哮に、人間も妖怪も同時に天を仰いだ。そして、蒼く輝く聖獣の姿を見つけ、ある者は歓喜し、ある者は恐怖した。

「聖獣様のチカラ、見せてやろつじやねえか。その目でしつかりと焼き付けておけよ、志星」

滑るようにして崖を降りると、一蹴で里の中心部に辿り着く。周囲を見回し、倒すべき妖怪の数を把握する。

その数十体、物の数ではない。

手始めに、一番近くにいた妖怪の首を吹き飛ばした。

牙に滴る血が身体を興奮させる、堪らない快感が身を走る。

そして息つく間もなく別の妖怪に飛びかかりその牙で脳髄を、潰す。

こちらに襲いかかる妖怪は蹴つて往なし、そのデカイだけの団体に牙を立てる。

鮮血が蒼の毛並みに注ぐが気にしない。
そんな理性、悪いが今の俺には無い。

「あと、七人」

口の端を上げて突っ込んでいく。

またたく間に紅の花が咲き、崩れしていく。

一つ、二つ、……そして、最後の一つ。

蒼の光が疾駆する。

と同時に妖怪の体が真っ二つに裂けた。

断末魔に何か言っていたようだが興味無い。

「……は、この程度かよ。所詮はただの雑魚妖怪だったってわけか
せ、聖獸様が……我々を助けてくださった！　ああ、聖獸様！」

ちらと振り返つてみると、生き残つていた里の人間が涙しながらこ
ちらで平伏していた。

両手を合わせ何度も何度も挙む者、ただただ平伏して頭を垂れてい
る者。

ただ、中には怯えたような表情でこちらを見ている者の姿も見受け
られた。

そんな中から、一人の少女がこちらに向かつて歩いてきた。
黒い瞳が、喜びもせず、怯えもせずにまっすぐ見据えてくる。

「……聖獸様」

「どうした、嬉しくないのか？　未来が変わったんだぞ？　さては
お前、俺の強さに恐れを成したか？」

「いえ、全然」

「ああ？　なんだそりや……って」

何故か、志星は蒼狼の田の前まで来てからと一ツ口つと微笑んだ。

「何でお前笑つてんだ？」

「ふふふ。だって、貴方はやつぱり、私の思つた通りの聖獸様だつたから」

「どういう意味だよ、それ」

「ああ、どういう意味でしょ、うへー」

「……強かな小娘だな」

血塗れな自分を前に微笑む志星を見て、ふと蒼狼はこんな考えが浮かんだ。

もしかしたら、この小娘はこうなる未来を見たのではないか、と。わざと結界石の綻びに気づかせ、そして襲撃と同時に蒼狼を焼き付け里の妖怪を攻撃させたのではないか。

「んなわけないか。…………ってか、それだと俺がこの小娘の手の上で踊らされていたつてことになるんじゃねえか？」

蒼狼はもう一度志星の顔を見つめる。

すると志星は先刻同様に微笑みながら、何の遠慮も無しに蒼狼に抱きついていた。

「んー、もふもふして気持ちいい」

「……末恐ろしい小娘だなオイ」

その後ろで里の人間が顔を引きつらせながらわなわなと体を震わせていたが、蒼狼も少女も、特に気にはしなかった。

第三十話 < 欲喜と、畏怖と > (後書き)

どうしていいか……知らず知らずの内にシンデレキャラ(?)が出来上がっているんだろう? w

とはいって、蒼狼はシンデレってわけじゃないんですけど：

それにしても、俺の書くオリキャラって、キャラが薄いですね…

他人たちの書いてるような impact! が足りない気がします
(なぜ英語にしたし

そういうえば、幻想入り系のお話は考えたことないんだつけ
気が向いたらプロット書いつかなかなあ……?

第三十一話 ＜ 蒼の巫女 ＞

妖怪の襲撃から里を守つてから十数年の月日が流れた。

あの日から里は平穏な日常を取り戻し、前よりも人口も増え里も少しずつ大きくなつていった。

もちろん蒼狼の社も健在だ。

「……だがよ、どうしてお前が巫女になるんだよ？」

眼下の社の縁側で佇む一人の女性に向かつて蒼狼がつぶやく。
精悍で凜とした顔立ちに、漆のように艶やかな黒髪。
大人びた容姿なのに、澄んだ黒の瞳は無邪気な子供のような好奇心
に溢れていた。

「あの一件で、私が聖獣様に一番近い存在だと思われたからよ。私は
としては、すごく光栄だと思っているわ」

「何が蒼狼信仰だ。結局本当に守り神になつてゐるじゃねえか」

襲撃から里を守つた聖なる狼。

その日からしばらく社に参拝客が押し掛けて大騒ぎしていた。
煩過ぎて結局その日は一睡も出来なかつたのを未だに覚えている。

「いいじゃないですか。貴方だって、満更でもないんでしょう?」「
「やれやれ……。しかも、こんな女が子持ちだつていうのも信じら
れん」

その女性のすぐ傍には、十代くらいと思われる少年と少女が小さな
寝息を立てて眠っていた。

少年は母親同様黒髪だが、何故か少女は銀色に煌めいている。

「ふふふ。巫女の私が結婚してどんな気持ちだつた？」

「三日で離婚するんじゃねえかと思つてた」

「あらあら、それは残念でした」

「……名前、何て言つんだつけか」

「自分の巫女の子どもの名前ぐらい覚えてほしいわね。千花と、凜

「」

双子の頭を撫でながら、母親はフツと笑みを漏らした。

「どうしたんだ？」

「こうして普通に子供の話をしてるつてのが可笑しくって。貴方は聖獣で、私はただの人間でしょつ？」

「よく言つ。お前自分の子供に俺を説明する時、『ナツカイわんこだから大丈夫よ』なんてほざきやがるから鬱陶しくて敵わなかつたぞ」

「そういえば、そんなコト言つたつけ。あつはは」

あっけらかんと笑うその顔に蒼狼は嘆息した。

こいつ、本当に俺を聖獣だと思っているのだろうか。

他の奴から感じるような信仰つてのとは、ちょっと違つような気がするが。

崇拜といつよりは、気を許した友と語りつていふ、そんな感じがする。

「……あれから襲撃も無くて平和よね。これも貴方様のお力かしら？」

「あの一件で里の結界を造り直したんだつが。外界からは普通の人間じや目視できないようになつてるんだろ」

「そうね。でも、私はもう結界なんて無くてもいいと思つただけど

な

「……そりゃまだどうして？」

「もつといろんな人に出会いたいじゃない。知ってる？ 風の噂で聞いたんだけど、東の方にも人里があるらしいわよ？」

「そりや昔つからある里だつていつんじゃねえか。ここは結界だって、元はあつちの巫女から教わったヤツだつて説明したろ？」

「わへ、夢のない聖獣様だと？」

「……お前はもうちよい歳を考えろよ」

もう一十歳を過ぎてから三十五歳だつてのに、まるで子供みたいにこと言こやがる。

よく結婚できたなお前。

「う、ううん……」

すると、母親の膝下で寝ていた少女が目を覚ました。

「あら、凛。もつ起きたの？」

「うん……。空に、ピンク色の、膝と……あー…」

「どんな夢見てたんだコイツつてふわあー！？」

凛は寝ぼけ眼をゴシゴシ擦つてつると背伸びすると、目の前の蒼狼の首根っこに飛びついてきた。

「わあー！ 蒼狼さまだあ！」

「！」、「じりあー！？」 気安く触るなつてこつも言つてんだらうがー！？」

「うん、もふもふ」

「聞けえええええええええー！」

銀の髪をじにじぞどばかりに擦りつけてくる凛を体全体を震わせて落

とすと、蒼狼はもう一度大きく嘆息した。

「つたぐ。お前の子供ってのは躊がなつてねえ。勝手に触るなつて、俺が何回言つたと思つてんだ」

「ん、確か西と三井が回かい？」

「かくは三十六回がはじまる」

「そんな数覚えてる?」あるなりちゃんが戻ってきた。「

「……あんだよ」

ぐいぐい毛を引っ張られて、否が応でも振り向いてしまう。凛は天真爛漫な笑顔を作つてからずいと右手の平を伸ばし高らかに叫んだ。

「御用」

「だから犬じやねえって言つてんだろ？があああああ！？」

本気でめんどくさいガキだ。

この「久松の儀」とのモダニズムは、

凛はすいぶんと楽しそうに叫びながら境内の中を走り回っていた。やがてぐるりと回つてから母親の下へと駆け寄ると、傍でまだ寝て

いた千花をたくがく描ひだした

「兄様！ 兄様！ 早く起きて遊ぼうよ！」
「はえ？」
「あう、り、凛。苦しいんだけど……」

少女の力とは思えないような力でブンブン揺さぶられていた千花は
だんだんと顔が青ざめ始める。

そんなことはお構いなしに千花の襟を掴むと、里の方へと走っていつてしまつた。

「……すいぶんと難儀な兄貴」

「生まれたのは凜が先なんだけどね。兄様兄様つてずっと呼んでるのよ」

「おかしな兄妹だな^{ふたご}」

「でも、子供が笑つてるのは安心するわね。ホントに平和を感じる」「俺はどうでもいいけどさ」

トン、と蹴つて崖の上へと上る。

別にコイツと話をしてもいいのだが、一応守り神になつちまつたんだ。

仕事はむやんとこなせなくてはならない。

「こつもありがと、聖獣様」

「へいへい。お前もむつとと行けよ志星」

「貴方が帰つてきたら帰るわ」

「……そうかい」

そして蒼狼は首をぐるりと回してから里の外周へ向かつて飛び出した。

妖怪が里に近づいていいかどうか、見回りをするために。

「我ながら、すいぶんとフレンドリーになつちまつたな」

そつ白嘲氣味に眩いた横顔は、微かに微笑んでいたように見えた。

・ · ·

「靈夢、貴女知つてる?」

「西の方にある、蒼狼の里のことかしら」

東の果てにある博麗神社。

その境内で紫紺の瞳の少女が深刻そうな表情で巫女と会話を交わしていた。

「そうよ。貴女が結界を施したあの里。なら当然、里の守り神も知つてるわよね？」

「ええ、もちろん。自称人間嫌いの蒼い狼でしょう。それがどうかしたの？」

「蒼狼はその身に危険な力を持っている。今のアイツは気づいていないみたいだけど、いずれこの幻想郷を齋かす存在となり得るわ」

すると、まっすぐ伸びた黒髪を揺らしながら博麗神社の巫女は笑つた。

「気づいていないのならいいじゃない。放つておけば何も起きないわよ」

「……貴女はもう少し危機感を持ちなさい。もしもあの里を飛びだして暴れまわつたらどうするのよ。この素敵な幻想郷を野獣に蹂躪されるなんて私は嫌よ」

「大袈裟なのよ紫は。それに私だけちやんと考えてあるわよ。あの結界はかなり特殊なものだし」

「貴女が動かないのなら、私が一人でやるからいいわ」

紫は鳥居の前の空間を切り裂いて一步踏み込んだ。

やがて裂け目が閉じると、そこに紫の姿はなかつた。

紫が去つた後、巫女は幻想郷を一望できる丘へと歩き、夕日の染まつた世界を見つめた。

黄昏に染まる幻想郷は美しい。

それは、人間だろうと妖怪だろうと、神であろうと同じはず。

「……紫は、心配性で怖がりなだけよ。蒼狼はよつぱりのじじゅや
ないかぎり怒つたりしないのに。もし、彼が激昂するようなことが
あるとしたらそれは」

再び里が震え、愛する人を失った時……だけだ。

第三十一話 ＜ 蒼の巫女 ＞（後書き）

志星は千花のお姉さんでした、と。
身も蓋もねえなあ……；

今作、いろいろと中途半端な作品になりそうで申し訳ないです；
それでも、面白い作品になるようこれからは作業を頑張り、完結までノンストップでいきたいと思います

つうん、ダンボール戦機（アニメ版）の○△は何かイイ

第三十一話 『虚空の傍観者』

「兄様！ のんびりしてないで早く行こつよ
「ち、ちょっと待って。まだ鼻緒を結んでないから」

蒼狼の里では半年に一回の周期で小さな祭りが行われている。
社から続く一本道がお祭りの屋台と提灯の明かりに照らされて里中の人たちが大騒ぎする。

「俺は騒がしいの嫌いなんだけど」

蒼狼は姿を消しつつ眼下の様子をつかがつ。
別に姿を見られても構わないと言えば構わないのだが、余計に騒がれるのだけは御免エイム被りたい。

「相変わらずガキどもは元気だねえ……」

千花と凜が仲良く手を繋ぎながら……、いや、どうかって言いつて
凜が千花を引っ張り回してるように見える。
二人はそのまま人混みをかいくぐつて社へとまっすぐ走つてくる。
ちょうど社の中心に志星の姿も見えた。
巫女だから何か役割があるんだろう。
俺はほとんど寝て過ごしているから覚えていないが。

「……？」

下が賑わっているといつのに、微かに感じた無粋な影に蒼狼は眉根を寄せた。
結界の近くに誰かいる。

誰かがこちらの様子を覗いているような、嫌な視線だ。ただ気配は一瞬だけで、すぐに視線は感じなくなつた。

「消えた、か。……ん？」

ふと社の方に目を向けてみると、志星がちよいじょいと手を振つていた。

何か用なのだろうか。

ただでさえ喧しくて氣分が悪いのに、いったい何の用だろうか。人混みから少し離れた茂みの中へと向かうと、志星がちゃんと立つていた。

「何だよ。何か用か？」

「ん、ちょっとお話がしたくてさ」

「話だあ……？」

俺は何も話すことなどないぞ。

それに、別に今日じゃなくたつていいだらう。

「これからね、ちょっと人に会いに行かなきゃならなーこの」「んな時間にか。……って、まさかガキのお守りでもさせようつつか？」

「察しが良いわね。その通り」

「……聖獣を何だと思つてやがる」

「あら、聖獣としての自覚あるんだ？」

「ひとにめんじくさい巫女だよなあ……お前」

わつわととんずらすればよかつたか。

志星はクスクス笑いながら突然蒼狼の頭をぽふぽふ叩きだした。

「……おー

「いいじゃない。減る物じゃなし」

と、志星の手が止まる。

蒼狼が顔を上げると、何故か志星の表情が暗かつた。
暗がりで話しているせいか、とも思つたがどうやら違つ。
微かに瞳が震えている。

「……どうかしたのか」

「ううん。何でもない。それじゃ、行つてくるから」

志星は踵を返すとどこかへと走り出してしまつた。

蒼い巫女服の背中を見つめながら、蒼狼は首を傾げていた。

「……あんな顔、久々に見たような気もするが。ま、いいか」

面倒だが千花と凜のお守りをしなくては。

……とはいへ、遠目で眺めている程度だが。

・ · ·

蒼狼に言伝を済ませると、志星は里の外れにある結界石の下へと向かつていた。

「懐かしいな……」

ずっと前に蒼狼と一緒に調査したあの結界石は見事に修繕され、ひび割れは完全に無くなつてゐるし、注連縄もしつかりと結び直されている。

あれからも、十年以上も経つのか。

月田といつものは駆け足で過ぎていぐ。

それは、人にとってもそうであるし、妖怪や神とて同じことなんじやないかと志星は思う。

「覗きが趣味なんて、ちょっと変わった妖怪なのね」

志星は背中に感じていた気配に向かつて話しかける。

振り返ると、紫紺の瞳の少女が立っていた。

少女は軽く目を見開いて志星をジッと見据えた。

「ジッして私がここにいるとわかったの？」

「夢で見たから。それから、貴女の悪だくみを未然に防げりと思つて」

「……悪だくみ？」

紫紺の瞳がキッと鋭く細くなる。

志星の言葉を不服だと言わんばかりに顔を歪めた。

「貴女、ここを襲撃しようとしているでしょ？　お願いだから、止めてほしこの」

「……まさか、それだけで止められると思つてこるの。ここの中の巫女はとんだ阿呆ね」

「やつぱり……ダメなんだ」

志星は結界石にもたれ掛かるよつにして座った。
首を微かに上げて夜空を見上げる。

「うん。ダメだってわかつてた。今回ばかりは、ジッショウもない」

「何の話かしら。意味が分からぬのだけど」

「……夢で見た話。この里ね、もうすぐ滅んじやうの」

「それは、私が襲撃するから?」

「違うよ」

志星は即答した。

少女の方に視線を移すと、紫紺の瞳に志星の姿が映り込む。

「……聖獣様がね。」の里を滅ぼしてしまったの。貴女も、その被害者になるのかな」

「私があの野獸に負けるとでも? お笑いね。見くびらないでほしいわ」

「だから、お願ひがあるの」

「……お願ひ?」

紫紺の瞳がさらに細まる。

言葉の意図が分からない。

この巫女はいったい何を考えているのだらう。

「……聖獣様を、倒してほしい。とっても強い人に頼んで、封印してほしい」

「どうしてそれを貴女が望むの。貴女、あの蒼狼の巫女でしょう」「巫女だから。私が蒼の巫女だから頼んでいるの。夢で見た世界は、それはそれはひどいものだったのよ。たくさんの人と、妖怪が血に塗れていく。その牙と、爪と、力で消し去ってしまうの。」の、時遅れの結界すら断つてしまふような

「時遅れの結界……?」

そんな結界、初めて聞いた。

靈夢の言っていた特殊な結界とはこのことだったのだらうか。

「」の里と、外界とでは時間の流れが違うんですって。」の一年

が、外では一日にも満たないような短い時間なんですって。私もそれを見た時、驚いたけど

「見た……ですって？」

「言つたでしよう。私は夢を見るの。過去現在未来。ありとあらゆる夢。けつこう嫌な能力なの」

「…………」

志星の頬に涙が伝う。

黒の瞳が揺らぎながら少女を見据えた。

「ね、だから、お願ひだからこの里を放つておいてほしいの。聖獣様は、何もないよ。貴女の思つてるような、悪い獣じやないの。とても優しい、私たちの守り神で、大切な友達なのよ」

「……言いたいことはそれだけね」

「……臆病者」

紫紺の少女が微かに笑う。

「何とでも言いなさい。私は、この幻想郷を守るだけよ」

そう言つて、少女が振り返るとその姿がかき消えた。

一人残された志星はごじごし涙を拭いてからもう一度夜空を見上げた。

第三十一話 < 虚空の傍観者 > (後書き)

もう修正が効かないレベルだ……；

今作は恐らくこのままグダグダ進んでいくと思います；

マジでヤバい。

今すぐにでもリセットしたいレベルだな(つや

第三十二話 ＜崩壊の足音＞

「兄様！ アレやつてアレ！」

千花をずるずる引きずりながら凛が指を指したのは射的の屋台だった。

屋台の奥には大小様々な景品が並んでいて、手前の台上にコルク栓を弾とする子供には少し大きめな銃が置いてある。

「兄様は得意でしょ？ よくぱちんとか当てるもんね
「ううん。でも、それとこれはあんまし関係ないと思つんだけ
ど……」

凛に促されるままに銃を取つて射田を睨つて照準を合わせる。
小さなお菓子の箱やぬいぐるみ、何故かきゅうりとかナスまで景品
の中に並んでる。

とりあえず、千花は一番手前のお菓子を狙つて引き金を引いた。
ポンッと間抜けな音がしてコルク栓が飛んでいくと、お菓子の箱が
コテンとあつさり倒れてしまった。

「やつた！ 兄様大当たり！」

「まあ、あんなに小さい的ぐらになら誰でもできるよ」

それから千花は狙う的大きさを少しずつ大きい物に変えて命中させていく。

もらつたコルク栓の弾全てを綺麗に命中させ、店主の度肝を抜いてやつた。

「さすが兄様！ 百発百中だね！」

「毎日練習してゐからこねぐらにはね」

千花は志星の教えで毎日『』の稽古をしてゐる。それは千花自身の護身のためと、精神を鍛えるためだと志星が言つていた。

その腕は一級品。

しかし蒼狼はその能力のタネを知つてゐる。

「アーッ、志星の血のせいか妙な力を持つてゐるんだよな」

微弱、本当に弱過ぎて普通の人間や妖怪じや感じ取れないようなほどの弱さだが、千花は微かな能力を秘めている。

恐らく『狙いを外さない程度の能力』

千花が意識した場所にその攻撃が必ず命中するといったものだ。

例えば、川面に映る魚影に小石を投げれば素早い魚影と言えど必ず命中する。

一度狙つてしまえば、もちろん回避することは出来ない。

「……ま、今のまんまじや時々外すんだよな

一度稽古してるとこ見物したことがあるが、まだはつきりとコントロールしてる様子はない。

時々的の奥の壁に矢が突き刺さつたりしたこともあつた。とはいえ素質はある。

能力のコントロールさえ出来てしまえば、数日でマスターするだろう。

「じゃあじゃあ！ 次は次は……あッ！」

千花の手を引こうとしたその矢先、凛は行き交う人にぶつかって派

手に転んでしまった。

泣くな。

こりや泣くぞ。すぐ泣くぞ。ほら泣くぞ。

蒼狼の予想通り、凛は滝のような涙を流しながら泣きだした。

「ふ、ふええん！　い、痛い！　痛いよおう！」

「もひ、前見て歩かないとダメだらう？」

人混みのど真ん中でしゃがみ込んでしまった凛に、千花がそっと手を差し伸べる。

いつもながら優しい兄貴だ。

……本当は弟なんだが。

「あー、というか早く終わんねえのかよ」の祭り。眠いわだるいで散々なんだが……？」

まだだ。

誰かの視線を感じる。

しかも、今度は一人じゃない。複数だ。

蒼狼は首を回して里を一望する。

結界に綻びは感じない。

だが全身に、いや、里全体を監視するような視線を蒼狼は感じた。

「なんだよ……？　結界は機能してる。外から見えないはずのこの里をどうして見てやがる……？」

ただの勘違いか。

それにしても妖気の量がけた違のだ。

大妖怪とか呼ばれるような代物が外でごろごろしてる。

今すぐにでも、この里を消せるぐらいの力を持った奴ら。

眼下で幸せそうに笑う人々。

そして千花と凜。

……そういえば、志星は何処だ。

誰かに会う約束があるとか言っていたような気もするが、この里の人間はほとんど社に集結しているというのに、いつたい誰に会つのだろうか。

崖から見下ろして里を見回すが姿は見当たらない。

「……俺が行くしかないか？」

それとも志星を探したほうがいいのだろうか。

志星に住人を避難させ、その隙に自分が妖怪を引き付ければ被害を抑えられるかもしれない。

とにかく、志星を探そう。

蒼狼が腰を上げた瞬間、重々しい咆哮が耳に届いた。

「…………ツ！？」

突然響いた咆哮に、住人がその場で動きを止め顔を見合わせる。

「おい、今の声なんだ……」

「聖獸様……か？」

「いや、聖獸様は狼だからこりうつ風に吠えないんじゃ……」「じ、じやあまさか……！」

千花と凜が里を振り返った瞬間、突然里の方から火柱が上がった。それは天までも焦がせそつなほどに高く、それは狼煙のようにも思えた。

「う、うわあああああああ！？　さ、里が！？」

「火事！？　いや、でもみんなここにいるのにどうして！？」

「妖怪だ！　妖怪がいるぞ！？」

誰かが叫んだ瞬間、その場にいた全員がざよめぐ。
結界に守られているはずなのに、なぜ妖怪の襲撃が？
予想外の出来事に、ある者は混乱し、ある者は泣き叫ぶ。
それはまさに阿鼻叫喚の光景。

四方八方へと逃げ惑う人々。

「チッ、人間つてのはこれだから……！　仕方ない」

崖から一気に下りると、住人達にその蒼き姿を晒して叫んだ。

「落ち着けてめえら！」

「あ、蒼い狼……！？」

「せ、聖獸様だ！」

視線が一気に集中し、どつと押し寄せてくる人間を一喝すると右に左に視線を動かして志星を探す。

……が、見当たらない。

もう一度舌打ちすると、蒼狼はその首で社裏手の祠を示し、

「てめえら！　可能な限り下がれ！　この境内はある程度なら結界
が張られてる。なるべく奥へすっ込んでろ！　いいな！」

それだけ叫ぶと、蒼狼は鳥居をくぐって里の方へ向かう。
途中、志星の姿をやつと見つけた。

「おい志星。妖怪の襲撃だ。住人を守つてろ」

「ええ。わかりました。……聖獸様」

「なんだ」

「……結界を重ねがけしたら私も援護に向かいいます。それまで、どうか気をつけて」

「へッ、人間の援護なんかいらねえよ。俺一人で十分だ。……早く行け」

志星が境内へと走つていく様を見送ると、自分を奮い立たせるように一度大きく遠吠えする。

首と手足を軽く振つて調子を確認する。

……そういえば最近戦つたような覚えがない。

平和ボケってヤツか。

「守り神らしく、守つてやるひじやねえか」

勢いよく地を蹴つて突進すると、目の前の巨躯に向かつて牙を立てた。

第三十二話 <崩壊の足音>（後編）

そろそろ本気で恋愛モノが座り直っていますw
あとでタグをいじつてね!ひ。ひ。

そういえば、空想夢の方で感想を頂きました。
未だにちょいちょいアクセス数があるんですね。
書き終えた作品でも、感想もらえると嬉しいです。

第三十四話 < 蒼から赫 > (前書き)

今回、少しひの注意

第三十四話 ＜ 蒼から赫 ＞

「おおおおおおおおおおおおおおッ！！」

咆哮。

野獸のような荒い咆哮を上げながら蒼狼は目の前に対峙する妖怪に向かつてその牙を、爪を突き立てて引き裂いていく。とはいっても相手したような下級の妖怪ではないためそれも容易にはいかなかつた。

最初の一匹を仕留めた蒼狼は次いで飛びかかった妖怪にあっさりと体を掴まれてしまった。

「が！？」

「はッ、聖獸つてのはこの程度かよ。ただのデカイ犬なだけじゃねえか！」

そのまま無粧な力で投げられ蒼狼は壁に激突。衝撃で肺から空気が漏れ、一瞬息が止まる。

「……チイツ、一筋縄じやいかねえな。しかも」

今しがた蒼狼を放り投げた妖怪の後ろに、さらに巨大な妖怪が二人構えている。

一人ならともかく、複数相手は本当に骨が折れそうだ。姿勢を低く保ち威嚇していると、突然目の前の前の妖怪の体に青い光の繩が絡んだ。

「な、なんだ！？」

「志星か！」

「加勢するわ。聖獣様」

こんな状況だというのに、志星は小さな札を握りしめながらワインクして見せた。

「超余裕ってことか。相変わらず恐ろしい小娘」

「背中、空いてる?」

「今回だけだぞ」

志星を背中に乗せると、懐かしい感触が背中に伝わる。そして素直に言つた。

「……重くなつたな」

「あれから何年経つて私がいくつになつたか知つてるでしょ?」

「人間の歳なんか興味無いっての」

軽口を叩きながら走り出すと、一人で妖怪の中へと飛びこんでいく。志星が術で妖怪の動きを拘束し、止まつている間に蒼狼が仕留める。巫女と守り神の見事なコンビネーション。

戦意が高揚していく蒼狼に対し、志星は微かに眉根を寄せて妖怪を見据えていた。

「どうした、志星。ボケつとしてるんじゃねえよ

「……妖怪の数が少ない」

「ああ? だから何だつて……ツ! ?」

嫌な予感が頭を過ぎり社を振りむいて戦慄した。
社を守つて いるはずの結界が消えている……！

「……ツ、やけんなボケがああツ……！」

襲いかかる妖怪を力ずくで吹き飛ばし社へ向かつて走り出す。

間に合え、間に合え。

心の中で住人の無事を祈る声が響く。

「…………もう、間に合わない」

「黙つてろッ！ 阿呆！」

階段を一気に跳んで境内へ着地、と同時に右足に生温かい感触が伝わつた。

「…………」

「…………」

何かの、肉だ。

血まみれになつて転がつた何かの、肉。

何か、なんて言う必要もないのに、それを認めようとする心が拒む。だが、目の前の光景を視認してしまつた瞬間、否が応でもそれを理解してしまう。

「ぎやああああああああああああああ！」

人の断末魔が、目の前で反響する。

巨大な人型の妖怪が両手で、布でも引き裂くかのように人を裂いていた。

絶叫と、血と、肉が四散して蒼狼の足にかかる。温い、いや、散つたばかりの血肉は熱かつた。

「…………ぞけんな」

「…………」

牙を噛みしめる。

強く、強く、体全体までもが軋むぐらに強く噛みしめる。

蒼い毛並みが輝く。

閃光にも思える鋭い光が全身を包みこむと、蒼狼が蒼白く光り輝きだした。

卷之二

張り裂けんばかりの咆哮。

地を、空を、そこに存在する森羅万象全てを震わせるような咆哮が
社を包みこむ。

「ツ！？」

志星の田の前の世界が一瞬、真っ白になつた。
眩し過ぎて直視出来ないその光に包まれると、体が焼けるように熱
くなつた。

いや違う。

本当に志星の体が焼けていた。

全身に襲いかかる激しい熱に顔をしかめ叫ぼうとした瞬間、世界が色を取り戻した。

そして目の前の妖怪が跡形も無く、消え去っていた。

「これほどまでに強い力なの……………！？」

「才子、志星」

普段の声とは違つ、低く、唸るような声に呼ばれ志星は思わず体を硬直させた。

蒼狼はしゃがんで志星を滑り落とすと里の方へと体を向ける。

「…………」「

「せ、聖獸様…………？」

「ソコニイロ。スグニモドル」

「ま、待つて！ な、何をする気なのー？」

「…………」

「答えてー！」

それでも蒼狼は振り返らない。

燃え盛る里を睨み続けて、やがてその姿が震んで消え失せた。

「…………違つ」

志星はその場にうずくまり、呟いた。

私の見た夢と、違う光景。

今日の前で広がる炎は同じなのに、こんなにも違う景色が目に映つている。

これは、一体どうしたこと？

「まだ気づかない？ 蒼の巫女」

「…………八雲、紫」

いつ現れたのか、志星の背後に紫が立っていた。
紫紺の瞳が志星を見据える。

「ついに壊れてしまった。人といつコマッターレを田の前で壊され、怒りに身を任せて暴走する…………」

「どういつ……意味……？」

里から悲鳴と咆哮が混じったよつた恐ろしい声が聞こえてくる。

里の方で、蒼い光が縦横無尽に舞っている。

舞うたび、赤い血飛沫がほとばしって里を染めていく。

赤く、赤く、赤く。

蒼狼の毛並みも、だんだんと赤に染まっていく。

その姿を、もはや聖獸とは呼べない。

深紅の悪魔か、邪神だ。

「優しい獣ほど、激昂した時の怒りは凄まじいわ。自分の身を守らうとすれば尚強く、大切な人を守るうとすれば更に強く、怒りの度合いは増していく。それこそ、自分では制御できないほどに」「じゃあ、もう元には戻らないの……？」

「さあ、それは私の預かり知らぬ話」

「そんな……」

「『』自慢の夢でも見たらどうかしら？ 貴女にひとつ都合の良い素敵な夢をね」

「……幻想郷の賢者が訊いて呆れます」

「何とでも言いなさいな。私は、この幻想郷を愛しているの。穢そうとするものなら容赦はしないわ」

そして紫は口傘を開いて、すき間へと消えていった。

ポツンと残される志星。

ふと、あることを思い出してハツと顔を上げた。

「……千花、凛！？」

姿が見えない。

社を見回したが、子供の死体の中に一人の亡骸は見当たらぬ。まだ生きていて、逃げたのか。

それとも……

「千花！ 凜！？ ビリー、ビロのーー？」

我に帰つた志星はすぐさま立ち上がりふらつく足で走り出した。

「無事でいて……一人ともー」

第三十四話 『蒼から赫』（後書き）

もつ恋愛の片鱗すら感じられない過去編；
ひとつからじの展開してこゝのか、自分でモテキモテします。
駄作になつませんよひに……

それと、ひつわびたに紅葉記に感想いただきました。
もつせとそじ見向ともされていなじだらうなと黙つていてた分、すゞ
く嬉しかったです。
ちやんとお返事しなこと一

第三十五話 『憎しみを身に染めて』（前書き）

グロ注意

第三十五話 『憎しみを身に染めて』

憎い。

目の前にいる存在全てが憎い。

「ウウアアアアアアアアアアアツー！」

地を蹴り、里を蹂躪する妖怪を片つ端から潰す。
目に付いた妖怪を、裂く、碎く、屠る。

全身に宿る力が蒼狼の通りに妖怪を消し去ってくれる。

恐怖に慄く妖怪の顔がまた一つ、潰れる。

一つ、一つと周囲に深紅の花弁を撒き散らし、自身を含め赫の世界
に染めていく。

お前らが消した。

お前らが消したんだ。

目の前で、容易く命を消した。

気に入らない。

気に入らない。

俺は、お前達の存在その物が氣に入らない。

「うあ、っく、あああああああー！？」

また一つ赫の華が出来上がる。

別に美しくも何ともない、どうでもいい華だ。

雑草を踏み潰すそれと同じように踏みしめ、牙を立てていく。

目に映る全てが気に入らない。

目に映る全てを、否定していく。

戦慄する妖怪を捉え、淡々と消していく。

何度も牙を立てただろう。

何度も爪で裂いただろ？。

いつしか蒼狼は全身が深紅に染まっていた。

もはや聖獣じやない。

ただの野獸だ。

「ガアアアアアアアアアアッ！！」

地に響き渡る咆哮。

もう何度も叫んだだろ？。

否、どうして叫ぶのだらうか。

どうして妖怪を喰らつていんだらうか。

もつ、どうでもよかつた。

そんなことを考えるのさえ煩わしい。

本能に搖るがされるまま敵を喰らい、喰らい、喰らい続ける。

それは、快感だった。

「ハアッ……ハアッ……」

牙を滴る血が流れ落ち舌につく。
味など分からぬ。

が、それが美味しいだけは分かる。

そうか、食えているのか。

なら話は簡単だ。

「…………」

体を社に向けて歩きだす。

一步、一步。

邪魔な“物体”を消しながらじくじくとした歩調で歩く。

階段を飛び越え境内に立つ。

……社の裏手から匂いがした。

美味そうな匂いだ。

久しく喰らつていかない匂いだ。

「聖獸様あ！」

都合よく社の裏手から香りが漂ってきた。

目の前に現れた銀の髪の少女を見て、笑った。

「だ、大丈夫！？ 聖獸様、ち、血だらけ……！」

一步前に進み鼻先で少女を小突く。

何が楽しいのか、少女は真っ赤に充血した瞳で笑顔を作つて見せた。

「え、えへへ。妖怪がいっぱい来たけど、兄様に守つてもらつたんだ。兄様が弓で」

少女の首を、何の躊躇いも無く喰らつた。

肉は薄く骨身で無駄に歯応え。

しかし、味は格別だつた。

目の前に転がる肉片を綺麗に平らげると、視線を動かし匂いを探る。まだ、社の奥から匂いがする。

「せ、聖獸様……？」

再び目の前の人気が現れる。

今度は弓を抱いた少年。

しかし表情は戦慄に凍りつき、全身を恐怖で震わせていた。

「え……？ 今、凛がこっちに来て聖獸様を見つけたって言って……」

……

「千花、逃げなさいッ！」

割り込んだ声と同じタイミングで少年に襲いかかる。微かに身を動かし回避された、が、少年の片腕を吹き飛ばすことだけは出来た。

「ッ！？ わ、ひぐ、あああああああああーー？」

「千花！？」

蒼い巫女服の女が駆けよりその身を抱く。

少年の右肩から先が消え失せている。

噴水の如く吹きだす鮮血が、少年の死に彩を添える。

「…………」

「…………私も、瞼ひらうのね」

震える双眸が蒼狼を見据える。

決して視線を反らさずに。

「…………」

「もつ、私も分からない？ その力で、貴方の記憶すらも消し去ってしまったの？ ねえ、答えて」

「…………」

何を言つてゐるのか、分からなかつた。

野獣を田の前にしてゐるところの、この女は何故こんな戯言を。

「『激昂を奮^{ぢかく}う程度の能力』。普段は決してその能力が発動するこ^{ちから}とはない能力。しかし、自分の身に危険が及んだり、自分にとつて

大切な人が傷付いたその瞬間、怒りや憎しみ、悲しみ全てが作用し暴走し、ありとあらゆる物を破壊する力になる……。貴方はもう、私たちとの記憶まで壊れてしまつたの？」

「…………

まだ戯言を言い続けている。

何だこの女は。

忌々しい。

さつさと喰らつて黙らせよう。

姿勢を低く構え、女の喉元に狙いを定める。

たかが人間だ。

この爪で裂けば、この牙を立てれば、一瞬で終い。

女はやがて顔を伏せ、かき消えそつなほど小さな声で言った。

「……そう。わかつたわ。好きに、しなさい」

言われるまでもない。

両手を広げ、構える女の喉元に牙を立てた瞬間、女は絞り出すように一言告げた。

「知らない妖怪に喰われるより、愛する友に喰われる方が、よっぽど幸せよ」

境内にまた一つ、赫い華が咲く。

ひとしきり人の味を堪能した蒼狼は、背後から忍び寄る気配に気づき体を向けた。

「……惨い事を。貴様、それでも聖獣なのか」

背と腰に長さの異なる刀を帯刀した初老の男がそこにいた。

薄緑色の羽織りに、傍らに白く透けた物体を浮かべてゐるその男は、
その銀の瞳に赫く染まる蒼狼を映す。

何故か、男の顔が歪んだ。

「……今自分がしていることも理解しておらんようだ。能力の代償にしては、少し高過ぎやしないか」

その眼は何だ。

殺氣も見せず、何故俺に慈愛のような眼を見せる。
俺を、憐れんでいるのか。

気に入らない。

体に力を込めるもう一度低く低く構える。

今殺つた人間と同じように、首を裂けばそれでいい。
脚を開放するように蹴り一直線に男に飛びかかる。
爪で触れた肉の感触、は霞みの如く消え失せ、いつの間にか男は蒼狼が元いた場所に立つていた。

憂いを帯びた銀の瞳が再び蒼狼の姿を舐める。

「可哀想だが、お主を斬る。怨むなら、自分の弱さを恨め

自分の弱さ？

何を言ってやがるこの老害は。

人間の分際でこの俺に説教か。

一度攻撃を避けただけで図に乗るな。

「……来い。儂わしが迷いを断つてしませよ！」

そう言つて、男は腰に帯刀していた短めの刀を抜き、右手だけで構えた。

第三十五話 < 懐しみを身に染めて > (後書き)

お気に入り登録ユーザーが増えました。

現在18人

こんな俺を登録していただき、ありがとうございます。

そして……今更ですが、グローシーンを書くのはドキドキします。
でも、ちょっと安っぽいグロさですよねえ……

と、いつもながら悲観的な後書きばかりですいません；

感想、ご意見等、毎日お待ちしています。

それと、時々活動報告でもお知らせしたりするんで、興味のある方はブックマークなり何なりしてみてくださいな。

海鳴譚は一から調整し直すので、今日からしばらくお休みです。
重ね重ね申し訳ないです；

第三十六話 ＜剣々轟々＞

目の前で構える男を見据え、蒼狼は低く低く構えた。
……構えるだけで、一度も攻撃はしなかつたが。

「どうした、かかつてこんのか」

「…………」

切つ先を微かに揺らして挑発する男を見て、蒼狼は低く唸り声を上げた。

隙がない。

もしかしたら、この男には隙など存在しないのではないだろうか。
そう錯覚させるほどに、男は脇を締め堂々と構えている。
恐らく、男のどこに狙いを定めても軽く往なされてしまつ。
蒼狼はそう確信した。

「来ないのなら……」じゅらから、参りつか

「……ッ！」

刹那、男の瞳が鋭く光ると同時に手にした刃が燐光を纏い一直線に振り下ろす。

刃が煌めくと同時に蹴って右へ回避すると、元いた場所に地面を抉^{えぐ}るような大きな裂傷が出来上がった。

反応がもう少し遅かつたら、確實に御陀仏だった。

追撃を警戒した蒼狼は大きく後退して男と距離を取る。

「距離を取る思慮はあるのか。……いや、それは思慮といつよりかは生存本能か」

「…………」

なんだこの人間は。

いや、こいつは本当に人間なのか。

地面を一瞬で断つた太刀筋は、とてもただの人間とは思えない。妖怪か、あるいはその手の類の神か。

しかし男から微かに感じる気配は、人間のそれと似ている。似ている、というのは、その気配に異質なものを感じ取ったから。

「…………」

男の周囲に浮かぶ白い物を見て蒼狼は感づいた。

あれは……半靈体。

人間と幽霊との混血の証。

しかし、たったそれだけのことでの威力なのだろうか。

「何を勘織つておる。そんな暇があるのなら攻撃してみたらどうだ」「…………ウルサイ！」

男が眉根を微かに上げた。

「ほう……人語を話すか」

男の言葉はここまでで途切れた。

蒼狼が一瞬の隙を捉え襲いかかる、が、案の定男は右手の刀で鮮やかにその牙を受け流した。

しかし、蒼狼はその勢いのまま崖を蹴り、さらに加速させて男の頭上を捉えた。

ついにこの牙と爪とで男を引き裂ける、と思った瞬間、

「…………グツー？」

顔面に柔らかい衝撃が当たり、思わず退いた。

別に傷を負ったわけでもないのだが、その妙な違和感を伴つ衝撃に混乱した。

すると、男はカッカと声高らかに笑った。

「受け流した勢いを更に加速させ、不意を突くその意氣や良し。しかし、この半靈体を視野に捉えなかつたのは失敗だったの」

今男の正面には、ふよふよと半靈体が浮かんでいた。

男が拳を作つてぐいぐい押してみせると、半靈体はクッショーンのようにやんわりとくこんだ。

不可思議な衝撃の正体は半靈体だったのか。まさか実体を伴つているとは気づかなかつた。

水をくらつた犬のようごぶんぶん首を振ると、一度息を整えた。

「では、少し面白い物を見せてやるつかの」

クツクツと笑いをこぼしながら、小さく印を切つて咳く。

「魂符』幽明の苦輪』

すると、ふよふよと漂つていた半靈体がぐにゅりと歪み、人型を模した。

そのままぐにゃぐにゃと形を形成していくと、やがてそれは男そつくつに、いや、そのものが出来上がつた。

「ま、これは女子供の遊びのよつなもんだがの。しかし、遊びの術といえど儂が使えば」

「ツツ……」

言葉の意味を察した蒼狼が高く飛び上がる。

今しがた居た場所に一人が刃を叩きつけ、そしてもう一人は蒼狼の頭上で刀を振り下ろす。

回避が、間に合わない。

鼻先に鈍い衝撃が襲うと天地が逆転し、背中から地面に叩き付けられた。

「これこのように。機敏なお主を捉える事が容易くなる」

「……チイ」

砂と血の混じつた唾液を吐き捨て牙を剥ぐ。

こいつ、遊んでやがる。

今の一撃、峰で打ちやがった。

「何を呆けた顔をしておる。また何か勘繰つておるのか

「……オマエ、ナニガモクテキダ」

「儂の目的か。もちろんお前さんを退治することじやが」

「ソノワリニヤイバガトトイテイナイ。ホンキデヤツテイルノカ」

「本気を出すと、お前さんは一瞬で死んでしまうからのう」

「ナニヲ……ツ！？」

刃に遮られ、言葉を失う。

刹那、男は一蹴りで蒼狼の下へと距離を詰めると蒼狼の喉元に刃を突きつけた。

速過ぎて、眼で捉えることが出来なかつた。

「……ん。しかしこの老体で本気を出すのは骨が折れる。老い先短い人間のことじやないわい」

そして何故か男は突きつけていた刃を引き後ろに跳んだ。
その行動の真意が分からぬ。

本当に、一体何を考えているのか。

「……主、一つ訊きたい」
「ナンダ」

何かを狙つてゐるのか、低く構えて警戒しながら答える。
依然として、切つ先は蒼狼に向かつてゐる。

「主はもう、理性が戻つてゐるな?」

「…………」

答えは、簡単だ。

「……！　くツ！？」

男の体に神速の一撃を見舞つてやる。
予期せぬ攻撃に男は体を曲げて後方へと吹つ飛んでいき、そのまま
壁に激突する。

崩れ落ちたところに追い打ちをかけるため、高く飛び上がり腕に蒼
の光を灯す。

「くう、抜かつたか！　ならばツ」

男が懐から何やら取り出し、こちらに向けて投げつけてくる。
これは、符か。

符は微かな光を放ちながら雨の如く注ぐ。
舐めた真似を。

それぐらいの攻撃が通用するとでも思つてゐるのか。

「ツ、アアアアアアアアーー！」

咆哮だけで符を吹き飛ばし、まっすぐ男へと急降下。後はその喉元を喰らえばそれで終わりだ。

……終わって、欲しかつた。

その舌に、土の無味な味が広がる。

蒼狼の顎あぎは男ではなく地面を抉つていた。

「やれやれ。間一髪じゃつた」

背後から聞こえる男の声。
と同時に走る激痛。

男は蒼狼の背に立つと蒼き毛並みに向けて刃を突き立てた。

鮮血が迸り、全身から力が抜け、意識が揺らぐ。

鞘に刀を收めると同時に、蒼狼は地面にその身を埋めてしまった。

第三十六話 ＜ 剣々轟々 ＞（後書き）

妖夢の師匠なら、妖夢の術符や技を使ってもおかしくない……ハズもつ少ししたら蒼狼の記憶シナリオは終了かな。

さて、元の話の時間軸に戻つたらどんなお話になるのかな? w

第三十七話 ＜ 蒼の魂 ＞

……背中が痛い。

刀で刺されたのだから当たり前。
だが、致命傷ではない。

故に、未だ蒼狼の見る世界には色がある。
ぼやける視線の先で、薄緑色の羽織の男がこちらを見つめている。

「主、泣いておるのか」

「……違うね。これは眼から出る透明な血だよ」

「ほつ……それはそれは。何とも美しい血じゃな。初めて見たわい」

どつかと腰を下ろして胡坐を組むと、蒼狼と同じ田線になつて言った。

この老害、ホント何なんだ。

俺を退治するんじやなかつたのか。

「主の能力のちからこと、聞いた。随分と難儀な能力じゃな」

「…………」

激昂を奮う程度の能力。

これは能力ちからじゃない。

ある種、病に近い物だと思つてゐる。

コントロールしようにも、出来ないのだ。

怒りというものは、自分の意思だけでは完全に發揮されない。

自分が傷つけられたり、誰かが傷ついたり、自分と、もう一つの要因が必要なのだ。

自分にとって大切な誰かが、傷つけられた

自分にとって大切な誰かを、殺された。

自分と、必ず“誰か”という要因が必要な能力。だから蒼狼は、ずっと一人で生きていた。

自分を巻き込まないために。

誰かを巻き込まないために。

だが、実際はこの様だ。

「……アンタ、名前は？」

すると男は、おおやうかと手を打ちながら乗りはじめた。

「儂は魂魄妖忌。（じんぱくようき）眞界にある白玉楼という屋敷で庭師を務めてゐる」

「庭師……？ 護衛か何かの間違いじゃないのか」

すると妖忌は微笑しながら答えた。

「ま、確かに護衛もしどるがの。どのみち儂の役目はもうすぐ孫が継ぐじゃろつて」

「孫がいるのか、アンタ」

「おうおう。自慢の孫じや。何なら写真でも見るか？ 文字通り目に入れても痛くないほどに可愛いんじや、ホレホレ」

「…………いい」

ついやつ今まで命のやり取りをしていたといつのに、孫の話になつた途端顔をデレッデレにしながら勝手に自慢話に花を咲かせ始めた。

「……オイ、いちいち写真を顔に押し付けるな。

近過ぎて見えねえし。

ひとしきり語つて満足したのか、妖忌は写真を懷に収め急に真顔になつた。

「さて、儂はとある人物との約束で主を封じなければならない。だ

「…………」

「何だよ。まだ孫の面々話すの?かよ
確かにまだまだ語りたい」とせよまだあるが
「…………いや、あるのかよ

「…………」

とんだ孫バカジジイだ。
俺こんなのに負けたのか。

スゲー悔しい。

「主、やつから儂以外の物を見据えておるじやんつ
「…………何のことかね

妖忌は何も言わず、顎だけしゃくつて示した。

その先には、片腕を失くして倒れる千花の亡骸が転がっていた。

「あの子供だけ原型を留めておるの?。そしてお主、自身の妖力を
使ってアレを助けようとしておるな」

「おいおい。もう死んでる人間をビツやつて助けるってんだ? 無
茶言わないでくれ

「本当に、死んでおればの?」

「…………」

妖忌はよつこいしょとか漏らしながら立ち上がり、千花の亡骸の
そばへしゃがみ込んで胸に手を当てた。

「…………微かじやが、本当に微かじやがまだ生きておる
「手遅れだ。妖力注いだつて何も変わらねえよ
「ならば、お主を注いだらビツやつ」

「…………」

蒼狼は答えない。

答えを知っているというか、何となく予想がついているから。

「……少なくとも、人間じゃなくなる。半人半妖つてとか。千花の記憶も何もかも吹っ飛んじまうだらうけど」

「命は、助かるんじやろう?」

「……多分な」

ちつぽけな憶測の話だ。

「試す価値はあるじやねん。やってみい」「簡単に言つよな……。さつきの傷、かなり痛いんだぞ」「それだけ、お主が迷つていたところ」とじや

妖忌は腰に帯刀している刀を抜くと蒼狼に示した。

「名を『白樓剣』^{はくろうけん}。斬られた者の迷いを断つ剣。斬られた者の迷いが強ければ強いほど、その痛みも重かろう」

「……迷い、ね」

俺は何を迷つっていたのだろうか。

思い出せないということは、その迷いを断たれたということだろうか。

「……アンタ、俺を退治しなくていいのか」「退治ならもうとつくに終わつておる」「は? 何を言つてんだ。俺はまだ生きて」「悪しき聖獸はもついない。ここにいるのはただの蒼い狼じやよ」「……そうかい」「

傷付いた体を起こし、ゆっくりと千花の傍へと向かう。目を閉じ、意識を集中させて蒼い光を作る。

これは、俺の光。

蒼狼という力。

「いつ爆発するかわからねえ危険な代物だが、それで命を救えるのなら……な」

妖忌はその光景を静かに見守っていた。光が千花の体へと吸い込まれ、蒼き聖獣の姿が霞んでいく。とても穏やかな瞳だった。

「なあ、アンタ」

「ん？」

「残つた俺自身を、太刀にしてくれないか」

「……ふむ、よからう」

「ホントか？ そんなこと出来るわけないとダメもとで言つたんだがね」

「刀の鍛冶も心得ておる」

「恐ろしい爺さんだ」

苦笑を浮かべ、残つたわずかな光を妖忌へ託すと、その姿がさらりと薄くなつていく。

「……必要のない忠告とは思つが」

「……何だ」

「少年が目覚め、行く当てが無いのなら白玉楼へと向かうがいい。恐らく儂の孫が助けてくれるじゃろつて」

「見ず知らずな俺でもか？」

「正義感の強い孫じやからな」

「……俺が覚えてたら行ってみるよ。……じゃあな

その言葉を最期に、蒼狼の姿は消え失せてしまった。

「さて、儂も行くかの」

蒼い光を手にしたまま微笑むと、妖忌は腰を上げて里を後にした。

第三十七話 ＜ 蒼の魂 ＞（後書き）

ちょい長めの過去終わり！

んでもって次から時間軸を元に戻します。

チルノ書きたい天子書きたい；

けど、これ書き終わってからじやないと……

第三十八話 ＜仲違い＞

「……これが、蒼狼伝承の全てよ」

「……」

文は手帳を握りしめたまま口を開いた。悲しいことがあるだろうか。

自分が大好きな人を守りたいはずなのに、その意思とは裏腹に殺してしまつただなんて。

「おかしいです、紫さん」

「……」

文は紫を見みつけながら言った。

「別に、彼は何も悪くないじゃないですか！ それなのに無理やり封印してしまうですって！？ 身勝手が過ぎませんか？」

「これも、幻想郷を守るため……よ。どんな小さな脅威も放つておけないわ」

二つに分かたれた千花と蒼狼を見つめながら紫は言った。

蒼狼の体がピク、と微かに動いた。

「……スキマ妖怪」

「起きていたの、野獸^{けだもの}」

「俺は……消されるわけにはいかねえ。まだ、まだ罪滅ぼしが出来ちゃいねえんだよ」

「自身の消失が、一番の罪滅ぼしとは思わないの？」

「それだって、考えたさ。だけど、それじゃ千花を助けた意味がな

い

首を動かし、穏やか蒼の瞳で千花の姿を見つめる。

「……俺の罪滅ぼしさ、千花を死なせないことだ。激昂を奮う能力は確かにこいつの内に眠っている。てめえの言ひとおり爆発する可能性だつてある。そういうために、俺がこいつと一緒にいるんだ」

「……

紫紺の瞳は鋭く細めたまま何も言わない。

そつと右手を構え一人に向ける。

「それでも、僅かでも、可能性があるのなら

「……ツ！？」

紫の手の平から光弾が生じ放たれる。

身動きの出来ない蒼狼と意識を失っている千花。

その一人の目に前に、突如桃色の花弁が舞い上がり紫の弾幕と相殺して消えた。

予想外の出来事に、蒼狼も紫も、思わず体を強ばらせ身構える。

「ダメよ、紫つたら。おいたはいけません」

緊張感など微塵も感じさせないような声が響くと、紫が振り向き驚愕の表情を浮かべた。

田の前にいる、親しき友の姿。

「ゆ……幽々子！？ どうして、ここ……」

「藍にね、紫はどこに行つたの～？ って訊いたの。そうしたらこ

「だつて教えてくれたの」「……」

月に照らされた幽々子の微笑みに紫は微かな恐怖を抱いた。まさか、幽々子がそんな大胆な事をするなどとは夢にも思わなかつた。

「……幽々子、貴女には関係のない話よ。今すぐ立ち去つて」「関係あるわ」

澄んだ声が響くと、幽々子の表情が途端険しくなつた。怒り、にも似た表情で紫を見つめ言つた。

「彼は、白玉楼の使用人。そして使用人の責任は私の責任よ」「何を我儘なことを！」「冗談でも何でもない、本当に危険な存在で……。今の話を聞いていたのなら分かるでしょう！？」

「ええ、よく分かりますとも。彼が、本当はとっても優しいってことだ」「……」

紫が歯噛みするその後ろで、蒼狼はその言葉に体を真っ赤にさせられた。

あれが妖忌の守る白玉楼のお嬢様か。

千花の眼で見た時は、のほほんとした世間知らずのお嬢様なのかと思つたが、意外と強かな面もあるらしい。

でも、確かこの二人は親友だつたはずでは……？

幽々子はゆつたりとした歩みで紫を素通りし、千花と蒼狼の前で紫と向き直つた。

「紫、今回だけは私も退かないわ。だつて、私も貴女と同じ気持ち

ですもの

「同じ……？」

文がその言葉に気づき紫に視線を移す。

紫紺の瞳が悔しそうに歪み、そのまま幽々子を見つめ返している。

紫のこんな姿を見るのは初めてだ。

思わず無心でカメラを構え……て、止めた。

さすがにそれぐらいの空気を読む常識は嗜んでいる。

「貴女、私を守りたいのよね。私を危険な目に遭わせたくないから、いつやつて千花さんを封印しようとしてるのでしきつ?」「……違つわ。これは、幻想郷を守るためで」

「紫なら、幻想郷を守るためになら躊躇しないじやない」

「それは……」

紫が数歩後ずさつて目を伏せる。

口げんかに負けそうな子供みたいな姿だった。

「…………そつね。だつたら、躊躇なくやれぱいのよ

「紫……?」

「『弾幕結界』」

「あやあツー?」

突如放たれた雨のような弾丸に、幽々子は反応できず弾幕を全身に

浴びてしまった。

激痛と、衣服の焦げる音と匂いが周囲に広がる。

「不意打ち、しかも、この私に攻撃なんて……！」

「相手が誰であろうと容赦しないわ。幻想郷を守るためですもの。多少の犠牲は止むを得ないわ」

「……本氣で、言つてゐるの？」

「…………そつよ」

無表情で紫が答える。

そして一歩ずつ距離を詰めながら、新たな弾丸をその手に握りしめる。

「ちょ、ちょっとお一人とも！？ 落ち着いてください！」

距離を詰める紫、それに合わせて一歩ずつ退いていく幽々子。やがて幽々子の背に蒼狼と千花を封じる結界が「ツ、と当たった。横田でそれを確認して、迫りくる紫に視線を戻す。

「や、退きなセコ」

「……そつね。じゃあ遠慮なく退かせてもらひつわね

「……？ デリコフ……ツー！」

幽々子の手が結界に触れる。

淡い桃色の光が輝くと、強固な四重の壁に包まれていた結界が幽々子の触れた部分から崩れ始めた。

幽々子が蒼狼にそつと田畠配せすると、千花を背負つて蒼狼が飛び出す。

そして幽々子を背負つと、森の闇へと一目散に走り去つて行つた。紫は一瞬駆け出せつかとも思つたが止め、その背を見送つた。

「……追わなくて、よろしくんですか

「…………」

文の言葉に答えず、紫はそつと自分の世界へと戻つた。

第三十八話 × 仲違い × (後書き)

幽「あらあら、久々に見た台本ね」

妖「わ、私の台詞……」

夜「あ？ んなもんね(ピチューーン)」

久しぶりに書いた幽々子

でも、俺が今書きたいんわチルノと天子なんや……！

昨日見たものの姫のせいで、蒼狼のモデルがモロなんじやないか
と思い始めた俺

作者なのに……；

も、もちろん違いますからね！

ご感想、ご意見、お待ちしております！

アクセス数伸びててるし、もつといろんな人からの感想も欲しい
な！

基本ネガティブな人間ですけど、感想もらえばDetonation
モードに入りますよッ！

ん、小さな花かい？

とつこの昔にやぎのぬいぐるみにしちまつたな……

元ネタわかる読者いるとスゲエ嬉しいんですけどw

第三十九話 ＜闇を抜けて＞

「ねえ、蒼狼さん？」

「何だい、えと……幽々子様だっけか」

「あらあら。どうして貴方まで様付けなのかしら？」

蒼狼の背中の上で幽々子は笑みを浮かべながら叫んだ。
「こいつ、どこでも笑つてんな。

何て失礼な言葉は呑み込んで、蒼狼は答えた。

「千花はそうしてたからな。一応俺もそれに準ずるよ」

「二人っきりの時は呼び捨てで構わないと云つたんだけどね。まあ、貴方も呼び捨てで構わないわ」

「そうかい。んじゃ幽々子。これからどこへ向かえばいいんだ？」

里から東に向かつて駆けているが、今のところ行く当てはない。
紫から逃れるために適当に走りだしただけだ。

「とりあえず、白玉楼までお願いするわ。千花さんも休ませないと
いけないでしよう？」

「そりゃありがたい。……が、白玉楼ってのはどうちだ？」

「私が指差すから、それに従つてください？」

「ん、了解」

早速指差された方向へ走るとやや開けた平原に出た。

月明かりに照らされた白い野を走り抜けると、また別の森へと入る。
途切れ途切れに注ぐ月光を背に走り続けて、どれくらい経つただろうか。

やがて蒼狼達は森を抜け、小高い丘の上に辿り着いた。

「……ほり、あつちよ。冥界の門があるので、貴方わかる?」

「冷たいような気配がする……。あつちか」

「そり。もう少しだから頑張ってね」

「千花は?」

「氣を失つてゐるけど、大丈夫だと思ひ」

「わつか……。うつし」

丘を滑るように駆け抜けると、蒼狼が感じた冷たい気配の方へ向かつて走り出した。

・・・

やがて冥界へと辿り着き、白玉楼と思われる屋敷の屋根が目の前に映つた。

「見えてきたな」

「……それじゃ、まずは千花さんの部屋に向かつてちょうどだい。妖夢とか侍女にも一言言わなきやいけないし、貴方は部屋で待機してて」

「ああ。すぐに姿を消すぞ」

屋敷の堀を飛び越え、ちょうど道場に着地して幽々子と別れた。それから自室へ入ると、背に乗せていた千花をそつと降ろした。まるで眠つているかのように思えるほど、その表情は穏やかだった。
……まさか死んでるんじゃないだろうな。
試しに爪で突つ突いてみた。

「う、うん」

「生きてる……な。つと/or>いうか、千花が死んだら俺も死んでるだろ

うしな

押し入れを器用に開けてから薄い掛け布団を咥えると千花に被せる。千花の呼吸に合わせて上下する布団を見つめながら、蒼狼はその傍らに腰を落ち着かせた。

すると、道場の方から妙な気配が近づいてきた。

「……？ 何だ、人の気配……か、これ？」

妖力を使って姿を消すと、千花の部屋に人影が一つ現れた。

「……あら？ 蒼狼さん？」

「つて、幽々子かよ。脅かすんじゃねえ」

姿を見せると、幽々子はまたしても微かな笑みながら口を開いてきた。

「ごめんなさいね。話をしてたら遅れちゃって。侍女たちには、千花さんは私のわがままに付き合つてもらつて疲れてるから、しばらくお休みさせるつてお話ししておいたわ」

「そうか。……で、妖夢には話をしたのか？」

「うん、同じように話したわ」

「アイツにも、事情を説明した方がいいんじゃないかなえか？」

「どうして……？」

「……気配を消してるが、今アイツ道場のすぐ近くにいる。千花が氣になつてているのか、お前を気にかけてるのかはわからんが」

幽々子がそつと顔を出すと、確かに道場の入り口で妖夢がうりうりしている。

千花を訪ねようか、でも、疲れてるなら明日でも……とか、ぶつく

を言っていた。

「今日は、もういいんじゃない？ 貴方も疲れてるだろ？」「千花さんも、まだ目を覚ましていいわ」

「幽々子がそう言つなら別にいいが。……なあ、幽々子」「なあに？」

「……すまん。面倒に巻き込んでしまって。あのスキマ妖怪、お前の友達なんだろ？」

幽々子は力強く頷いて答えた。

「ええ。私の数少ない友人の一人よ。でも、どんなに仲の良いお友達だって、たまには喧嘩するでしょう？」

「そりや、まあ……な。だけど、今回は事情が違つて」

「それに、千花さんも貴方も、今は私の大切な友人よ」

予想外の言葉に言葉を遮られ蒼狼は驚いた表情を作つて見せた。面と向かつて友達だとか言われると、ちょっと照れ臭かつたが。

「そ、そうか。友達……ね」

「じゃあ、私も部屋に戻るわね。おやすみなさい」

「……おつかれやすみ」

幽々子が部屋から出ていくと、同時に向こうで何やら話し声が聞こえてきた。

恐らく、妖夢と幽々子が何か話してながら歩いているのだろう。

「……俺もちつと寝るか」

だが、千花の部屋で寝るのは少し狭そうだ。

そっと部屋を抜け出すと、弓道場の隅に腰を落とした。

白い月明かりに照らされながら、蒼狼はゆっくり瞼を閉じる。

明日には、千花は元気になるだろうか。

もし元気になつたら、そうしたら……

「……俺、本当にこれでよかつたんだろうか」

自分のした行動は、千花を大きなリスクを背負わせてまで救つた行動は本当に正しかったのだろうか。

誰に問うても、何処へ問うても、答えは返つてきそうにない。

第三十九話 × 間を抜けて ×（後書き）

評価ポイント、ありがとうございます。

他の読者さんも、感想とかポイントお気軽にどうぞ！

少し先の話ですが、今度は、今度こそはオリジナルを開する予定です。

それが無理だった場合は、また二次創作かな；

第四十話 ＜ポーカーフェイス＞

次の日の朝。

蒼狼は道場に近づいてくる気配を感じ田を覚ました。
人と幽霊が混ざったような不安定な気配。

言つまでもなく妖夢だらう。

姿を消して「道場から顔を覗かせると、道場の真ん中で妖夢が木刀
を構え立っていた。

恐らく朝の鍛錬だらう。

真正面を見据え、上段で構えをとると風を切る音が響き渡る。

「……さすがは自慢の孫つてどこか。太刀筋はそっくりだし、かな
り速いみたいだ」

と、独り言をもらした瞬間、妖夢の視線が弓道場に向けられ、

「やばッ！？」
「誰だ……ッ！」

慌てて首を引っ込める。

姿を消しているといふのに、気配を感じ取つたのだろうか。
さすがあの妖忌の孫だ。
侮れない。

「……氣のせいかな。今、誰かに見られてたよくな……。まさか、

また天狗？」

天狗……ああ、あの新聞記者の。
安心しとけ、一応いない。

ひとしきり稽古を終えた妖夢は手拭いで顔を吹くと道場から出て、

「ん？ もうちは千花の部屋だろ……？」

道場から屋敷に戻るのではなく、何故か妖夢は千花の部屋へと続く廊下へ向かつて歩き出した。

「……千花さん、具合はどうですか？」

戸の前で妖夢が千花を呼び掛ける。

当然だが返事が無い。

まだ千花は眠っているのだから。

「なるほど。千花を心配してゐるといふが」

返事が無いため部屋に入る」ともせず、妖夢は一礼してから千花の部屋の前から去つていった。

「って、幽々子はいつ妖夢に話すんだ？ ……ちょっと行ってみるか」

姿を消したまま池を飛び越え、蒼狼は幽々子の気配を頼りに屋敷へ向かつた。

・ · ·

「やうなよねえ。私もちょっと困つてゐるよお

部屋に入つて開口一番、幽々子は眉をハの字曲げて困つたような顔を浮かべた。

「話すきっかけがうまく掴めないのよ。いきなり話しても混乱させちゃう」

「……昨日は何て説明したんだ？」

「……お使いで遠い遠い里まで買い物に行かせたって言つたけど？」

「……よくそれで納得したなアイツ」

「困ったわねえ……。こぞこうなつてみると向處から話せばいいのやら……」

「けど、妖夢だつて俺のこと調べてただる。本人を目の前にすれば理解も早いんじゃないか？」

「もうめんどくさいし、貴方が説明してくださらない？」

「めんどくさいからつて俺かよ！ しかし、俺だつて何をどう説明すればいいのか分からんぞ」

「……困ったわねえ」

扇子をパタパタさせながら幽々子がつぶやく。

その表情にどことなく余裕が見えるのは気のせいなのだろうか。

「ところで、千花さんは目を覚ましたの？」

「いや、まだ寝てるよ。ちゃんと生きてる」

「…………もしかして、紫が貴方と千花さんとを分けてしまつたから目を覚まさないのかしら」

「恐らくは、無理やり分離させられたダメージのせいだと思つ。俺が何とか太刀の姿に戻れば多分目を覚ますとは思うが……」

「戻れるの？」

幽々子の問いに蒼狼は首を振った。

「ちよいと妖力が足りないかもしれん。今日は満月だし、もしかしたら試すことが出来るかもな」

「満月だと妖力が回復するの？」

「多少はな。上手く千花という鞄に収めればそれで回復するかもしれん」

「もし失敗したら……？」

「さあ、どうなるかね」

何となく予想は出来ていたが、それを口にするのは止めておいた。蒼狼は腰を上げて部屋の戸を爪で開けようとして、目の前の気配に気づいた。

「……誰だッ！」

爪で戸をひっかけて開け放つと、そこに銀の髪の少女が立っていた。

「な……！？ 妖夢！？」

「よ、妖夢、貴女どうして……！」

「妙な気配を感じたので参上しました。……それより、千花さんのお話ですよね。今、幽々子様とその方がお話ししていたのは」

淡々と、表情を変えずに妖夢が言った。

幽々子と蒼狼は顔を見合わせてから頷き、千花の事、それから蒼狼の事、身に宿る能力の事を洗いざらい話した。

話を聞き終えた妖夢は、相変わらず無表情だった。

「幽々子様、一つお伺いします。……千花さんが目を覚ましたら、その後どうするおつもりですか？」

「そうね……」

ちりりと蒼狼を見やつてから幽々子は答えた。

「千花さんは、もつ私の大切な友達よ。だから出来る限り協力するつもり。だから、このままずっとお屋敷で一緒に暮らそうかなって」

「……左様ですか」

少し、妖夢の表情が和らいだような気がする。

千花の事を案じ、安堵したのだろうか。

「わかりました。では、失礼します」

「え、ちょっと妖夢？」

「何でしうか、幽々子様？」

幽々子の方が驚いてしまって、思わずその背中を呼び止めてしまった。

「それだけ？ 私はもつと狼狽るんじやないかと心配してたんだけ
ど……」

「……平氣ですよ。伊達に修行してませんから。では」

丁寧に礼をしてから部屋の戸を閉じそのまま去つていった。
あまりにも呆氣ない妖夢の反応に、幽々子はポカーンと呆けてしまつた。

「……修行しちゃうと、あんな風に冷たくなっちゃうの？」

「は。んな訳ないだろ。気づかなかつたのか？ 妖夢の体震えてた
んだぜ」

「え……？ 嘘、全然分からなかつた……」

「妖夢もショックなんだろつせ。さて、俺は夜まで一眠りするかな

もう一度爪で戸を開けると、蒼狼は弓道場へ向かつて跳んでいった。
途中、千花の部屋の前に立つ妖夢を見かけたが、何も言わずに弓道

場の隅で腰を置いて瞳を閉じた。

…… そりいえば、アイツ俺を見て驚きもしなかつたな。

第四十話 × ポーカーフェイス × (後書き)

おまけ

妖夢が盗み聞きするシーンにて

妖「話は聞かせてもらつた！ 私は魂魄妖夢！」

大変だ、白玉楼は狙われているッ！

……って、この台本何なんですかッ！？

夜「ふ、ブイマッ(ピチューン)」

そういうえば、もう少しで空想夢の……

いや、何でもないッス

いつも読んでくれてる方々、ありがとうございます。
感想とか、いつでも気軽にどうぞッ

第四十一話 ＜無言のやよなり＞

空に輝く新円の月が蒼狼を照らす。

蒼白い月光を浴びると、蒼の毛並みがいつそつ輝いた。

「ふむ。こんなもんかね」

体の妖力を確かめるようにしながら少し体を動かす。
先刻よりかは多少回復しているらしい。
心無し、体も軽い。

「……で、どうしたんだよ。さつきから熱い視線なんか送ってきて
よ」

弓道場へ入る戸口の傍にいる妖夢に声をかける。
驚きもせず、戸惑いもせずにこちらへ一步踏み込んだ。

「本当に、蒼の聖獸だつたんですね」

「今頃それか。ああ、そうだよ。お前の調べてた蒼狼信仰の蒼狼さ
「一つ、訊いてもよろしいですか?」

「おひ」

月を見上げたまま口だけで答える。

妖夢は戸口の傍に寄りかかってぽつりと言つた。

「……千花さん、目を覚しますよね?」

「多分、な。俺が千花の体に戻れれば元気になるはずだ
「もし、失敗したら?」

「さあてね」

最悪死ぬかもしれない。

しかし、運が良ければ千花は田を覚まし、俺が死ぬのかもしれない。
妖夢の表情が微かに曇つた。

さつきまであんなに無表情だったのに。

「千花の事、気になるのか？」

茶化すとか、そういう意味ではなく普通に訊ねた。

「そりゃあ、心配ですよ。急にいなくなつて、帰つてくれれば田を覚
まさないし……」

そのまましゃがみ込むと、妖夢は膝の上に顔を埋めてしまった。
震えた声が微かにもれる。

「心配……ですよ

「……そつか。んじや、俺も頑張つてアЙツを起こしてくるかね」

腰を上げて廊下を抜けると千花の部屋へと向かつ。
静かに眠っている千花の傍に座る。
すると、妖夢がそれを追つてやつてきた。

「ん？」

「その、ご一緒してもよろしいでしょつか……？」

「……構わねえよ。むしろ助かる」

蒼狼は妖夢を向かい側へ座らせるといし両手を貸せと促した。

「俺が太刀になつたら、千花の上にかざしてくれ。それだけでい

いから」

「承知しました」

「……しかし、その堅苦しい口調とかはあんま似てねえんだよな」

「え？ 祖父の事ですか？」

「おう。なんつーか、普通のジジイだった。やたら強かつたんだけどさ」

「強かつた……ですか」

懐かしむように遠くを見つめる妖夢。
つとじけない。

昔話をしている場合じやないんだ。

「よし、んじや始めるぞ。両手を前に出してくれるか
は、はい」

言われた通り、手の平をして両手をスッと前に差し出す。
それを確認すると、蒼狼は瞳を閉じて自分の妖力全てを放出し、閃
光にも似た鋭い光が蒼狼を包みこむ。
そのまま頭に太刀をイメージする。
妖気が鍛えたあの太刀を思い出す。
蒼ぐ、鋭ぐ、強い太刀を。

「……！」「これは……！？」

いつしか蒼狼の姿はかき消えていて、妖夢の手にはいつか見た蒼い
太刀が浮かんでいた。

ふわりと落ちるその太刀を受け、その重みに顔をしかめる。

「ツ。けっこう、重い太刀なんだ……」

「聞こえるか、妖夢？ ちつと重いがそのまま我慢してくれ」

蒼い刀身から蒼狼の声が響く。

「ど、どうするんですか？」

「口で説明するのは難しいんだが……まあ、とりあえずしばりく我慢してくれ」

すると、太刀から蒼い光が零のようにポタポタと零れると、千花の体に流れ落ちていった。

こぼれ落ちる零の一つ一つが、まるで瑠璃のように美しかった。零は少しづつ千花の体を濡らしていくと、一度発光してからその体に吸い込まれていった。

妖夢は太刀の重さに耐えながらその何とも不思議な光景を見つめていた。

「……綺麗」

零れた零は、やがてこの部屋までも蒼の光に包んでいく。ふと、太刀が少し軽くなつたような気がして覗いてみると、刀身がうつすらと透けて千花の顔が見えていた。

「安心しろ。もう少しで終わるから」

「え、でも、蒼狼さんは……？」

「……」

答えが返つて来るよりも先に、蒼の太刀が妖夢の手から消えてしまった。

同時に部屋を包んでいた蒼の光も薄くなり、やがてこれも消えた。

「……ち、千花さん？」

恐る恐る声をかけてみる。

穏やかな表情のまま、千花は何も答えなかつた。

微かに上下する胸の動きを見る限り死んではいないはずだ。

「千花さんッ」

妖夢は思い切つて、千花の頬に手を伸ばした。
ほんのりと伝わる温もり。

すると、

「……つ、冷たい」

「ツー 千花さんー」

妖夢の手を、千花が握り返して微笑んだ。

優しそうな黒の瞳が妖夢を見つめると、ゆっくりと体を起こした。
それから、部屋を見回してからもう一度妖夢の顔を見つめる。

「……どうして、そんな泣きそつた顔をしてるの?」

「い、いえ! あの、これは……その…」

「……? つて、わ!…?」

突然妖夢が千花に抱きつき、銀の髪をその胸に埋めた。

予期せぬ出来事に、千花はただただ目を丸くするだけだった。

「……よ、妖夢?」

「ちよつとだけ、このまま……お願いします

「……」

千花は悲しそうな顔をして、震える妖夢の肩を掴んだ。

ハツと顔を上げる妖夢の顔が暗がりでも分かるほどに真つ赤になる。

「ち、ちちちち違いますー！ そ、そそそそつこつ行為は、あの、えと、えとえとえと……ー？」

「……ごめん」

「…………え？」

そのままぐいと妖夢を押し退けると、千花は一瞬ふらつきながらも立ち上がり、部屋の戸に手をかけた。
一度、振り返って妖夢を見つめる。

「…………今まで、ありがと」

「え……？ そ、それはどうこう意味で」

妖夢の目の前で、部屋の戸が静かに閉ざされた。
ポツンと残された妖夢は訳が分からず、部屋を飛び出して千花を追いかけた。

「ち、千花さん！？ ど、どうですかー？」

道場も、『道場も、屋敷も庭にも、千花の姿は無かった。
何処を探しても、千花を見つけることが出来なかつた。

「何で……？ 何ですか……？ 千花をああんッ！？」

妖夢の声が屋敷に、冥界へと響く。
返事はなかつた。

第四十一話 ＜ 無言のやよなり ＞（後書き）

浮氣性といつが、何といつが。

別のお話を書きたい衝動に駆られています；
この作品が終わらないと別のはやらないぞ！
やるとしたら短編だらうけどね。

七夕の主人公作りたいなあ……

ジラーチ的な女の子で、もちろん能力は『願いを叶える程度の能力』

うわ、書いてえ……w

第四十一話 『 その背を追いかけて 』

「……千花さん、帰ってきた？」

白玉楼の門の前で遠くを見つめる妖夢に、幽々子は自分の傘の中へそっと招き入れた。

その日、幻想郷はしどじと寂しげな雨が降っていた。
妖夢はうつむいたままその言葉に答えなかつた。

「……にいたら風邪ひっちゃうわ。部屋に戻りなさい」

優しく奢める言葉。

しかしそれに答えることはなく無言のまま。

傘の中で沈黙が流れ、今は降りしきる雨の音だけが聞こえる。

「……妖夢」

幽々子が銀の髪を撫でようとして、ふと妖夢が口を開いた。

「千花さんは、どうして出て行ってしまったのでしょうか」「それは……さすがに、私にも分からないわ」「せつかく目を覚ましてくれたのに、どうして……」

「ごめん、と。

そして、今までありがとうございました。

たつたの一言だけを妖夢に言い残して、千花は白玉楼を出て行つてしまつた。

何故？

何故千花は妖夢に謝ったのだろう。

何故千花は妖夢に礼を述べたのだろう。

蒼狼の力が戻つて目を覚まし、また千花と一緒に稽古したり、屋敷で働くと思っていたのに。

何故、出て行つてしまつたのだろうか。

「妖夢」

「……何でしようか」

主の笑顔が妖夢を覗きこむ。

「待つても、多分来ないわ。気になるのなら探しに行つたりビリ？」

その言葉に、妖夢は顔を上げた。

「し、しかし！ よろしいのですか？」

「うん。私だって心配だし、帰りを待つ女なんてちょっと古いじゃない」

軽くウインクしてから、幽々子は傘を手渡し屋敷の方へ向かって歩き出す。

ふと、足を止めて一度妖夢に振り返るとこう付け足した。

「ただし、千花さんと一緒に帰つてこないと屋敷には入れてあげないから。じゃあね」

「あ……は、はいッ！」

ひらひらと手を振る主人に、力いっぱい感謝の気持ちを込めて頭を下げる、屋敷の門がゆっくりと閉ざされた。

「千花さんを探そう。でも、いったいどこから探したらいいのか…」

…

誰か頼りになりそうな人はいないだろうか。
とりあえず、

「人里から、探してみよう。誰か見かけた人がいるかもしれない」

幽々子から借りた傘を握りしめ、妖夢は外界へ続く道を走った。

・・・

「……ねえ、聖獣様」

優しく注ぐ雨に打たれながら、千花はつぶやいた。
自分の体の、内なる聖獣に向かって。

「千花……」

「あの話、全部本当なんだね。聖獣様が体に戻った時、その時の記憶も戻ったんだ。……僕は、聖獣様に殺されたんだ」

「……俺が憎いか？」

その問いに、千花は首を振った。

「ううん。憎いとか、そつは思つたことないよ。だけど、すごく驚いた」

「…………」

「僕は記憶を失つたんじやなくて、途切れてたんだよね。だけど、聖獣様の記憶の断片を垣間見て、それが微かに残つた自分の記憶だと錯覚してたんだ。まあ、結局同じことなんだけど」

「千花、どうして白玉楼を……」

「……最初、僕はこの力を制御できなかつた。だから暴走したまま妖夢さんと出会つて助けられたんだ。もし、また暴走したら迷惑をかけちゃうから」

消え入りそうなほど小さな声でぽつぽつと言つ千花。
その頬に涙が流れる。

「せつかく仲良くなつた人を、失うなんて嫌だ。だから、もう他人と関わりを持たないようになれば、誰も失わない。聖獣様が言つてたじやないか。この能力は自分と第三者が必要だつて。他人がいなければ、少なくとも失うのは僕だけだ」

「千花……」

「いつそ、紫さんに封印されてしまつた方が、よかつたかもしだれな

いね」

「……それ以上言つな

「……ごめん」

千花は雨の中を歩きだす。

行く当ては、最初から決まつていた。

どうしても、自分の手でやらなくてはいけない」とが一つある。
大したことではないのだけど。

「里のみんなを、弔つてあげないと。唯一の生き残りの、僕の役目だ」

「……千花、少し待て」

蒼狼に呼ばれ、足を止める。

すると、千花の胸から蒼い光が現れると、目の前にあの太刀が突き刺さつっていた。

蒼い刀身に虚ろな眼をした千花が映る。

「護身用だ。いつでも使えるよつ具現化しておぐ」

「そつといえば、弓、置いてきちゃつたんだつけ。じゃあ、しづらへ
借りるよ」

「借りるも何も、今はお前の力だ。好きに使え」

「……ありがと」

抜き身の太刀を抜くと、千花は肩に担ぎながらゆっくつと歩きだした。

目指す場所はただ一つ。

自分が生まれ、そして一度死んだ故郷。

前に訪れた時のままでは、みんなが可哀想だ。

生きている自分がやらないと、いずれ物の怪の類になるやもしれない。

それに……

「母さんと凜のお墓参り……しないと」

距離はあるが、陽が落ちる頃には着くかもしれない。

一歩一歩、重い足取りで千花は歩く。

片づけや墓参りが済んだら何をしようか。

いや、それすらも決まっているんじゃないだろうか。

「……一匹狼つて、じつこつ気持ちなのかな」

「……」

千花の言葉に、蒼狼は答えなかつた。

第四十一話 ＜ その背を追いかけて ＞（後書き）

いつも読んでくれる読者様、ありがとうございます。

空想夢の方がいつの間にかまたお気に入り登録件数が増えてて嬉しいです。

もう少しで評価ポイントも登録件数もキリが良いんだけどなあそこはまあ、気長に待ちます。

もう少しでこのお話も終わるのかな……？

っていうか、俺もキノの旅 + 東方を書いてみたいのう……

浮気性すぎるww

第四十二話 ＜雨天疾駆＞

人里で聞き込みをしていた妖夢だつたが、結局、里で千花の姿を見た者は誰一人としていなかつた。歩き疲れて茶屋の席に腰をかけると、先客が「ひさしひさしひさしひさしひさしひ」などと呟いていた。

「はあ……」

「何よ。辛氣臭い顔しちやつて」

「へ……あ、靈夢さん」

靈夢は団子の串を数本握りしめたまま妖夢の隣に腰掛けた。ずい、と皿の前に串が一本差し出される。

「あ、すみません、いただきま」

「ぱく」

「……ええっと」

空を掴む手を引つゝめると、一度ため息をしてからお茶を一口飲んだ。

「誰もあげるなんて言つてないわよ。食べたければ自分で買へなさいな」

「いえ、結構です。お腹空いてませんし、食欲もないです」

「ふうん……」

そんな妖夢の様子を見ながら靈夢はもつ一本団子を頬張る。沈んだ表情で湯のみを握りしめる妖夢に、靈夢が口を開いた。

「何があつたの？　ずいぶんと深刻そうな顔しちゃつてさ」

「靈夢さんは、前に会つた千花さんを覚えてますか？」

「ああ、アンタが言つた新しい使用人さんでしょ。それが？」

「……その、昨晩白玉楼を出て行つてしまつたみたいで、探してゐるんです」

すると靈夢はははあとか言いながら頷いて言つた。

「アンタんとこのお姫さんが何かやらかしたわけね。そりや出て行きたくなるわ。うんうん」

「……あの、真面目な話なんですけど」

もう少し茶化してやろうつかと思つたが、妖夢の真剣な眼差しを受け靈夢は自重した。

一度咳払いしてから靈夢が再び口を開く。

「ん、でも、出て行くつてあの人に行く当て何があるの？　他に親しい人とかいる？」

「えと……」

交友関係というか、千花が他の人と話しているところなど見た覚えがない。

「……そうだ。

「あの天狗なら何か分かるかも……」

「幻想郷の情報なら何でもござこつてヤツだし、可能性はあるかもね」

最後の一本を食べ終えると、靈夢は戸口に立てかけてあつた傘を取つて立ち上がつた。

背を向けたまま、妖夢に一言告げる。

「妖夢」

「何でしょ「うか……？」

「……うつさ、何でもない。文なひわつや、寺子屋に向かつのを見たわよ。探してみたら?」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

いちいち丁寧に頭を下げてから、寺子屋の方へと走る妖夢の背中を見て、靈夢は少しだけ笑みを浮かべた。

「何といつか……これが青春ってヤツなのかしら。ま、頑張んなさいよ」

「巫女様、お代金の方を……」

「……今の子にツケといて」

・ · ·

寺子屋の戸から慧音が出てくるのと、妖夢が到着したのは同時だった。

血相を変えて現れた妖夢に、慧音は何事かと顔をしかめた。

「あの、天狗の、新聞、記者さんの……」

「文か？ 文ならまだ来てないが

「慧音さん！」

ちょうどいいタイミングで文が空から舞い降りてきた。

専用の黒い雨合羽を何故かカツコつけてから脱ぐと、いつもの白シヤツ姿になる。

慧音の傍に立っている妖夢を見つけて、文も不思議そうな顔をした。

「あやや、妖夢さんこんなところで何をしていらっしゃるんですか？」

「あの、お聞きしたいことがあります」

「ふむ。とにかく一度寺子屋に入らぬか。何も雨の降る軒先で話すこともあるまい」

慧音に促され、一人は寺子屋の中の一室へと案内された。

「それで、あの、慧音先生の用事は」

「いや、君からで結構だ」

「で、ではあの、失礼します」

「私にお聞きしたい」と、ですよね。答えられる範囲でお答えしますよ。幻想郷トップシークレットな事はダメですけど

くつくつと笑う文に対し、妖夢は一度姿勢を正してまっすぐ見据えた。
真剣な眼差しに驚きつつも、文も咳払いして姿勢を正した。

「あの、千花さんの故郷の詳しい場所、わかりますか？」

「千花さん……あ、ああ。蒼狼信仰の里ですか。ええ、もちろん分かりますけど」

「お、教えてくださいー。あの、今すぐにでも行きたいんですけどー！」

グッと身を乗り出す妖夢を見て、文は田をパチパチさせた。

何か事情があるらしいと感づいた文は懐から簡易な地図を取り出した。

「ここから西にまっすぐ行くと森があります。その森を抜けると大きな門があつて、その先が蒼狼信仰の里になりますよ」

「「」の地図、お借りしますッ！」

「く？ あやや、いやちょっと妖夢さんお待ちを……！」

文が手を伸ばしかけた時にはすでに、妖夢は部屋を飛び出て行ってしまっていた。

慧音がクスクスと笑いをこらえている。

「幻想郷最速が聞いて呆れるな。あんな小娘に後れを取るのか？」

慧音の言葉に文は唇を尖らせて反論した。

「い、今のは油断ただけですよー。といふか、何であんなに急いでたんでしょうか？」

「さあね。さて、私は私の仕事をしなくては。頼んでいた物は持つてきてくれたか？」

「ええ。これですよね。人間の記した蒼狼信仰の書と、妖怪に伝わる蒼狼信仰の書。両方ちゃんと入手してきました」

二つの古びた書物を手にすると、慧音はフツと笑みをこぼした。

「これでいい。これで、あのスキマ妖怪が隠した歴史を修繕できるな」

「悲しいお話でした。田の前で紫さんが語ってくれた真実は……」

「真実とは、案外そういうものなんじゃないか。知らねばよかつたと、よく聞く話だ」

慧音は淡々と言つてから書斎へ移る。

出来る限り、作業をしてしまおう。

残りは次に満月の時にやればいい。

「……ううん、しつかし気になるなあ

先刻の妖夢の様子が、文の頭の中で引っかかっていた。
この雨の中を走つて行つたといふのだろうか。
微妙に匂うスクープの匂い。

これを逃す手はない。

荷物をまとめ、雨合羽に袖を通すと、文は妖夢を追いかけて西へと
飛び去つた。

第四十二話 ＜ 雨天疾駆 ＞（後書き）

空想夢の評価ポイントが100越えました！
評価してくださった方々、ありがとうございました
どうせなら何か一言欲しかつたけど、そこまで求めるのは欲張りで
すよね；

こちらはそろそろクライマックス……な気がする。

終わりを描くと同時に、次回作のヒロインを誰にしようか考え中です（もちろん一次創作

次はまた女主人公かな。

あとでちょっと活動報告書につか。

第四十四話 ＜迷い断つ剣＞

「見つけた……ここが、あの天狗の言つていた大きな門……」

地図通り、里から西へ走り鬱蒼とした森を抜け、妖夢は文に説明された大きな門の前に到着した。

古びた門は所々塗装が剥がれていたり、穴が開いていたりと荒れ放題で、鍵も何もかかっていなかった。

それどころか、門は微かに開いている。

「足跡……つい最近ここを誰かが通つた証。千花さん、やつぱりここに来てるのかもしねえ」

逸る氣持ちを抑え門を越えると、前から異臭が漂ってきて思わず顔を覆う。

ひどい腐敗臭だった。

「これは……」

里に飛び散る、血と、血と、血と……

凄惨な光景に妖夢はややたじろいだ。

あの話通り、里は酷い有様だった。

こんな場所に、果たして本当に千花がいるだろうか。

「奥に、確か社があるはず。そこに行けば何か見つかるかもしねない」

しかし、腐敗臭はあるのにその原因となり得る亡骸が一つも見当たらないことに妖夢は微かに眉根を寄せた。

誰かが片付けたのだろうか。

未だ、雨は降り続いている。

それどころか、白玉楼を出た時は小雨だったのに今ではかなり強く降っている。

傘が無かつたら今頃全身びしょ濡れだつただろつ。

幽々子の傘に感謝しなくては。

濡れた階段を駆け上ると開けた場所に辿り着いた。

完全に崩壊した社の跡と思われる廃墟と、その奥にぼつかりと空いた空洞。

そして、同時に一つの人影をその目に捉えた。

見覚えのある、長い黒髪を一つにくくった少年。

「千花さん！」

思わず声を張り上げその名を叫んだ。

雨に打たれ、呆然と立ち尽くす背中がゆっくりと振り向いた。

黒の双眸が妖夢を見つけると、微かに見開いた。

……降りしきる雨の勢いが少し増してきた。

妖夢は傘を前に傾げながら千花の下へ走った。

「さ、探しましたよ！ 急にお屋敷を出て行つて、どうしゃったんですか？」

「…………

妖夢の手が千花に触れよつとした瞬間、蒼い光に阻まれ妖夢は後方に吹き飛ばされた。

突然の出来事に反応が遅れ、妖夢は受け身が取れず水たまりに激突した。

「か……ツー？」

いつの間にか、千花の手に蒼の太刀が握られていた。太刀の一閃で吹き飛ばされたと理解するのに妖夢は少々時間がかかるつた。

「どうして私に攻撃を……」

「僕に、近付いちゃいけない」

「答えに、なつてません……ッ！」

千花がこちらを振り向く。

黒の瞳ではなく、太刀と同じ蒼い瞳をしていた。

「ち、千花さん……！？」

瞳だけではない。

その黒髪すらも蒼く染まっていた。

そして千花を中心に光の奔流が溢れだす。

その姿は、初めて千花にあつた時のそれと似ていた。

千花の能力が、いや、蒼狼の能力が発動している。

しかし、それはありえないはず……

「千花さんの、蒼狼の能力は、誰かが傷つけられたときに怒りで……」

「…………」

何も、答えてくれなかつた。

ただ太刀の切つ先を妖夢に向け、小さな声で呟くようにして言つた。

「……僕に、近付かないでほしい。君を、他の人を傷つけたくない
な、何を言つて……！」

千花の姿が霞んだ。

常人の目では到底追えないような速さで、千花の太刀が振り下ろされる。

寸でのところで地面を蹴つてそれを回避。

太刀が振り下ろされた場所が抉られ亀裂が走る。

「妖夢、白玉楼に帰つてくれないか。幽々子様にも、よろしく伝えてほしい」

「……千花さん」

（それで、いいのかお前は？）

「……失うのも、無くすのも嫌なんだ」

構え、妖夢の姿を蒼の瞳が見据える。
ひどく、悲しそうな眼をしていた。

「何もしないで、ここを立ち去つてほしい。そうすれば、僕は何もしない。だから……」

「何を……勝手な事を……」

「……妖夢」

震える。

両手が、体が、声が。

その小さな体が、やり切れない感情に突き動かされ震える。

この、苛立つような感情は何だろうか。
怒りか、憤りか。

或いは両方か。

キツと千花を見据え、吠えるようにして叫んだ。

「自分から、逃げないでください！」

「……逃げないで、か」

ほんの少し、千花が微笑んだ。

それは自嘲するような笑みだった。

「確かに僕は逃げてる。だけど、逃げるだけで大切な人を誰も失わないのなら、僕はそっちの方がずっといい……」

太刀を構え直し、グッと脚に力を込める。

「……もう、僕に関わらないで」

「黙りなさい！」

「……ッ！？」

背と腰の刀を抜くと、妖夢はまっすぐ千花を見据えた。
その瞳は揺るがず、まっすぐに。

「貴方が、そこまで臆病な人とは思いませんでした！ 誰かを失いたくないから逃げるなんて、臆病者のすることです！」

「……別に僕は、臆病者でも構わない」

「これだけ言つているのにまだそんなことを……！」

強く刀を握りしめ、二刀の構えを取る。

「貴方は、本当は迷つてるんです！だから、私がその迷いを断ちます！」

「……」

(……俺の時と同じだな)

蒼狼は心中で懐かしむように呟いた。

千花の心情も分からぬでもない。

昔、俺も同じことを考えた。

自分がいなくなればいい、と。

誰かを傷つけたくないのなら、他者との接触を断ち、ずっと自分だけ孤独でいればいい。

そうすれば自分は悲しまないし、誰も関わらないのだから誰も悲しまない。

それはひどく自己中心的な考え方。

しかし、千花は結局は人間だ。

本当は千花だつてそんなことを心から望んではいない。

千花が真に恐れているのは……

「剣術で私に勝てると思いませんか、千花さん」

「……僕は、迷ってなんかない」

太刀を輝かせ、刀身に蒼のオーラを纏わせる。
妖夢が低く姿勢を構え、戦闘態勢に入る。
ジリジリと詰まる一人の距離。

激しく降り注ぐ豪雨。

雷鳴が鳴るのと同時に、一人は地を蹴った。

第四十四話 ＜迷い断つ剣＞（後書き）

夜「一文字違つたらダイナミック・ゼネラル・ガーディアンだね」
妖「何を阿呆な事を」

夜「ダイナミックでみょんなガーディアンとかどうよ?」
妖「意味分からぬんで死んでください」

夜「き、斬り払(ピチュー)ン」

俺は好きですよ親分w

機体はリアル派なんですけどね。
自作のヒュツ バインにガーベラストレー^ト握らせたのはいい思い出だ……ん?

全然話が違つじゃなイカ。

ちよいとお知らせあるんで今日のあとがきは長めです。

まず一つ

お気に入りユーモー^ザーが増えました。

登録してくれた方々、ありがとうございます。

もう一つ

明日、バイトの関係でもしかしたら9時起きつかり更新が出来ないかもしれません。

なので、明日は9時以降に更新となります。

……今作、やっぱりいろいろ微妙な部分が目立ちますね;

第四十五話 ＜涙一閃＞

雨は激しさを増しいつしか滝のように降り注いでいる。そんな雨の中、二つの影が荒れ果てた社の前で何度も何度もぶつかり合っていた。

「はあッ、はあッ……！ な、何て桁違いな力、……ッ」
「聖獣と祀られていたんだ。まさか、容易く倒れるとでも思つてたの？」

息を切らす妖夢に対し、千花は平然とした表情で言った。
その顔に疲れなどは微塵も見えない。

今の一瞬、妖夢は一刀で上段から斬り込んだが、あっさり太刀で捌かれてしまった。

そして体勢を立て直そうとしたその刹那、蒼の一閃が頬をかすめる。それからはほとんど防戦一方で、ろくに攻撃を当てるこさえ敵わなかつた。

襲いかかる太刀を一刀でギリギリのところで受け流すだけで汗がにじみ出始める。

もっとも、激しく振り続ける雨のせいでどれが汗なのかは分からなかつたが。

「剣術だけじゃ、君には勝てないとと思う。けど、今の僕にはそれを凌駕する力がある。いつ暴発するかも分からない危険な力だけどね」「暴発……しない可能性だって、あるじゃないですか！」
「…………どうだろうね」

「ツ！」

蒼の太刀が踊り、妖夢の足元を抉る。

恐ろしい力だ。

千花の太刀が直撃したら、恐らくあつといつ間に粉微塵に砕かれてしまうだろう。

直撃すれば、の話だが。

「……ツ」

迫る太刀をどうにか見切りながら、妖夢はあることに気が付いた。だが確証はないためまだ推測に域を過ぎない。

「……一度、踏み込んでみますか」

大きく退いてから一刀を下段に構え直し、そのまま低い姿勢を維持しながら千花へと疾駆する。

真正面から向かう妖夢に軽く驚愕しつつも、千花は袈裟斬りを放つ。ここだ。

妖夢は千花の目の前で脚を止め、その一撃を目の前で見据えた。轟、と風が薙ぎ凄まじい風圧が襲いかかる。

そして、蒼の太刀は妖夢の足元ギリギリに突き刺さっていた。至近距離でにらみ合つ千花は無表情で言つた。

「何のつもりだ」

「恐くなつて脚を止めた。それだけですよ」

「……そう。せツ、えい！」

横薙ぎに払う太刀をバックステップで避け、妖夢は確信した。

この太刀に、殺氣は全くない。

それどころか、太刀から恐れを感じる。

これは……

「……どうしたの。刀を一本収めちゃってさ」

千花の言つ通り、妖夢は背負つていた方の刀を鞘に納めると、腰に収めていたやや小ぶりの刀だけを右手で構えていた。

「いえ、貴方のお相手ならこれぐらいで十分かと」

「そうか。……それにしても、君は戦闘の時と普段でこんなに変わるんだ。ちょっと驚いた」

「君、だなんて他人行儀ですね。いつものように、妖夢で結構ですよ」

「……他人なんだから、他人の行儀に則るさ」

蒼の太刀が走る。

千花の太刀筋を見切つている妖夢はそれをひらりと躱し、あるいは往なし、徐々に千花との距離を詰めていく。

その表情に、微かに焦りの色が見え始める。

「く……ッ」

「もう少し、踏み込めれば……！」

「少し、本気を出さないと不味いかな」

千花がトンと蹴つて数歩分距離を取ると、太刀を片手で掲げ妖夢に狙いをつける。

すると切つ先に蒼の光が強まり太刀全体を覆つた。

「吠える」

「な……くッ！」

振り下ろすと同時に、蒼の斬撃が一直線に妖夢へ突進する。凄まじい剣圧が妖夢を直撃し、大きく吹き飛ばされる。

受け身を取ろうとしたが、敢えなく地面に倒れ伏せてしまった。

「！」

起き上がろうとしたその瞬間、首筋に蒼の刃が突きつけられた。見下ろす蒼の瞳は依然として悲しそうな色をしている。

「僕の勝ち、かな」

「…………勝ったのに、どうしてそんな悲しそうな顔をしてるんですか？」

「…………」

答えない。

黙つたまま蒼の瞳がこちらを見据えている。絞り出すような声音で、千花が言った。

「君は命の恩人だから、殺したくはない。だから、ここで退いてくれると嬉しい」

「…………千花さん」

一瞬、蒼の太刀が揺らいだ。
迷いか、躊躇いか。

理由はどうでもいい。

妖夢にとって、その一瞬の隙が絶好の好機だったから。

「これは、真剣勝負ですよ」

刹那、右足で高く蹴り上げ千花の太刀を吹き飛ばし、右手の刀を一気に千花の体に突き立てた。

「が……くふッ」

脇腹を押さえその場に崩れる千花。

刃を引き、血を払つてから鞘に納める。

妖夢の手が、震えていた。

「太刀を受けて分かりました。貴方は迷つていた……いえ、恐れていった。本当は、結論を出すのを恐れていた……違いますか、千花さん」

「…………やっぱり、妖夢には、敵わないな」

千花は仰向けに倒れ灰色の空を見上げた。

空の雫と頬の雫がごちゃ混ぜになつて流れ落ちる。

千花は、泣いていた。

「僕は、聖獣みたいに強くもない、結局はただの人間だから、ね。
……妖夢って、本当に強いんだね」

「いえ……私は……」

「…………ごめん」

消え入りそうなほど小さな声で千花が言つた。

「さ、帰りましょう。……幽々子様が待つてます」

「…………わかつた」

妖夢は千花の体を起こして肩を貸すとゆっくりと歩きだした。途中、落ちていた傘を拾い上げ二人で入る。

「…………相合傘なんて久々、かな」

「い、こんな時に何言つてるんですか。……もつ

ほんのり頬を朱に染めながら、妖夢はそっぽ向いて歩く。

千花は微笑しながら、顔を袖で強引に拭つた。

「帰つたら、怒られるのかな？」

「幽々子様が怒るといふ、見たことないですけど……」

「あはは。そつか……なら、安心かな」

激しく注いでいた雨は、いつしか小降りになつていた。

傘を閉じじよつとしたとき、千花の手がそつと伸びて傘を掴んだ。

「千花さん怪我してるんだから、無理しちゃダメですよ」「よ

「これくらいこ平氣だつて。あの一撃、急所に届いてなかつたし

「でも……」

「ちょっとでも手伝わせてよ。迷惑かけっぱなしなんて恥ずかしい
からや」

「……わかりました」

千花を背負いながら妖夢が歩き、背負われた千花が傘をさす。
いつしか雨は止み、空にオレンジ色の晴れ間が見え始めた。

「じゃ、行きますよ。千花さん」

千花の故郷を背にして、一人は白玉楼へ向かつて歩きだした。

第四十五話 ＜涙一閃＞（後書き）

やつとバイト終わりました；
いやあ、9時くらいに終わると思つたんですが、結局こんな時
間に；

申し訳ないです……

さて、明日ちよつと報告があります

次回作（一次創作）のヒロインが決定しましたw
ヒントは……そうですね。

次回作のタイトルは「Scarlet Stardust」です。

何と言うバレバレ感……w
でも、まだ未定なので、気まぐれな夜斗はすぐに考えを止めてしま
うかも……；

では、今日は徹夜でBOOです（キリッ

第四十六話 ＜思つは故郷＞

白玉楼の『道場』。

そこで姿勢を正し『』を構える一人の少年の姿があった。袖口のゆつたりとした着物に、一つにくくつた長い黒髪。少年は凜と静まり返る中で的を見据え、矢を放つた。カンと小気味い音が響いて矢が突き刺さると、少年は額の汗を拭つた。

かれこれ、一時間ぐらいいつして『』の鍛錬をしていた。

「精が出来ますね。千花さん」

自分の名を呼ばれ振り返ると、銀の髪の少女が微笑んでいた。千花も同じく微笑みかえす。

「あ、うん。しばらく『』を使ってなかつたから鈍つてるんじゃない
かと思つたら心配になつちやつて」

「ふふふ。頑張るのもいいけど、あんまり無理しちゃダメよ?」

「あ、幽々子様……」

いつの間にか、戸口に立つの幽々子がやんわりと微笑みながら立つていた。

「少し前に怪我が治つたばかりでしょ? 無理して体を動かした
ら、また傷口が開いちやうわよ?」

「でも、もうほとんど回復してるし……ッ」「
ダ、メ。これは私からの命令よ?」

言いかけた唇を、幽々子の指がそつとなぞる。

思わぬ行動に千花と、何故か妖夢までも顔を真っ赤にしてしまった。

「あら、どうしたの妖夢つたら？ そんなに顔を紅くして？」

「ゆ、幽々子様！ あの、えと……は、破廉恥です！」

「そう？ 千花さんはどう思つ？」

「へ？ ほ、僕はその……」

「もう、冗談に決まってるでしょ？ 一人してそんな顔しないでち
ょうだい」

「…………」

「…………」

顔を見合させて苦笑い。

すると幽々子が部屋に戻り、妖夢も道場を出て行くと、再び一人の
時間となつた。

「……なあ、千花」

不意に、声が聞こえた。

それは千花の内に潜む者の声だった。

「聖獣様？ どうしたの急に？」

「いや……その、せつかく平和な日々を送つてるとこり悪いんだが
れ。ちょっと大事な話をしようかと思つて」

「大事な話？」

千花は弓を收めると、縁側に腰をかけた。

「いつまでも、ここで厄介になつてゐる訳にはいかないよな」

「うん……そうだね。何となく、言いたいことは分かる」

「だからさ、俺たちの里を復興しないか？」

「復興……？」

内なる声は続ける。

「結局、あの田は死体を片づけただけで終わっちゃったし色々と中途半端だった。それに……」

「それに？」

ややバツの悪そつた声が聞こえてきて、千花は首を傾げた。

「「」」は一応冥界なんだ。いくらお前が半人半妖の身とはいえ少なからず影響があるだろ？ 助けてもらつたのにまた出て行くってのは無礼を重ねることになつちまうけどな」

「……そつか。聖獣様も帰りたいんだ」

「帰りたいって訳じや……ん？ 僕も、つてどうこうことだ？」

「ん、何でもないよ。じゃ、ちょっと幽々子様のところ行つてくる

そつ言ひて千花が立ち上がると、道場の戸をくぐつて屋敷へと向かつた。

……そんな後ろ姿を見つめる視線に、千花は気づかなかつた。

・ · ·

「え？ 使用人を辞めたい……ですって？」

話を聞き終えた幽々子は呆気にとられたという表情で千花を見つめた。

「……今まで「」でお世話になつてゐる訳にもこきませんし、それ

」「

「つここの前帰つたばかりなのに、急な話ね。……でも、そうね。

無理に止めはしないわ」

「すみません……何から何まで勝手ばかりしてしまって」

「いいのよ。気にしないでちょいつい。じゃあ、出立はつこにするのかしら?」

「出来たら早いうちに。でも、荷物をまとめたり色々と作業が残つてるから……三日後くらいこがちょっとうどここと思つてます」

「三日……やう。何だか寂しくなるわね」

「すみません……」

身を引き、頭を深く下げる謝罪と感謝を込めた礼をする。

幽々子も軽く頭を下げて応じた。

「故郷の復興、……かあ。大変そつだけど、頑張つてね」「はい、ありがとうございます」

「たまにはお手紙くれたり、あと、遊びに来てくれる嬉しいわ」

「もちろん、復興が終わればすぐに手紙を出します。必ず

「ふふ。楽しみにしてるわ」

部屋を出て、自室に戻ると使い慣れた室内を見回した。

もう、数日でこの部屋ともお別れだ。

そうだ、屋敷の皆さんも挨拶をしておかなくては。

世話になつた侍女達を探し声をかけていく。

だが、肝心の人物が見当たらなかつた。

一番世話になつた人物なので最後にしようと思つていたのに、どこにも姿が見えなかつた。

「……妖夢、何処に行つたんだろ?」

そろそろ口が傾くところに、一向に姿が見えない。

幽々子に伝えると、くすくす笑いながら彼女は答えた。

「妖夢つたら、しょうがないわね。たぶん、あの子はね……」

第四十六話 < 思つは故郷 > (後書き)

うわ、遅れた……

そして、そろそろお話を終わらせます。

無理やり感じこるか、いろいろおかしい部分がすゞぐありますが、

そこは作者の技量不足です……

今作は本当に申し訳ないがきりです……

ちょっと困るんで、今日はこの辺で失礼します

第四十七話 『 ちょっと背伸びな kiss 』

「 妖夢、ここにいたんだ」
「え……あ、千花さん？」

桜の木の根元でしゃがんでいた妖夢が顔を上げる。
微かに目元が赤く、妖夢はそれを思い出したのか「ゴシゴシ」と擦つた。

「す、すみません。ちょっと一人になりたくて」
「そつか。隣、いいかな？」
「ど、どうぞ」

ススッと横にずれると、妖夢の隣に千花も腰掛けた。

「こんな大きな桜の樹があるなんて知らなかつたな。幽々子様は特別な桜だつて言つてたけど……」「あの、何かご用でしうか……」「ん、ああ、ゴメン。今あいさつ回りしてたところだつたんだよ」「あいさつ回り……ですか？」

二人の間を風が薙ぐ。

黒と銀の髪が向かいあって同じように揺れる。

「 妖夢、色々とありがとうございました。最初から最後までお世話になりましたが、感謝しきれないほど感謝してるよ」
「え……あ、その……ど、どういたしまして」

途切れ途切れの返事だったが、千花は気にせず続ける。

「僕、故郷に帰るよ。帰つて里を復興させたいんだ。一人でやるから途方もないほど時間掛かりそうだけど」

「…………」「終わつたら、手紙書くよ。宛先が冥界でも届くよね……って、どうしたの妖夢？」

微かに聞こえる嗚咽のような声に千花が気づいた。よく見れば妖夢の体が震えていた。

「よ、妖夢泣いてるの……？」「…………な、泣いてません。別に。これっぽっちも、です」「…………僕が出て行つたら寂しい？」「当たり前ですッ！」

真っ赤な顔を上げてから妖夢が言った。

「前も勝手に出て行つて、せ、せつかく連れ戻したのに！ 故郷の

ためと聞いたら、今度は止められないじゃないですか……」

「妖夢……」

ポン、と頭を撫でると妖夢の瞳から涙がいつそう溢れた。

「…………めんね。色々と振り回しちゃって。僕が抜けたら、お屋敷の仕事がちょっと増えちゃうけど……」「…………」

「いえ、それは、大丈夫ですッ」

「…………つまり僕はあんまし役に立つてなかつたと

「そうじや、なくてッ！」

泣きながらフォローしてくれる妖夢に千花は微笑を浮かべた。

「まあ、一番頼りになるのは妖夢だし僕が抜けても大丈夫か

さて、と千花は立ち上がり埃を払う。

「本当に、今までありがとうございました。妖夢に助けてもらえてよかったです」「それは、ちょっと返事に困る感謝ですね……」

「そうかな。僕は正直に思つたことを言つただけだけだ」「あの……出立は何時なんですか？」

「幽々子様には三日後って言つたけど、荷物がまとまつたらすぐここでも行こうかなって思つてるよ」「え、じゃあ……」

「早ければ今日の夜にでも出発しようかなって」「そ、そんな！ 早過ぎますよー」

「……」「めんね。故郷のこと色々と心配なんだ」「…………」

妖夢は黙つたまま、小さくなつていく千花の背中を見つめていた。呆気ない、別れだ。

こんなお別れでいいのだろうか。

……私は、何か言えないのだろうか。

何か、出来ないだろうか。

そう思つた瞬間、すでに走つていた。千花の背中を追いかけて追いかけて、一步手前まで来て、

「千花さん！」

「え……何、妖」

妖夢が、目の前で顔を深紅に染めている。

千花が振り向いて答へようとした瞬間、その言葉が唇に遮られた。

その瞬間の出来事を理解するのに、千花は少々時間がかかった。

「…………い、あ、えと、今…………」

失礼しますッ！」

そのまま脱兎の如く走り去る妖夢の背中を、千花は呆然と見つめていた。

「ほひ……これはこれは。青春の何とかひやひや

「わ!? 聖獸様! いきなり声を出さないでよ!」

生きでいて正解だったしやないか

「アーティストのためのアートセミナー」

が上手であるぞ

「ああ、うん。つと、その前に、最後に一つだけ」

「んん？」
接吻以外に何かするのか？」

「おお、そこには頼んでた」とかあ？

L

•

「はいはい！ 三人とももう少し近寄つて近寄つて！」

「いやあ、奴夢は……」私が千花さんの隣に立つから

「アリス、アリス、アリス！」

「もう！ 私が間に入りますッ！」

「ああ、うう」

三人が庭で並ぶと、文は嬉々としながらカメラを構える。

「いいですね～。これ、新聞に使ってもいいですか？」

「ゼッタイ、ダメです！」

「あやや……何だか妖夢さんが恐いですねえ……ではー」

簡単な合図の後、文がレンズを覗きこみながらシャッターを切った。
そして、妖夢たちが出来あがつた写真を受け取る時はすでに、残念
ながら千花はもう旅立つてしまつた後だった。

第四十七話 < ちよつと背伸びな kiss > (後書き)

えー、明日最終回＆あとがきです。

いろいろと書いたい」とはあります、今作についてはあとがきで。

お気に入り登録、コーナー登録、ありがとうございます。

このあとがきで何度も失敗作だの何だのばやじてたのに評価ポイントまでくださってホント嬉しいです。

それと、空想夢もお気に入り登録件数100件になりました。
重ね重ね、ありがとうございます。

ヒローゲ

「見事なものね。あの荒れ果てた有様を、たつた一人で修繕するなんて」

人々が賑わう里の様子を、八雲紫は小高い丘の上から眺めていた。その傍らには、黒髪の青年が立っていた。

「里だけ直して、あとは僕たちだけで生活しようかと思つてたんだけど、近くで妖怪に襲われてる人を助けてたらこんな風になつちやつて」

「……ま、いいんじゃないの。一人しか生活しない里なんておかしいもの」

「はは、そうだね」

屈託なく笑う青年の横顔に、紫も笑みをこぼした。
あれから十年。

能力が暴走することもなく彼は平穏に生きていた。
彼が成長したからだろうか。

身の丈も、前に見た時に比べたらずいぶんと大きくなっているし体つきもかなり逞しくなっている。

「この十年。色々な事があつたよ。何度かこの里に襲撃があつたりしたし、けつこう危ない時もあつたけど」

「能力で暴走することはなかつた……何故かしら」

「さあ。僕にもよく分からぬよ。強いて言えば……そうだな。おまじないをしてもらつたからかな」

「お呪い？ そんなもののいつ」

「あ、そういうえば。紫さんに頼んでたアレ、ちゃんと届けてくれた

？」

紫が言葉を遮られ怪訝そうな顔をしたが、すぐに頷いた。

「ええ。少し前に届けたわ。掃除か何かしてる最中で忙しそうだったから直接ではないけれど」

「ありがとう。じゃあ、もうそろそろここに来るのがな」

この里を見たら、あの二人はどんな顔をするのだろう。
それが少し楽しみだ。

「……ごめんなさいね」

「何が？」

急に謝罪され、思わず田を丸くする千花。
紫に謝罪されるようなことあつただろうか。

「あの一件、ちょっとやり過ぎたな、つて。結局ただの杞憂に終わ
つてしまつたし、貴方には本当に迷惑をかけてしまつて」
「別に、気にしてないよ。僕も、聖獣様も」

「……そう。それならよかつた」

「あ、千花さーん」

一人が話をしていると、一人の男が手を振りながら近づいてきた。
彼は、この里の門番を務めている者だ。

「どうかしたの？」

「千花さんを訪ねてきた人たちが来たもんですから、それを伝えに」

「僕を訪ね……あ、幽々子様と妖夢さんか」

「あら、ここでも敬語なの。相変わらず真面目な方ね」

「幽々子様！」

幽々子は千花の姿を見ると田を見開いて、

「あ、あら？ 貴方つて、そんなに背が高かつたかしり……？」

「そりや、僕だつて十年もすれば成長しますよ。幽々子様はお変わりないみたいですね」

「そうねえ。毎日元気に「飯食べてるもの」

「あはは……変わつてないね。本當だ。で……」

何故か恥ずかしそうに幽々子の背に隠れる妖夢を見つけると、千花はちよんとしゃがんだ。

「久しぶり。妖夢さん」

「お、お久しぶりですッ。あの、えと、本田も「健勝の」と、あのう

「何をそんなに緊張してるのよ。手紙を見つけて一番に大騒ぎしてたのは貴女でしょっ？」

「ア、それは幽々子様が手紙を何処にしまったか忘れたせいで……！」

「せりやつて人のせいにしないの」

「わウ……」

相変わらず主には敵わないらしい。

千花は白玉楼での事を思い出し苦笑した。

「あ……幽々子。これから一緒ににお酒でもどうつかう？」
「お酒美味しいのよ」

「ホント？ ジヤあ、「駆走にならつかしく」

「あー、ダメですよ幽々子様！ こんな毎間つからお酒なんて……」

「じゃ、あっちのお店ね。早く行きましょ

「も～！」

「まあまあ。色々と一人で話したいことがあるんだよきっと

「……ですよね。はあ」

千花と妖夢は一人を見送つてから里を歩いた。

千花は時々里の修繕の話を交えながら社へと向かつた。

ちょうど、今は千花の家もある。

「千花さんって、凄いですよね」

不意に、妖夢がそんなことを言いだした。

何が？ と首を傾げる千花。

「だつて、一人でこうして里を元の姿に戻したじゃないですか。前に来た時と同じ場所だとは信じられないくらい、立派です」

「僕一人つてわけじゃないよ。もちろん聖獣様も手伝ってくれたし、助けた人々もみんな手伝ってくれて、やつと出来上がったんだよ」

「この幻想郷に、もう一つ人里が出来たんですね」

「まあ、そういうことだね」

妖夢が千花を見上げる。

白玉楼で一緒に働いていた時は、妖夢より頭一つ分程度大きかった

千花の背丈は、今では二つ分ほど高くなっていた。

視線に気づいた千花が妖夢を振り返る。

吸い込まれそうな黒の瞳に、妖夢は思わず視線を反らした。

「どうかした？」

「あ、いえその……」

もじもじしながらも視線を戻すと、真っ赤な顔の妖夢が言った。

「……もひ、背伸びじや届きそつにないですね」

「へ？…………あ」

言葉の意味を理解した千花も間もなく赤面する。

そして一人して顔を真っ赤にさせて、笑った。

「え、えつとそうだ！ 幽々子様のところ行きましょうか！」

「あ……えと、僕はしばらくここで」

「いいから！ 一緒に行きましょうよー！」

「わ！ ちょっとそんなに強く引っ張らないでも……！」

強引に袖を引っ張られながら、千花と妖夢は社の階段を滑るようにして下りていった。

……そんな二人の後ろ姿を、一匹の蒼い狼が社の屋根から見つめていた。

「やれやれ。今後あの二人はどうなるんだか……」

興味があるんだか無いんだか、狼はふわあと欠伸をして瞳を閉じてしまつた。

それはそれは、とっても楽しそうな寝顔だった。

ヒューローク（後書き）

あとがきは30分後にツ

あとがき ～ちょっと背伸びなkiss～

このたびは東方二次創作第4弾『ちょっと背伸びなkiss』を読んでくださって、ありがとうございました。

今はだいたい11万文字程度、ちょうど前作の空想夢本編と同じくらいです。

えー、いかがでしたでしょうか？

閲覧者数は前と相変わらずで、俺としてはもう少し伸びてくれると嬉しいかなと思っています。

週のアクセス数がもう少し……だいたい2000くらいは欲しかったかな；

まあ、今作でそこまで求めるのは野暮と言つか何と言つか……

さて、作者として一言。

本当に申し訳ないです……

今作はちょくちょくぼやいている通り、『失敗作』なんですが、理由は、細かく読んでいる方がいればすぐわかるはずですが、簡単な例を一つ挙げる

・文が最初に千花の里を訪れた時と、蒼狼の回想シーンの時間軸が合わない

もしかしたら読者の方には気づいていた方がいたかもしれません。

今作、実は3話辺りまでのプロットしか書いていません。

そもそも、俺のプロットの書き方が雑なのも原因なのですが、綿密なプロットなんてめんどくせえ！ とほとんど勢いだけで書いていました；

ちょうど同じ時期に考えついた海鳴譚も、勢いだけで書き続けよう

かと思いましたが、敢え無く断念。

そのまま書き続けるのも失礼と思つたからです。

お気に入り登録、評価等してくださった方には、本当に申し訳ないです……

では、一応今作の主人公などの解説をば。

・オリジナル

『夕凪 千花』

シリーズ初の男主人公

活動報告を見てくださつた方はご存知かもしませんが、『夕凪』というのは夏の季語が元です。

同時に『千花』という名前も夏を入れて『千夏』にしようかと思つていましたが、止めました。

『夕凪 凜』

本当はもう少しキーキャラになる予定だつた妹。プロット不足というか、勢いだけでは文字通り話になりませんね；

『夕凪 志星』

千花、凛の母親

志星の星を「ホ」と読ませたのは、俺の好きなゲームのキャラより拝借したからです

『蒼狼』

書いていて、前作のカホリと全く同じだといつてござついた。

過去との繋がりがイマイチ

実は、こいつは後付けキャラなんですね……；

と、色々とダメな部分が目立つ作品となつてしましましたが、評価

してくださった方々や、いつも感想をくれるお一方、ありがとうございます。

次回作は……早ければ今月中に公開できるのかな。

主人公はまたオリジナルで女の子。

お話のイメージは何となく出来てるので、プロットがしつかり出来上がればグダグダにはならない……と、思います。

ええ、今回あとがきはちょっと少なめで終わらうと思います。
あんまりネガティブな発言しても面白くないんで、

最後まで読んでくださった方々、お気に入り登録やコーナー登録、
評価ポイント等、本当にありがとうございました。

また、次回作や完結してゐる作品も、読んでいただけたら嬉しいです。
まるで成長していない……
と、言われないよう頑張るへたれな小説家志望、夜斗をこれからまたよろしくおねがいします。

それでは……

あとがき　～ちょっと背伸びなkiss～（後書き）

最後まで読んでくださいて、ありがとうございます。
次回作はまだ未定ですが、何かあれば活動報告の方で、報告します。
時々チェックしてみてください。
それでは、またの機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507t/>

ちょっと背伸びなkiss

2011年7月12日22時35分発行